
二人は神の力を 無色の緋

夕雲 橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人は神の力を 無色の緋

【Nコード】

N6188T

【作者名】

夕雲 橙

【あらすじ】

神と呼ばれる存在と人間が争いを繰り広げる——昔より力を持つ人間は、数々の神と戦いを繰り広げてきた。

ある日、高校生の主人公は強大な力を持つ怪異に巻き込まれ、同じ高校に通う「空色」という女の子と共に立ち向かう。

特色として、戦闘描写ありのファンタジーのような小説です。ファンタジーっぽい（キャラや設定）コメディーのようでもある（会話文が多い）どのジャンルに入れるべきか悩みました。和風な

神様あたりの名前が出ますが、あんまり関係ないです。

序章（前書き）

まず、この小説に目を通して頂いてありがとうございます。

昔書いたお話です。個人的に思い入れがあり、お気に入りなので掲載しました。

投稿初心者で色々と分からないことがありますので、序章だけ載せました。

序章

・序章

夕暮れの太陽が世界を緋色に染め上げる。

斜光に照らされ周囲を木々に囲まれた古い神社、静かな時間が流れる。

長い黒髪を後ろに束ね、薄化粧に白装束の若い女性が、境内で小さな木の椅子に座り目を閉じていた。

白いその身を夕日色に染めて、深く長い複式呼吸を繰り返す。

風も無いのに周囲の木々が何かに怯えたかのように一斉に揺れてざわめく。

気が付くと、煤こけた衣服を纏った老僧が鳥居の下に立っていた。老僧はお茶友達に話しかけるように、白装束の女性へ気軽に声をかける。

「この木々からは変わり者の、あれの力を感じるのう、懐かしい匂いじゃ。主は信仰を行なう家系のようだが、悟りを解いたかね、沙羅と呼ばれる者」

にこやかな笑みを浮かべ、瞑想する女性に尋ねた。

女性は目を閉じたまま答える。良く通る、そよ風のような声で。

「私は戦いも力も望んでいないのですよ。平穏に暮らしたい、望みはそれだけ。それを壊すのなら……」

女性が薄っすらと目を開いた。

目の前の老僧は人間の視覚で捉えるものと違う存在であった。姿形に惑わされぬよう、視線はその姿をすり抜け、夕焼けの空を見た。……相手が何者であろうが戦うのみ」

諭すようにも、なだめるようにも聞こえる優しい話し方で、女性は戦闘の火口を切った。

老僧はにこやかに笑い手を広げる

「そうかそうか、菩提樹に到達する意思は無しか。その力惜しいのう」

何も持っていないかった手の平には、手品のように白い鳩が一羽現れ乗っていた。

「ちなみにワシはな……」

老僧の呟きに合わせ白い鳩が羽を広げた。

神々しい夕日を背中に浴び、橙金色に輝く鳩が後に続いて喋る。

「緊那羅きんなんらと呼ばれておる、聞いたことあるかな？」

「八部集の疑神と存じます」

緊那羅は音楽を操り、その音色は神をも惑わせる半獣半人の疑神。

「そうじゃ、参る」

老僧の姿が消え、白い鳩がさらに大きく羽を広げた。

鳩が緊那羅の本体であり、老僧はこの世界での乗り物代わりであった。

骨ばった鳥の足、背中には白い羽、腰から上は中性的な線の細い美形の人物、緊那羅の実体が現れた。

同時に緊那羅は力を発動させ、指で目に見えぬ楽器をかき鳴らす仕草をした。

世界の音が止まる。

音の動きは空気の振動。音を操る力により、空気そのものの活動が停止。

変化した空気は光の浸透性にまで影響を及ぼす。

沙羅の女性には、周囲全体が透明なゼリーに背景を描いた絵のよう

うに目に映る。

緊那羅は沙羅の女性が抵抗すると思っていた。しかし、動かぬ沙羅の女性の行動を怪訝に感じ、口に手を当て考え、尋ねた。

この場で喋れるのは空気を操れる緊那羅のみ。

「はて、力を使わぬのか死んでしまふぞ。それにあればどうした、

そなたと行動を共にしていると聞いたが」

呼吸も出来ず、固定された空気の中で身動きも取れない沙羅の女性性は、薄目を開いたまま不適に笑う。

緊那羅はある世界を支配する世界樹と呼ばれる存在が作り出した、この世界では神のような力を持つ使者。

対する沙羅の女性は人でありながら、神の力を持つ者。

力を持つ者は太古より度々現れた、そして苦難に遭う。

受ける苦難とは人々から畏怖され迫害され、力を持たない人との思想の違いにより生きる術を奪われること。

または同じ力を持つ者達、神や幻想の世界の住人に狙われ命と力を奪われた。

それを取り越え生き抜いたわずかな者達、その中でさらに時代に選ばれた者は、伝説や信仰の中に後世に名を残してきた。

世界中に広まった神話に伝わる存在。それらが今、何の変哲もない日本の片田舎の神社に姿を現していた。

白装束を纏いし沙羅の女性は力を出せず、表面は穏やかに構えていたが内心は焦っていた。

『何故、力が発動しない。まさか……』

心当りはあった。ごく最近知ったのだが、彼の子を身籠っていただからこそ尚更、自分と新しい命を守ろうと鬼神がかつた強さを手に入れていたのだが。

『力が不安定、いいえ、この子が力を吸い取っている』

恐らくは自分の子供も何らかの力があるのだろう。

ここ最近は一界の者を見る機会がめっきりと少なく、穏やかな日々だった。

実は沙羅の力が弱まり、古き者達から発見されにくいだけだった。それに八部集の一員の援護もあったお陰で力を使う機会も減り、力の減少を自覚できなかった。

『こんな時に、夜叉と離れさせられた……相手の罠か、不覚!』

同時刻にもう一名この世ならざる者が現れた。沙羅の女性を守護していた夜叉には、彼氏の警護を依頼していた。

夜叉が結界を張った神社に隠れていたが、同格の神に見つかってしまい、沙羅の女性は戦闘にそなえて意識を統一していた。

「おや、命が重なって視える。そうか、お主生命を宿したか、そうかそうか、次代に力を渡したな」

沙羅の女性が動かないので様子を伺っていた緊那羅は、独り頷くと天を仰いだ。

「邪魔者もおらず、これはワシに力を奪えという天命かな」

緊那羅が羽を広げ、余裕を持った態度で近づく。

風景、目での認識は物体に対して光の反射を脳が識別する。

目に映る風景は空気というパレットに広げた絵の具のように、緊那羅はかき混ぜる筆のごとく。

光の粒子を閉じ込めた空気を押しのけ、世界そのものを混色し、引き伸ばし混ぜながら緊那羅は歩を進める。

沙羅の女性は視覚による認識が崩壊する世界の中、自分が周囲一帯ごとオレンジゼリーに包まれ、スプーンで崩されるような気持ちを味わった。

『このままでは殺される、早く来て!』

心中で冷や汗を流しながら、それでも毅然とした表情で沙羅の女性には相手から目を離さなかった。

細く優雅な腕が伸び、複雑に混じり合い濁った色と化した空気を押す。女のような細い指先が、沙羅の女性の白装束の上から腹部に触れた。

「では力を頂こうかの」

自分の命と小さな命を奪おうとする相手に対し、腸が煮え滾る怒りが沸き起こる。沙羅の女性は最後の力を振り絞り、一気に息を吐いた。

「かつ……！」

肺の中の空気を一気に絞り出し、相手の腕に吹きかけた。

「おおっ」

人間には動かせぬ筈の空気が移動し、腕を撫でる。緊那羅の腕が粘り気を帯びた空気に押され、揺らめいて見えた。

何か力を隠しているのではと警戒した緊那羅が、その手を引いた。肺の中の空気を失い酸欠状態に陥った沙羅の女性は、血の気が引いた青い顔で祈る。

「お願い、守って……」

「驚かせよって、今のが最後の力のようにじゃな」

沙羅の女性が意識を失い、苦笑した緊那羅が再び近寄る。

序章（後書き）

この次の章から主人公が出ますが、話の雰囲気はこんな感じです。
書き直したものを順次掲載していきます。

ご意見、ご感想がありましたら書いて頂けると励みになります。

序章二 夜叉（前書き）

序章が長かったので二つに分割しました。後半です。

一度投稿した章の編集が分からず、こんなになりました。

序章二 夜叉

「待たせた」

無音の世界の中、緊那羅とは違う声が聞こえた。

同時に神社の石畳の隙間から、緊那羅の足元に一枚の緑の草が生える。

混濁した世界の中、その一枚の葉だけが青々とした姿を保っていた。

さらに伸びた葉は鋭い刃物と化し、前に踏み出した緊那羅の足首を切り落とす。

切り離された足首が、滑らかな切断面を合わせ石畳を転がる。転がった足首から先は、石畳の隙間より次々と生える刃物状の葉に刻まれ粉塵と化した。

「早い、もう来たか」

緊那羅が繊細な造りの顔を歪ませ、羽を広げ後ろに飛び下がる。

その背後に、木々を編んだ環が浮かび上がる。

木々の環の中空の部分は蓄えた水面のような闇が窓ガラスのようにはまっていた。

環に囲まれた闇から、黒い手が伸びた。

続いてもう一本腕が伸びる。さらに手が生え、合計六本の腕が緊那羅を捕まえた。

腕の先は巨大な鍵爪と化し、緊那羅を挟むと闇の中へ引き釣り込む。

「させんわ!」

緊那羅は叫び、力により場の空気を圧縮し、巨大な人形を生成。六本の腕から逃れようと、抵抗を試みる緊那羅の白い羽が舞う。色彩が集まり蠢く、神社の境内に収まりきらない空気の巨人が立ち上がる。

巨人の足跡を捺印した石畳が紙のように千切れ、土色を世界に滲

ませる。

腕に当たった鳥居が粉々に吹き飛び、砕けた石材が花のような模様を描く。

木々を編んだ環が攻撃を受けて揺らめき、一瞬だけ暗闇の環の存在が薄れ、現世への維持が途切れた。

すぐに復活した環の中から、限りなく透明な無数の細い糸が伸び、糸は自由自在にくねり絡みつき緊那羅の全身を縛り上げる。

観念したのか、緊那羅が操る空気人形の抵抗が止まる。

緊那羅は目を細め懐かしげに、親しげに闇の中へと話しかける。
「ほほう、久しぶりの再会だが、いつの間に力を上げておったか。神々を返り討ちにして取り込んだと聞くが、真実のようじゃのう。ふむ、誰が一番先に鬼を見つけるかのう。ワシでは無かったか、ほうつつほうつつほう」

顔を糸で縛られ無様な表情のまま、笑う緊那羅が闇の中へ消えた。

数秒後、一陣の風が吹く。

混沌と色彩が混ざり、濁ったドブ川の底のような景色を風が洗い流した。

爽やかな風の流れは力を失った空気人形を溶かし、緊那羅の力が消えた事を示していた。

木々の環に囲まれた闇の中から、蠢く影のごとく見える全身黒尽くめの人物が現れ、倒れた沙羅の女性の傍らに立つ。無表情で彼女を抱きかかえた。

「申し訳無し、そちを危険に晒した」

抱かかえたまま、口付けして人工呼吸する。

沙羅の女性の胸が動き、軽い咳を発して意識を取り戻す。

目を覚ました沙羅の女性が、自分のされている行動に驚き、目を見開いて動けなくなつた。

「やや鼓動が乱れているが、呼吸はできるであろつ」

「や……夜叉、来てくれてありがとう。本当に危なかった……この状況は？」

「緊那羅は我が世界に引き込んだ、いずれ消滅する。そちの蘇生を手早く済ませる為に、空気を肺に送り、酸素を摂取させた」

困った顔の沙羅の女性は、相手の行動に悪気が無いと分かっていたので諭すように話す。

「えーと、助けてくれてありがとう。でもね、人工呼吸したことは、彼には黙っていて」

「我は隠し事をするような行為をしていないが……人としての何かしらの訳があるのであろう、承知した」

「それと、もう下ろして下さい。治りましたから」

「そうか。それは良かった」

沙羅の女性を下ろした夜叉が、静かな声で話しかける。

「そちの彼は無事だ、あちらは名も持たぬ小物で陽動であったようだ。あわよくば人質に、という思惑であったのであろう。やはりこちらが本命であったか、相手が緊那羅であつては我の森で困う結果も効果が薄かったようだ。手落ちであつた」

彼氏の無事を聞きほつとした沙羅の女性が、大きな苔むした庭石に座り肩の力を抜く。

「手落ちだななんて……そんな風に言わないの、夜叉にはいつも助けてもらっているわ。今回も夜叉が来なければ、私はどうなっていたか、この子が奪われるところだった。感謝してるし頼りにしてるわ」
まだ膨らみの目立たないお腹を、沙羅の女性は愛しそうにさする。

整い過ぎて作り物のような顔で無表情に見ていた夜叉が頷き、口を開いた。

「感謝の言葉、ありがたく頂戴した。さて早急かもしれぬが、今後の行動をこのように致したい。再び襲われると我もどこまで守れるか疑問が生じる。敵も名のある者が動きだし、手段を選ばぬようになってきた。提案ではあるが、そちがやや子を産むまで、我が世界

で匿う。私の造りし仮想空間だが、人が住んでも問題あらず、発見される可能性が激減する。いかがであろうか」

違う世界で生活する。夜叉の力に守られるのなら現世よりは安全かもしれないが、当分の間人間の世界を離れ神隠しにあった状態になる。

沙羅の女性はまず、彼氏に会えるか確認した。

「彼は一緒に住めるの？」

「力がある事実を知られるが、構わぬのか？　こちらの戦いに余分に巻き込むかもしれぬ」

「そうよね……危険に遭わせる訳にいかないわ。私だけで行きます」

「そうして頂きたい」

「そして、子供が産まれたら私は戦いから離れたいの。どうやら力をこの子に持たせていかれたみたい。だからさっきの戦い、手も足も出なかったわ」

「隠居なさるのか？　緊那羅の片腕は飾りになっておったが？　故に我もあの時間で倒せた。自慢では無しに、八部集はそれぞれが強力であるぞ」

「最後のあがきだったの、でも一応は効果あったのね。でもこれから、この子に力を渡してどんどん力は薄れる。私はいずれ使い物にならなくなるけど、役立たずでも守って下さる？」

一瞬だけ夜叉が視線を遠くに向けた。見放したのか、それとも夜叉なりに感じるものがあつたのか。造られた存在である夜叉には、自らの感情が理解できなかった。

「当然だ。我は沙羅の人を守ると約束し、そちは今まで果敢に戦った。ここで見放せば我は心を迷わせ存在意義を失う。人を狩る機械には戻りたいと思わす」

夜叉の背後に、異世界へと繋がる暗闇を湛えた木々の環が現れる。「近しい者に挨拶などあるのであろう、準備が整えば呼び出すがい」

「夜叉、一つだけお願いしてもいいかしら？」

「何であろうか」

「この子の名前を考えて欲しいの。男の子でも女の子でもどちらでも使える名前で」

夜叉は沙羅の女性のお腹を暫く眺め、当然のように言った。

「女」

「あら、分かるの？ 女の子なのね。夜叉なら何て名前にする」

神々との戦いであろうが、戦闘で体をいくら破壊されようが冷静さを保つ夜叉が、新しい生命の名前を付けるという行為に躊躇した。「そのような大事、偽りの生命である我が関わって良いのであろうか」

「いいのよ、夜叉は命の恩人で、私にとっては世界一の相棒なのよ」
「むむ……我を頼っているのだな。暫し待たれよ」

夜叉がどかと地面に座り、座禅を組んで瞑想する。

深く思慮すること一分。

カッと目を見開いた夜叉が、空中に指で文字をなぞる。

『緋環』という文字が空中に浮かび上がる。

「ヒリンと読む……命名した自然と時はここにしかあらず、命の色、この世界の色、そしてそちら娘へ繋ぐ命の環である」

「いい意味だわ、一期一会で命を大切にとって意味ね。この子は今から緋環よ。よろしくね、夜叉おじさま」

「何だおじさまとは……うむ、良かろう」

空を焼くような夕焼けを眺め、二人は小さく笑った。

序章二 夜叉（後書き）

この次から主人公の女の子が出ます。

転写、書き直しをしながら戦闘後のシーンに違和感とオチがほとんど伝わっていない文章だったのが判明。

そのままでは載せられないので、書き直して……載せるかもしれないせん。

ご意見感想お待ちしています。

参考にさせて頂いて、修正できる箇所はできるだけ修正していきます。

一 始動（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

主人公 御裏 おひら 命 みこと が登場です。

学校に行こうとして異変に出逢います。

少しでも楽しんで頂けたら、自分もこの子達も幸いです^^

一 始動

「グッドモーニング。さあ、お便り一枚目はペンネームのりっこさんから……」

朝の6時。ラジオから『おはようテンション』という番組が、聞きたれたBGMと共にテンションの高い男の声で流れる。

おんかい 御裏 命は目を覚まし、ぼやけた頭から霧を追いつくように頭を振った。

目覚めと同時に、頭の中で軽い爆発に似た感覚。

激しく脳を揺さぶられるような衝撃を感じ、脊椎に振動が響く。細胞が焼ける焦げ臭さが鼻の中に漂う。

頭を振ると、首の後ろから後頭部にかけてを思わず手でなぞる。

「ふう……いい目覚め……あれ、俺ラジオ付けたまま寝たのか？」

恐らくは本人だけが感じるであろう、脳を破壊される違和感。

何年も前から頻繁に発生し、感触を感じるだけで、実際には肉体に異常が発生していないと理解していた。

しかし何度経験しても、脳みその中で爆竹を鳴らすような、命の危機を覚える感触には、いつまでたっても慣れることが出来ない。

「私の恥ずかしい話。昔からつい最近までずっと『ねぼけまなこ』の事を『ねぼけなまこ』だと思っていました。最近、友人に話したら大笑いされて……」

ラジオから流れる、お便りを読み上げる声に御裏は独り言のように突っ込みを入れる。

「ああ、分かる分かる……って、そんな訳ないだろ。なまこが寝るのかよ、それ以前にねぼけようにも目が無いって」

起き上がりカーテンを開けると、眩しい朝日が差し込んだ。

今日は快晴。学年が変わり春の時期、衣替え前の制服は少し暑い。薄い下着を着て行こう。そんな事を考え、思いつき背伸びをした。

ラジオに一瞬だけノイズが混じる。

スイッチを切ろうと手を伸ばし、異変に気づき押しかけた指を止めた。

「さあ、お便り一枚目はペンネームのりっこさんから。私の恥ずかしい話……」

先ほどと全く同じ放送が、巻き戻して再生されたかのようにラジオから流れる。

「ふうん」

御裏は眠たい目をこすり、唇を尖らして呟く。

「同じネタを何度も聞いても面白くないな。今日は無事に学校に行けるかな……」

ため息と共にラジオを切る。

「やっぱり俺の頭、どこか故障しているのかな」

二階にある自分の部屋を出て、廊下を進み階段を降りた。

一階では朝ごはんを用意していた母親が、テーブルの端に座りパんに手を伸ばした御裏に話しかける。

「さあ、お、便り一、枚目は……」

「はいはい」

ラジオと同じ台詞を吐いた母親が眉間に皺を寄せ、再び口を開き、お便りの続きを妙なテンポと区切りで話す。

母親が実際には「おはよう」とか「ちゃんと聞きなさい」もしくは、「忘れ物は？」等といった日常会話を話し、自分だけが違うように聞こえていることを御裏は知っている。

俺やっぱり変な病気かな？

考えながらパンと目玉焼きと野菜を茹でた朝食を食べ終える。コーヒーを飲み、ラジオと化した母親に行ってきますと告げて外に出る。

通りすがりの会社員だろう、スーツ姿の男性が携帯で話している内容もラジオと同じ。自転車に乗り後ろから追い越して走り去る、

大学生とおぼしき二人組もラジオと同じ会話を交わしていた。

ゴミ捨て場を漁っていたカラスが、ラジオ放送の声で鳴きながら飛んで逃げた。

「おおー新鮮、そんで新しい発見だ」

ラジオの声だが、テンポはいつものカーカーだった。

あまり違和感が無く、カラスはカラスだと分かる鳴き方に感心して、飛び去るカラスを眺めていた。

普通に歩いて三十分で、御裏が通う吉国史高校^{きこくし}へ到着。生徒数は三百人弱、偏差値はそこそこ上。地元では入れば親がそれなりに安心すると言われる学校だ。

登校する生徒の波に流されるように、校門から校庭へと入る。

何事も無かったかのように歩く御裏の傍を、同級生がラジオの続きを話しながら笑顔で通り過ぎた。

校舎の入り口で立ちすくむ女子生徒の一人が視界に入り、御裏は思わず足を止める。

彼女は青ざめた表情で御裏の立つ方向、校門を見ていた。

鞆を胸の前で抱きしめ、何かを必死に訴えるような力の籠った表情でじっと立っていた。

近づいた御裏が、さりげなく声をかける。

「よう。ところで俺の声、ちゃんと聞こえてる？」

声が聞こえたのだらう、彼女は目を見開いて御裏の顔を見返す。

「きこえ……ます」

「俺もだ。どうもあちらこちらから、口を開けばラジオの声が聞こえるような気がするとか？」

「私だけじゃない……あんたも……」

「そういう事。これ聞こえているの一部の人だけだから。やり辛いだろっけど、しばらくすれば元に戻る。それまでは話が聞こえているように、適当に相槌とか打って誤魔化しときな」

それじゃ、と言って立ち去ろうとした御裏の腕を彼女が掴む。

力いっぱい掴んだ行動には、細い腕のどこにこんな力がと思わせ、本気で放さないという意思が込められていた。

彼女が御裏の制服を握り締める手が、微かに震えているのを感じた。

「んーと、怖い？」

「こ、怖いに決まってるでしょ。こ、この状況で、信じられない。一人にするの、いたいけな女の子を」

「俺も怖い、どっちかと言うと、自分でいたいけと言う君の目が据わってるから。それに困っているのはお互い様だと思うけど」

御裏は真面目で優秀な生徒ではありえず、むしろ軽く問題視されている部類だった。

艶のあるかなり長めの茶髪。背が高くスタイルは良いが制服は丈が短く、もはや別の学校の制服のような目立つ違反だらけ。

大きくて丸い綺麗な目をしているが、その視線にはどこか棘を感じる。

外見が少し怖い御裏に臆せず、初めて会話したであろう女子生徒は食って掛かる。

「あんた、いかにも強そうじゃないの。私を守ってよ」

「はあー……いきなり何言ってるの？」

「他に頼れる人いないのよ。このまま一人でいたら頭がおかしくなりそう。この状況、普通じゃないでしょ、皆が何かに洗脳されたみたいで変だと思うよね。まさか、宇宙人が侵略してきたとか」

「ああー宇宙人ね、それは考えた事なかったなー」

「朝起きて家からずっと同じ台詞を聞かされて、親は仕事に行つて会えなかったし、学校に行けば何か分かるのかと思っただけと同じで…… どうしたらいいの」

彼女は必死に御裏の顔を見つめ、真剣な眼差しで訴える。長い睫の端に薄っすらと涙を浮かべて。

一方の御裏は、俺に泣かれても……面倒なので逃げようかと思

つつ、近くで見た彼女の外見に感心を持った。

遠くから見ると控えめな印象を受けたが、色白で整った顔立ちをしている。

全体的に白く滑らかな顔つきなので、遠くからだと分らないが、目・鼻・口と立派に自己主張している。それらがバランスを取り合い、背中まで伸びた真っ直ぐな黒髪が似合う……かなりの美人だった。

御裏とは正反対の、いかにも真面目そうな、注意されない程度に抑えた格好をしている。

例えるなら美術館に飾る絵に描かれそうな、日本美人とも言える外見をしていた。

一 始動（後書き）

どうでしたでしょうか、文章がまだまだ未熟ですね。
彼女は二人目の主人公、空色さん登場です。

二 二人（前書き）

空色^{そらいろ} 緋環ヒロイン^{ひりん}？ 登場です。

二 二人

二人が話している間にも、何人かの生徒が冷やかしの眼で眺めながらも傍を通り過ぎる。気がつけば周囲に学生は誰もいなかった。人気が無くなった校庭を、涼しい風が一房の帯のように流れた。

「教室で、前から後ろからも左右からも、同じ台詞をずっと聞かされたら。私……」

もう立ち去る素振りを見せない御裏の服の袖をぎゅっと掴み、彼女は下を向く。

混乱して何が何だか、ひょっとして自分がおかしくなったのかと疑い始めた時、不意に御裏が普通に話しかけた。

彼女にとって、自分が正常だと示す唯一の命綱だった。

「確かに教室という密室であの状態はきついな」

御裏の言葉を遮るように、授業開始を告げる電子音のベルが鳴る。校舎を見上げた御裏が、窓際の生徒達の影を眺めながら言った。

「あ……遅刻した。お前のせいだぞ」

「この非常事態に授業受けるつもり……不良っぽいのに遅刻が気になるの」

泣きかけていた彼女が顔を上げ、信じられないと呟いた。

「俺さ、ちゃんと卒業する気あるから」

伸ばした髪の上から首筋をポリポリ掻き、御裏はため息混じりに話す。

「まだ学年始まったばかりだろ。俺さ、去年ぎりぎりだったけど、今いいイメージを植えておけば、今年は過ごしやすくなると思うんだよな。俺にも色々事情があつてさ」

指先が白くなるまで掴んでいた彼女の腕から力が抜ける。

「よほどの事情があるんだね。いきなり会ったばかりの他人が、勝

手に引き止めて迷惑だったよね」

名残惜しそうに校舎を見上げる御裏から離れ、鞆をギュツと胸に抱きしめる。下を向き、自分に言い聞かせるように呟く。

「私一人で何とか……………どうせ一人だし」

「ま、いつか」

ふわふわした茶色の髪の毛を手櫛で撫でながら、御裏は明るい声で振り返る。

「今日は別の事情ありだし、さぼろうぜ」

「え、え、いいの？」

諦めていたのだろうが、助け船を出され彼女が驚いて顔を上げる。
「出席は惜しい、実に惜しい。だけど一日中のりっこさん聞かせられるのも嫌だな」

校舎の入り口の低い階段を飛び降り、鞆を肩にかけた御裏はにっ
と笑う。

「泣きそうな顔で、入るなって脅迫する怖い奴もいるし。気分転換にその辺ぶらつこう」

御裏の明るい笑顔に一瞬だけ見とれた彼女が、鞆を振り上げて階段を飛び降りる。

「怖くない、それにまだ泣いてない。脅迫した覚えなんてもっとな
い。誇張しすぎ、取り消しなさい」

「うわ、怒った怒った」

笑いながら逃げた二人を見つけた先生の一人が、二階の窓を開けて眉間に皺を寄せ何か叫んだ。

『さあ！ お便り一枚目はペンネーム！！！！』

「ごめんなさい、急用です！」

御裏は笑いを堪え、両手を謝る形にして掲げると、素早く校門まで駆ける。

「あ、待ってよ」

慌てて彼女も追いかける、その後姿にも先生の怒鳴り声が響く。
『のりっこさんか！！！！』

言われた彼女が笑ってはいけないと唇を噛み締め、ほほをプルプル震わせながら大声で返事する。

「私も同じく、急用です！」

御裏に続いて門から出ると、右手で後頭部を押さえた御裏が、学校と反対を向いて立っていた。

息を切らせた彼女が後ろから声をかける。

「はぁ、はぁ……学校行かないって吹っ切れたら……気が楽になって面白かったね……どうしたの」

固まった表情の御裏の顔を覗き込むと、走った後なのに顔色が悪いようだった。

御裏が小さく呟いた。

「歪だ」

校門を出た瞬間、ねじれて歪んだ重たい鉄の塊が、脳内に落ちてきたような衝撃と爆音を感じた。

冷たい金属の感触と、曲がった部品がぶつかる違和感さえもリアルに感じた。

御裏は首をさすり、ぎこちなく笑って答える。

「何でも……たまに痛くなるんだ、関節のどこかがずれているのかな。いつも少し待てば治るけど」

「それって、大丈夫なの。お医者さんとか行かなくていいの？」

「えーとな、どっちかっていうと、精神的なもの、だと思うから」

心配して覗き込む彼女から顔を逸らし、御裏は何処へ行くとも言わず歩き出す。鞆を抱えた彼女が後ろに続く。

「可愛い子をせっかく連れ歩いているのになー、どっか二人で休める場所に行こうか」

御裏がそう言いながら斜め後ろを歩く彼女を見る。彼女も後ろを振り返る。

「誰をお探しの？」

「お前しかいないけど」

「可愛いって私、今そう言われたの。美人はよく言われるけど、可愛いって嬉しいな」

照れた笑いで自分の顔を指差す、その仕草を見て御裏は頷く。

「よく言った、凄い自信だな。あまり調子に乗っていると、いつか痛い目に遭うぜ。今後のために、俺がどんな目に遭うのか体に教えてあげようか」

「褒められて嬉しいけど、あんた……私をいきなりどこに連れ込む気」

照れた笑いから一転し、冷めた顔つきの彼女が、凍るような流し目で問いかける。

御裏はしれつと答える。

「あのな……俺はそんな趣味無いし、そんな意味も無い」

「だよな」

「と、言いながら、なぜに前を向いたまま後ろに離れる」

「野獣がいるみたいだから」

「学校の近くに野獣がいるのか？」

「あんたしかいないわよ」

御裏は頬を数度引きつらせた。

「あのな、俺がそんな奴に見えるか。違うって」

「見えないから余計驚いた、逆にそうは見えない人がそうなのかもしれないって疑ったわよ。本気でも冗談でも寒かったな、ここ鳥肌立ってる」

彼女が制服の袖を捲り、二の腕の内側を示す。抜けるように白い肌だった。

「うわ、ほんとだ。色白だから目立たないけど」

「見ないで、今、何を考えて……いいえ結構。聞かせないで、答えないで」

さっと服の袖を下ろし、自分の腕をかばう様に片方の腕で押さえ

て離れる。

あまりにも露骨な態度に、軽い調子で会話を合わせていた御裏も、さすがに機嫌を悪くする。

「俺が何か言ったのかもしれないけどさ、そんな態度取っていいのか。一人で置いていくぞ放置されて泣くなよ」

「放置するなんて……そうなたら、あんただって一人になるのよ」
「俺にとつては、こんな状況は今回が初めてじゃないからなー。これくらいならやり過ごせる。いけるいける」

「そうやって強がって、一人にすると脅して、何させる気」

「何にも、俺はお前に興味がないと理解してくれればいい、初めから、全くない。」

たかがサラサラ黒髪の、色白美人に対して、変な意味での興味がある筈がないと納得すればいい」

「そこまで言われると褒められているようで、逆に傷付いた。私を本気にさせたわね」

本気で悔しいのだろう、彼女は鞆で御裏の背中を叩いた。

「うわっ、見た目に反して結構暴力的だな……それともう一つさ、確認したいんだけど」

振り回す彼女の鞆を、自分の鞆でガードしながら尋ねる。

「何？」

「お前の名前何ていうの、俺の名前は……」

鞆を下ろした彼女は、先ほどの凶暴性をどこかに忘れたように普通に答えた。

「御裏命でしょ、知ってる。三年生でしょ、割と目立つ人だしね」

「知っていたのか、それでお前の名前は？」

彼女は鞆の中から生徒手帳を取り出し、御裏の目の前に自分の写真と名前が見えるように、指を挟み広げる。

「空色 緋環本名だよ。芸名でもペンネームでも源氏名でもない、生徒手帳を偽造もしていない！」

「ふーん、お前が空色ね……どうでもいいけどさ、どうしてそんなに自信满满的なの？」

「どうでもよくない！ 珍しい名前だ、印鑑売ってるの、どう読むのこの字。そう思わないの？」

「ん……まあ……そだね」

二 二人（後書き）

はい、ほとんど会話でした。

こんな作品を投稿していたなんて、なんて恐ろしい世間知らずだったでしょう。

毎回、読み直してアップするたびに顔から火がでそうです。

ごめんなさい、なるべく書き直したのですが……一年前はこんなに文章が下手だったのですね^^；

三 遭遇（前書き）

以前投稿した作品ですが、各編がやたら長いので編集しました。

三 遭遇

御裏は名前に聞き覚えがあった。

記憶の底を漁ると、指先にかろうじて刺々しいイメージが引っかかった。

「思い出した。お前があ有名な……名前をどう読んでいいかわからないと三年でも噂の」

「そう、学年が変わるたびに先生も初めは戸惑うの」

「二年のくせに三年の俺のため口……」

「いいじゃない、心で尊敬しているのよ」

しれつと言いながら空色は生徒手帳を鞆に入れる。

御裏は言わなかったが美人だという噂を聞いていた、目の前の彼女はじつと見る御裏を首を傾けて見返す。

確かに美人と呼ばれて噂になってもおかしくない、あと何年かすればさぞいい女になるのは間違いないだろう。

今でさえ他の生徒とは頭一つ分抜けて目立っている。

その外見から男子生徒に人気があるが、口と行動と性格に問題ありとの噂も有名だった。

それもあながちデタラメではなさそうだと御裏は納得した。

さらには怖い噂も聞いたが、それはそれで目立つ者は、話のネタにされやすいだけだと聞き流していた。

「とりあえず、俺は先輩でも御裏でも呼び方は何でも」

「じゃあ、命」

呼び捨てにされた御裏が絶句した、目を見開き、至近距離で相手を睨みつける。

「それ、下の名前だけど。俺達は今日初めて会話した仲だけど、馴

れ馴れしく接近しすぎてない。それなら、お前の呼び方は緋環でいいんだな」

「できれば……」

空色が口ごもり、言いにくそうに口をもごもごさせる。御裏が困った顔を見てにやりと笑う。

「人を仲良し友達みたいに呼んで、自分は駄目とか言おうとしたな。それは反則だな」

「いいえ、違うの……できれば……」

「あ？」

「……ロヒリンと呼んで、ね」

「分かった、ヒリン」

「ロヒリンでしょ、一文字少ない。今言っただけなのにもう忘れたの。三までしか数えられないの、あんた脳みそ鳥でしょ！」

「そんなに早く忘れるか！ 面倒な奴だな、ロヒリンって言いにく……そうだな、俺が納得する名前を付けてやる。空の色で緋色の環か……」

御裏が腕を組み、空を仰いで考える。

ここまで悩むのは、二日前の事件以来だ。

登校前に洗った筈の服が見つからなくて、おしゃれだと自負する御裏は、学校を休むか汚れた服で行くか悩んだ。

中間を取って、自分で作った服を着て出た。

「俺が呼ぶとしたら、空気、赤っぽい丸……透明」

見つめすぎた空が一瞬ばやけ、ラジオの声が聞こえた気がした。歪みのずれが激しくなったのを、御裏はぼんやりと感じ取った。「色に関する字を取って、カラリン」

空の字と環を繋げて読み、それっぽく名づけてみた。

「うーん、長考した割には微妙。判定は基準に満たなくて退場かな、優しく面白くないから画面から消えろって伝えてあげる某採点システムって素敵ね」

「要はつまらないのか、何か言い方に腹が立つ気がする……ならば……合わせてカラリンヒリン、そういう名前も出来たが」

「別人になってる、日本人じゃなさそうだよ、センスも日本人じゃないよ。私、呼ばれても返事しないから」

「まあまあ、これは冗談……ヒリンでいいな」

「決定なの？」

「短いのが好きだ、呼びやすい」

「やっぱり野獣かしら、名前を付けて私をペット扱いするなんて。」

「ごめん、生理的にあなたのこと、ちょっと受け付けないみたい」

「……今の話で、どうしてそういう答えになるのやら。変な奴だな、自意識過剰なんじゃない」

御裏と空色はたわいも無い話を交わしながら歩く。

駐車禁止の標識が立つ角を曲がり、とりあえずは近くの公園にでも行つて休もうという話になった。

「ああーまずった」

不意に立ち止まった御裏が呟く。

「忘れ物？ それとも人生の選択を間違えたの？」

合わせて空色も立ち止まる。御裏は後ろを振り返り、前を振り返り、何度も道の前後を見渡す。

御裏は空色の嫌味な突っ込みをあえて無視した。

「気づくのが遅れた、公園までやたら時間かかると思わないか」

「そうだね、人生つて後悔した時はすでに遅い場合が多いんだって。そんな気もするけど、命はまだ若いからやり直せるよ、きつと」

「慣れたらしつこいくらいに良く喋る奴だな……同じ道を延々歩いていた、これもやり直せるのか」

御裏が道の標識を指す。赤い丸に斜め線、どこにでもある駐車禁止の標識だった。

「あれは、さつき通り過ぎた標識だ、下手な字の落書きが彫ってあ

ったから間違いない。ここいら一体がずれたのか、今回は結構大きいな」

「私もあの標識見た、とつくに通り過ぎたよね。どうなっているの、気づかないうちに道を間違えて、ぐるっとこの辺り一周したってこと？」

「それか、俺達の認識がずれているかだな。閉じ込められたかもな」
空色もきょとした顔で周囲を見渡す。

つま先立ちで額に片手を翳すと、公園のある方角に何かを発見し、御裏の腕を叩く。

「あつ、向こうから人が来た。朝から変な事ばかりだけど、どこにも閉じ込められていないって、他の人も歩いているよ」

ジーンズに白い半そでシャツ、耳にイヤホンを引つ掛けた若い男がポケットに両手を入れて歩いて向かってくる。

「ああ……人？」

御裏が表情が硬くして尋ねる。御裏の目には人の形に四色の陽炎が浮かんで見えた。

接近する男を見る御裏の目が鋭くなる。

立ち尽くす御裏に、空色はのん気に背中をバシバシ叩き、いらない説明をする。

「ほら、男の人。人って分かる？ 頭と胴体が一つで、手足は二対づつで二足歩行する生き物よ」

春の暖かい日差しの中、濃い影を落とした若い男は同じ道を真っ直ぐに歩いてくる。

「話しかけても返事はラジオかもしれないけど、どこから来たか聞いてみるね」

空色が声をかけようとするが、とつさに御裏がその前に出て手を広げ立ち塞がる。

「人に見えたとしても、俺の後ろに隠れる！」

「な、なによ急に怖い声出して。知らない人に話しかけたらダメっ

て言いたいのか？」

首をすくめて下がった空色は、御裏の右手に光るものが握られているのに気づいた。

「あ……」

いつ取り出したのか、刃渡り二十センチ程のナイフが、陽の光を浴びて冷たく光る。

すっと動いた御裏が握手するように手を伸ばし、真っ直ぐ歩く男に対して何気無い動きでナイフを突き出した。

後ろで眼を見開いた空色の手から鞆が落ちる。

若い男は真っ直ぐ前を向いたまま動きを止めた。

イヤホンから漏れるノイズだけが、静まり返った道に広がる。

「滅しろ」

御裏は男の腹にナイフを捻りこむように柄の部分まで突き刺していた。

三 遭遇（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
敵がやっと登場します、次回は戦闘シーンです。

四 戦闘（前書き）

主人公の御裏がその力を出します。

敵の名前の由来は、少しマイナーなところから引っ張りました。

（直接そのものとは関係ありません）

四 戦闘

ナイフを深くねじこまれ内臓に達するまで刺されても平然としていた若い男が、ちらりと腹の状況を確認した。

「メイカー！」

そう叫ぶと同時に、両手で御裏を突き放すように打った。

御裏は両肩を突き飛ばされ、見えないワイヤーに引っ張られたかのごとく、後ろ向きで十メートルは宙を飛んだ。

背中から電柱にぶつかり、鈍い衝撃音が響く。

コンクリートの電柱の欠片が飛び散る。

突き飛ばした姿で止まった男の手のひらは、焼け焦げて黒い煙を発する。

「発見……力を寄せ」

手の平から炎を発した男が呟いた。

「は、はい？」

瞬きするのも忘れた空色が、二人の中間で刺された男の腹に目をやる。

痛々しくナイフが刺さったシャツからは、何故か一滴の血も流れていない。

男が腹に刺さったナイフを逆手に掴み、引き抜いて捨てる。金属の楽器のような音を発し、アスファルトの路面を跳ねたナイフが宙に溶けるように消えた。

空色は首を何度も振り、男と御裏を見返す。

「え、あれ、え？」

電柱で背中を打った御裏が、跳ね起きるように立ち上がる。

今の衝撃が嘘ではなかった証に、御裏が衝突した電柱の側面が剥げ落ち、中の針金が曲がり飛び出していた。

制服に付いたコンクリートの砕けた白い粉をはたきながら、御裏

が問う。

「いきなりだな。聞くぞ、名前はあるのか？」

「アジタケーシャカンバラ、主流から追いやられた者だ」

男は不思議な抑揚を持つ名を名乗る。声を発する度に、口の端から陽炎のような炎が吐息のように漏れる。

「何だって、やたら難しい名前だな。その名前は初めて聞くけど、あの程度の攻撃はへっちゃらで、長ったらしい名前があるってのは

……」

御裏は右手を上げ、人差し指を男に向ける。

「お前、強いな。神とかに近いな」

何も持ってなかった御裏の右手に、黒光りする金属の塊が握られていた。

「街中だしな、今度は本気出すぞ。これぐらいで戦闘開始！」

傍で見ていた空色が、その物体が拳銃だと察する前に、御裏が人差し指を引いた。

御裏の手の中の物体が玩具とか、見間違いだという空色の思いは乾いた発砲音でかき消される。

冷静に狙いを定めた御裏が、三発立て続けに発砲した。

アジタケーシャカンバラと名乗る男は、御裏めがけ走り出すと顔の側面が削ったようにぼやけた。

空気に滲んで消えるように、顔から頭、首、胴体と消しゴムをかけた絵のように姿を消す。

消えた空間を御裏の放つ弾が貫き、民家の壁に穴を穿つ。

腰から下だけの姿のアジタケーシャカンバラが、斜めに走り道路に飛び出す。

足元を狙った弾丸がアスファルトを砕いた時、完全に姿を消した。「そつきたか」

御裏が拳銃を手放す。

落ちた拳銃は、地面に落ちる途中で手品のように消えた。

空いた両手で長い棒状の物を持つしぐさで構えた御裏が、アジタケーシャカンバラが姿を消して走った先をじっと見つめる。

「動くときき込むぞ、じつとしてなヒリン」

呆然とした空色は頷くことも、返答することもできなかった。

だが、御裏の声がきっかけでビクリと肩を震わせ後ずさりした。

空色の斜め上の空間に、不自然な力の集まりが生じる。

薄い陽炎のようなそれは、御裏の目には全身を燃え上がらせ異形の姿と化したアジタケーシャカンバラの姿として映る。

「ふっ！」

御裏が何も持たない手を振った。

手を伸ばした延長線がアジタケーシャカンバラに当たる寸前、パントマイムのような動きの両手には、柄が長く重たそうな先端が尖ったハンマーが握られていた。

攻撃は空色の頭上を掠め、風に煽られ長い髪が舞う。

一抱えもあるハンマーの先端がアジタケーシャカンバラの胴体を捕らえる。

「当りっ！」

何も無い空間に衝撃が走り、ハンマーの柄が獲物を打ち据えた手応えでしなる。

アジタケーシャカンバラが胴体を打ち碎かれる。

「人の身で！ 覚えておれ！」

壊れたラジオの雑音のような咆哮を発し、突き刺さるハンマーの頭を掴んだ。

アジタケーシャカンバラを中心に空間が破れた。

景色と空を反射した鏡が割れたように、風景が割れて舞う。

割れた風景は細かく散り、砂となり微粒子と化す。

さらに細かく分子以下の大きさ分裂、消滅。

一瞬後には風景が再生。

ハンマーを掴んだアジタケーシャカンバラがアスファルトに叩き

つけられた。

打ち据えられた風圧で、啞然とする空色のスカートが捲れ上がる。陥没するアスファルト。

燃え上がるアジタケーシャカンバラの姿。

破裂して噴水のように水を撒き散らす水道管。

小地震のような揺れ。熱気が周囲に渦を巻く。歪んだ地面が摂理の均衡を維持できず様々に変色。

「滅しろ！」

御裏の掛け声に同調し、ハンマーの頭が炸裂した。

ハンマーは内部に火薬でも仕込んであったかのように、破裂し閃光を撒き散らす。

陥没したアスファルトを中心に、路面が波打つように揺れ、波紋を描く。

閃光が消え、アスファルトや壁、家を揺らす波紋が徐々に収まる。

御裏は柄だけになったハンマーを持ち上げた。

「仕留めた……いや、簡単すぎるから逃げちゃったみたいかな」

煙をもうもうと発するアスファルトの陥没部分を覗き込んだ御裏が呟く。

ハンマーの柄を手放すと、空中で存在を無くしたようにかき消えた。

最後まで揺れていた電線の動きが止まった。

振り返った御裏の背後、アスファルトの破損は古い絵の上から新しい絵が上塗りされるように綺麗に消えていた。

御裏の脳内に低く聞こえていた歪みの音が遠ざかる。

シャッターが落ちるような轟音と衝撃が御裏の脳に響き、静寂が訪れた。

歪みは閉じ、異変は終了した。

道路に投げ捨てた鞆を拾い上げ、御裏は後頭部を撫でながら呟いた。

「んっ……とりあえず、こんなもんかな、終・わ・りつと。じゃあ公園行か、汗かいた、涼もうぜ」

空色に軽く手を振り、御裏はすたすたと歩き出した。

呆然と立ちすくむ空色が、耳鳴りの残る頭を両手で抑える。

非現実的な光景と不自然な現実に対峙した。

人間の代表として、激しく鼓動する心臓を押さえるように胸の前で手を組み、姿勢の良い御裏の背中に思いの丈をぶつけて訴えかけた。

「待って……せーの、こおらあ！ 何がとりあえずなのか、何が起きたのよ！」

四 戦闘（後書き）

戦闘は一旦終了です。

各章が長いので修正し、これは以前二章だったところの終わりです。

ほんと、ネット上で書くには見させる手段も考えて投稿しないといけませんね。

前の揭示されたものは、長くて区切りが少なく読み辛かったです。

五 獣黒（前書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。
自分も黒は好きです。

五 獣黒

空色の叫び声に御裏が驚き、ビクリと肩を震わせて振り返る。

「うわ、怖い女……俺が気に触る事した？」

御裏の言葉に、空色の中で感情を理性を抑えていた何かが切れる音が聞こえた。

「怖い？ こつちが怖いわよ。」

何よ今の、あんた人刺したよ、だよ。それで人が燃えて消えた。何で突然、銃やらあんなでつかい武器が出るの、どこかに隠し持ってる訳。

壊れた道路がどうして元に戻るの、そもそもあの男の人どうなったの！」

「うわ、質問多いって。それをいつぺんに答えると現実と違うっていうか、いいや、現実かな？」

腕組みをした空色は、御裏を下から挑発するように問い詰める。

「見たわ！ あんたが犯人よ！ 黒でしょ！ しっかり見たんだから！」

「あ……あれ、気にするか……俺は見えてない」

「嘘、あれだけはつきり見せ付けておいて、何を今さら。知らないとは言わせないから、きちんと説明！」

「いやいや、俺さ、真面目に戦闘中だった。あの時は必死だったただろ、集中していたから余所見なんてしていないの」

「戦闘したよね、自分で言ったよね。証拠は無くても、今から通報して警察はあんたを捕まえられなくても、私は知っている！」

こちらは武器でなく、目から熱線でも出しそうな勢いで空色が問い詰める。

キラキラの瞳が今やギラギラに変わり、その奥にある怖そうなものが飛び出してきそうだった。

観念した御裏が自傷気味に若干落ち込んで顔を逸らす。

「そうか、こういう場合は素直に勇気を出して言うべき……ですよ
ね？」

「急に敬語使わない、それは後ろめたいからだね。さっさと白状しようよ、気が楽になるよ」

「よし、俺もそこまで言われたら正直に答える」

「だよ、はつきり言ってね」

「言うぞ！ かなりはつきり見えた。黒だった、いや薄い黒と言
べきか」

「黒？ 黒がどうしたのよ」

「どうって、俺は……嫌いじゃない」

口を少し開き、気の抜けた顔で空色が首を傾ける。

「え？」

「分かった、はつきり言おう。黒い下着は好きだ、肌の色が白
いかなかなか良く映えるぜ。男なら10人中、9……いや9・5人は、
目が釘付けだな」

空色の目がきゅつと細まる。

まるで綺麗な肉食獣のような表情だった。

「誰か助けて、警察呼ぶ」

言うなり携帯を取り出し、画面をスライドさせてどこかに電話を
掛けようとする。御裏が慌てて携帯を取り上げようとするが、さ
つと身を交わす。

「止めよう、お嬢さん落ち着いて。まだ方法はある筈だろ。いいか、
君は被害者かもしれないが、相手は故意ではなかった、やんごとな
き事情も少しは考えて行動しなさい」

落ち着かせようと必死に説得する御裏を、空色が悲しそうな目で
見つめる。

「そうね、警察は早まったわ。冷静な判断力を失いかけていたわ」

「あ、ああ、よかった。下手に騒ぎが大きくなるところだった。捕

まらなくても、そんな理由で警察呼ばれたら大騒ぎになるし恥ずかしいって」

焦ったあまり戦闘で動いた以上の汗をかいた御裏が、両手を膝に突いてぐったりとうな垂れる。

「そこまで気にすると思わなかったんだよ。お詫びに俺も下着の色も教えるよ、これでおあいこだ。なんだったら見せても……」

携帯を見つめ、空色はふうとため息を吐く。

「はつきりしたわ、泣き寝入りはダメね。連絡先は保健所だったのよ、だつてあなた……ケダモノでしよう？」

「きついなー、錯乱してない？ 野獣から逆進化した格上げだよ。どこから見ても人間だつて、ひよつとしてヒリンは、コンタクト忘れてよく見えないとか？」

精神的に傷を負った御裏が、わざと軽い調子ではっはっはと笑う。

空色は真面目に答えた。

「残念ながら視力は裸眼で両方1.5。あ、危ない……裸眼って字で変な想像しないでよ」

「あのな、いくら俺でもそこまで考えもしなかったぞ。お前、自己意識が被害妄想が強すぎないか」

「私の視力はどうでもいいから、この際、去勢されてきて。市民の要望としてできれば処分して欲しい」

「お前、話が強引な上に、言っている事と悪い事があるぞ、怒らせる気か。やるか？」

「怒ってどうするの。消える武器を使う気？ それとも犯罪的な手段を使うの、私がか弱い女子だからって、へ理屈と精神的な攻撃なら負けはしないわよ。自分で言うのもあれだけど、攻めるの大好きなんだからね」

「……く、くそー何て強引で強気な女だ。一般人に、特に女には暴力は振るいたくないし、かといって口では……助けてやったのに、

ある意味卑怯者め」

苛立ちの余り唸り声を上げる御裏に、さらに空色が言葉で追い討ちを掛ける。

一時間経過。

あれから延々と長時間、空色は切り口や言い方を変化させ、まるで痛い言葉の辞書を所持しているかのような勢いで言葉責めをした。言い負かされすっかり燃え尽きた御裏と、別の意味で燃え尽きて晴れ晴れとした顔の空色が、公園のブランコに並んで座っていた。

「お前、すげえよ……どうなってんのその脳内」

力無くブランコを漕ぐ御裏が、手を滑らせてブランコの板から落ちる。

「いてっ」

言うだけ言つて、朝からの異常事態で溜まった精神的なダメージや鬱憤まで晴らした空色が、笑顔で手を差し伸べる。

「命、もう気にしてないよ。良く考えたら別にどうでもいい事だった。私の攻撃を受けきって人生に落胆しないだけ、精神が健全だった分かったし」

だらしなく足を広げて倒れる御裏は手を取らず、ふんっ、と鼻で答えて寝転がる。

ブランコから勢いを付けて飛び降りた空色が、スカートの端を押さえて傍にしゃがんだ。御裏の横に揃えた膝と沿えた手が近づいた。「すねてないで仲良くしない？」

五 獣黒（後書き）

他の色も悪くないですよ。

二人が仲良くなりました？

戦闘が終われば、ほぼこの章は言い争いをしています。

これで会話文が6／7割を占めています。

一般的に会話の多い作品と同じくらいになります。

六 落書（前書き）

前章からこの章まで会話メインです。

二人の性格を察して、優しい目で見守ってあげて下さい。

これからも、このお話をよろしくお願いします。

六 落書

空色が首を傾ける、肩から腰まで覆う黒髪が滝のように流れ包み込み、白い肌に映える赤い唇が何かを嚙んだような表情をした。

動かない御裏をじーっと、黒い瞳で見つめる。

色気がある瞳と表情は、まるで獲物を狙う猫のようだ。

「ね、いつまで寝転んでるの。どう足掻いても結果は、命の怒られ損だよ」

御裏は額に皺を寄せて睨み、チィと舌打ちしてふて寝をする。

「いや、怒ったのと俺が落ち込んだのもお前の……はぁ、もういい」

「ほら、立ったら。そんな短い制服で土の上に寝ていたら、砂が入って下着まで土だらけになっちゃうよ。あ、ちゃんとシート敷いてる」

御裏の体の下には、半透明のビニールシートがいつの間にか敷かれていた。

「服は必要御以上に汚さないっての……だけど。だけど、実はちょっと嬉しかった」

「ふーん、いじられてMに目覚めたの。少しは人間らしくなったって言っただけかな」

「まったく、チクチクといつまでも。あんな、今日この状態で、まともに会話出来る人間がいたの久しぶりでさあ」

土の上で両手を伸ばした御裏が、首だけ曲げて空色を見つめる。

してやった、細い足を両手で抱え、得意げに空色が笑う。

「抑えてるから見えないよ、御裏Mさん」

「イニシャルと掛けてるのが、上手いな……頼む、少しでもいいから俺にまともな会話させる。今、続けて言ったらすごい感動する話だったぞ」

「ふーん、残念だったわ、惜しかったわ。とは思わないけど、どう

ぞ」

「むかつく、顔がいいのが残念。もういいや」

「うわぁー、最高の褒め言葉だね。私嬉しい！」

御裏は口喧嘩してもしかたないと、眉間を指で抑え反対側を向いて語る。

「あ、あのな………いいやもう！」

俺も自分だけが、一人だけが、あんな世界の中で違うんじゃないか。どう考えてもおかしいのは周りだよ、だけど誰もそれに気づかない。じゃあ、変になったのは俺か？

そればかり考えてさ、だんだんと自分が異常だと思いかけていたんだ。そんな時、俺と同じく浮いているヒリンに出会えた」

「そんな……」

空色が揃えた指で口を押え、首を振る。

「いや、そんな心配し過ぎだって思うだろ。だけどさ、ずっとあの状況に何度も会ってみろ。どっちがどっちを、ずっと答えが分からず繰り返しているんだぜ」

御裏の訴えに、長い睫で何度も瞬きした空色が潤んだ瞳で、優しく子守唄のような声で話しかけた。

「とても自己分析が出来ているよ。自分が頭悪いの分かっているって、頭悪いのに少し驚いた。不思議だね。私が否定したいのは、今の台詞では同類にされそうな箇所だよ」

「お前俺をバカに………もういい」

自分の手を腕枕にして不貞寝した御裏の肩を、空色が優しくゆする。

「あ、ちよつと攻撃止めるの忘れていた。ごめんね、私もつい安心しちゃって………いつもの癖で」

「ついつて、いつもかよ」

こいつ、絶対に友達少ないだろうと思った御裏が、手で顔を隠して苦笑する。

「これって、私が心を許している証拠。だから、怒ってもいいから無視しないで」

相手するのに疲れてきた御裏が、無言で寝たふりをする。

「ごめん、本当に怒った？ 命、私の事嫌いになった？」

反応を示さない御裏の態度に、顔を曇らせた空色が離れ、ブランコに座り直す。

暫くの間、無言でブランコを揺らしていた。鎖の軋む音だけが、空色の心の声のように悲しく、動きに合わせて揺れるように聞こえる。

「……寝る。眠たいから寝ている、喋りたくないだけだ」
御裏が独り言のように喋った。

俯いていた空色が顔を上げる、校舎で出会った時のように目の端に涙が浮かんでいた。御裏は知ってか知らずか話を続ける。

「これも独り言だぜ。俺も人前でこれ言うつてのは、ある程度気を許している証拠だ」

「命…… あんたが、たとえケダモノでも、女性の下着愛好家でも、ナイフ振り回す奴でも——」

空色が寝転んでいた御裏に、内容は酷いが優しい声で話しかける。
「——私、友達になつてあげてもいい」

「何それ…… 好きにすれば」

「うん、好きにする。」

あんたが、例え同姓の下着見て興奮する奴でも、銃マニアだとしても、超能力者だろうが地球外生命体だとしても。

毒舌や説得や実力行使が出るかもしれないけど、それは人として当然の反応なの、条件反射、火事や事故が起きれば逃げるようなものの、本能なの嫌っていると思わないでね」

「あのなあ、お前の中で、俺はどんな立場なんだろうか」

寝返りを打った御裏が片膝を立て、適度に筋肉が付き引き締まった長い足の砂を払い落とした。

海賊旗に書かれているような、黒地にピンクのデスマークが入った爪で空色を指差す。

「友達になりたかったら、まず人として扱え。それに俺はお前のパ
ンツ見て興奮しない、少しファッショ的な興味があって気になっ
ただけだ」

空色は御裏の肩を恐る恐る叩き、黙っていてあげるからと真剣な
眼差しで問う。

「誰のだったら興奮するの」

「そりゃ……いるかよ、そこまで突っ込むとヒリンが馬鹿みたいだ
ぜ」

空色は余裕を見せようと長い髪を書き上げ、静かな笑みを浮かべ
た。

「ふ……馬鹿と言われた、やっとこれで同格。何て思わないでよ、
こつちが少し合わせたんだから」

「お前、本気で俺と友達になる気あるのか？　優しい振りしたいじ
めっ子か？」

「真面目な話だけだね、命と話していると、目を閉じればカッコい
い男の子と接しているみたいで、何故かこっという流れになっちゃっ
て」

「口調が雑な野郎だからな」

「それでいいと思うよ、似合ってるよ」

「そうかい、それじゃお互い納得したところで。俺は黙っていいか
？」

「しかたないな、私に他人の沈黙を我慢するように頼むなんて。許
容量が少ない言葉が切れても、友達だからいいか。傷つくといけな

いから、気づかないように黙るね」

「いいかげんにしろ、無茶苦茶ばかり言いやがる。友達の為に、お前が黙れ」

御裏は人差し指と親指で環を作り、指の隙間に浮かび上がった肌色の物体を、人差し指で弾いた。

絆創膏、主に傷の応急手当に使われる医務用品。

突然飛んできた絆創膏に口を塞がれ、空色は目をパチパチさせて固まる。

その表情を見た御裏が、大笑いしながら砂の上で転げ回る。

笑いすぎて苦しくなり、ブランコの板にもたれて咳き込んだ。

「ああー笑った笑った」

掠れた声で御裏が話しかける、空色は絆創膏を貼られたまま静かに御裏を見ていた。

「悪い悪い、取ってもいいぜ」

空色が取れないというジェスチャーを手で示し、御裏が笑いすぎて苦しい脇腹を押さえて近づく。

絆創膏に手を伸ばした御裏の額を、見えない角度から伸びた空色の手に握られた、冷たい物が何度か素早くなぞった。

とつさに身を引いた御裏が額に手を当てる、手のひらに黒いインクの滲みが付着していた。

手のひらに付着したインクの意味を考えていた御裏が、ハッとした顔で尋ねる。

「お前っ！ まさか！」

六 落書（後書き）

お疲れ様です、読んで頂きありがとうございます。
またしても章のほとんどが会話で終わります。

いくら思い入れがあった作品とはいえ、改めて読むと本当に偏っています。

だからこそ自分は気に入っているのかもしれませんが。

七 謎卦（前書き）

もし空色みたいな女の子がいたら……どうでしょう、自分はいくらでもあえず関わらないようにします。見ている分にはいいですが、疲れそうです。

この章まで読んで頂いて有難うございます。

七 謎卦

ニヤリと不敵に笑った空色が、ピリツと絆創膏を剥がす。

「まさか絆創膏が剥がせないなんて、小さな子供でもあるまいし。私に手を出すと、そうね……1・5〜30倍程度でお返し。辛さに例えると並で済まないわ、口から火を噴く激辛よ。燃え尽きるわ！」

「ほー、良く分らんが、とりあえず同等以上でお返しだな。で、鏡と消す物を持っていたら貸してくれ。何て書いたんだよ」

腰に手を当てた空色が、細長く柔らかそうな人差し指をビシツと指す。

「あなたにふさわしい単語よ！ 当たったら消してあげるね、幸いにもマニキュア用の肌に優しい除光液があるから」

「こらこら、それって準備良すぎ。

本気でいたぶるの慣れてない。何だか俺、友達になったの後悔してきた」

「そうだね、後悔は後からするものだよ。だけど、当たれば消すからそんなに酷くはないよ」

「おいおい…絶対に屈辱的な行為をさせて、言葉を幾つも言わせたいただけだろ」

「あ、あのね、読まれてた。てへっ」

「俺に可愛くしたって効果無い、じゃあ消せ」

「嫌だよ、絶対に当てて欲しいんだから」

「しかたない、こうなったら除光液を作って……出来るか？」

先だって武器を造り出したのと同じく、除光液を取り出そうとした。

しかし、御裏は自分の顔に掛ける薬品を間違えた場合を考え、リスクの高さに躊躇した。

透明な液体の入った小瓶を創り、首を振って手の中の小瓶を消した御裏に、空色が興味深々で尋ねる。

「今のも、手品じゃないよね？」

「まあな」

「聞いていいの？ 他人が聞いて、失礼にならない？」

「ヒリン、一言言っておく。お前はすでに失礼を言っている。後でどうやって出すか教えるからさ、額の字を消してよ。どうせ肉とか書いたんだろ」

空色が唇を尖らせ、斜め上を向いて指を振る。

「ブブブ」

「ブブブじゃねえよ、楽しそうで腹が立つ」

「冷静になりなよ。簡単だよ、さっき私達が話した事だよ」

「ケダモノか、何て単語をこの女！」

「ブブブ」

「またかよ！ それむかつくから止めて」

それから御裏は思いつくままに単語を並べるが、見事に全て外した。

思い余って顔を赤くして恥らうような言葉まで言い、外した御裏が悔しさに遊具のトンネルに頭を突っ込んで何か叫ぶ。

「ねえ、もう暗くなってきたよ……そろそろ答え言おうか」

公園のベンチに腰掛け、夕暮れの空を見上げた空色が除光液とハンカチを取り出す。

腕を組み公園をうろろして、真摯な表情で答えを考えていた御裏が拒んだ。

「いや、まだまだ！ あと少し待て、さっきのは惜しかったんだな。一文字だな！」

小枝で砂に書いた単語が、公園の端から端までずらりと並ぶ。

最も手前の単語『人』の字を眺めながら、御裏はまるでドラマの探偵が推理するように、ぶつぶつと呟く。

「答えは難しいようで、実は単純だ。犯人は私の目を欺くために、あえて身近な言葉を選んだに違いない……真実は一つだ」

「ヒントまだ聞きたい？」

「いや、それを聞いてしまえば解けるだろうが、聞いてしまったという後悔は確実に残りそう。もう少し、もう少し考えさせてくれ」
「いいよ、命だから、時間がかかるのはしかたないよ。もう下校時間過ぎたね」

公園の前を、同じ制服を着た生徒達が通り過ぎる。

「また馬鹿にしゃがって。もし答えを当てたら、恥ずかしい格好で拭かせてやる」

「……いいから早く当ててよ」

熱中し過ぎて時間が経つのを忘れた御裏が、額の字が汗で半ば消えかけているのに気が付かず、小枝で天を指す。

「わかった、命だ！ 俺の名前書いただろう。自分の名前が意味無く書かれるのって、結構恥ずかしいぞ。お前が好きそうな嫌がらせだ」

「ブブブ」

「あああああ！」

悔しくて髪を振り乱す御裏の後ろ姿を見ながら、空色が桃色の唇に小さな笑みを浮かべた。御裏をすっかり気に入った、むしろ懐いた空色が、ぴよんとベンチから立ち上がる。

「あのね、もう答え言うね。私、そろそろ帰らないと」

「うとうとう……おお！ 気づけば夕方、どうしてこんなに時間が経つのが早い。まさか、また異常な歪みが」

「いやいや、あんたね……そんな性格だから、あんな力持っていて、周りが変になっても耐えられるのね」

腕を組んで夕焼けを見上げる御裏の傍に立った空色が、小声で答

えを教える。

「友だよ、友達の友」

「む？」

にこりと笑う空色の顔を、怪訝そうに御裏が見返す。

「だから、消して帰ろうよ」

「嫌だ」

ティッシュと除光液を取り出した空色から、じりじりと御裏が離れる。

「負けて悔しいのはあるかもしれないけどさ、私の悪戯の跡を残されるのも困るのよね。家族に、こんな女がいたって、落書きされた事だけ言われそうだし」

「俺をそんな騙されやすく小さい奴と思うな。友って書いたって言っただけ」

「そうだよ」

額を片手で押さえた御裏が、距離を取って叫ぶ。

「ヒリン、お前がそんな優しい字を書くとは思えない。家に帰って鏡で確認してから消す。嘘だったら明日、学校でお前のどこかに悪戯書きしてやる」

「小学生並の低いレベルな仕返し、おまけに嫉妬深い」

「だから今日は去る。お前、何組だ？」

「2組」

「では明日、首を洗って待ってる」

空色がにこりと笑って手を振りながら教えてあげた。

「命、やっぱり頭悪い。鏡くらい作れないの」

「……作れる」

「携帯持つてるよね、自分を撮れば分かったと思うけど」

「……あるよ、携帯」

「実は書いた直後から、それ思っていたんだけど。それを見越して私が嘘を言うと思う？」

「……ヒリンは計算高そうだからな、言わないな」

「結論として、命は自分が馬鹿で、ケダモノだと認めますか」

「せめて馬鹿だけにしろ」

「しろ？　お願いするときは？」

「……く、くつ、下さい！」

「よくできまちたー、えらいぞー」

空色がパチパチと手を叩き、御裏の頭を撫でる。

御裏は不機嫌そうに見返す。

「お前、ぜったいいつか、その性格で痛い目みるぞ。顔がいいのに、性格最悪」

「そつなの、性格が困った人なの」

「否定しないのかよ」

「反対に命はスタイル良くて、顔も割とかわいいのに、単純でだし易いよね。だけど友達だって思ったのは本当なんだけどな、私の事嫌い？」

「嫌いとかいう問題じゃねえ、ここまできたら敵だ。俺の視界から消えろ」

「ふう」

空色がぐるりと後ろを向く。

夕焼けに照らされて、その後姿は絵巻物の一部のように輝いて見えた。

何着ても似合いそうだけど、こいつは着物が一番いい、絶対そうだ。

全く関係無い事を考えていた御裏の耳に、鼻水を啜り上げる音が聞こえた。

「おい、お前泣いてないか」

「ばーか、泣きまねだよ。私がそんな女と思ったの、ばーか」

そう言うなり、空色が鞆を手にスタスタと公園から出て行く。

「お、おい」

「悪かったわ、さよなら」

返事も待たず立ち去る空色の後ろ姿に、ぎこちなく手を上げた御裏が小さく声を掛た。

「さ、さよなら……ヒリン？」

薄暗い夜道を、瞼を赤くした空色が無言で歩く。

黒い革靴の先を見つめながら歩き、時折上を見上げてため息を吐く。

「私、駄目な奴だな」

七 謎卦（後書き）

御裏は口が悪いです。

登場人物が騒いでいるお話です。

読了ありがとうございます、ご意見ご感想はどんなものでもお待ちしております。

八 訪問（前書き）

空色さん宅へおじゃまします
お母様登場です。

八 訪問

空色は一人とぼとぼと、家に帰る道の坂を上る。

幾つか先の電柱の背後に隠れるような、怪しい人影を見つけて立ち止まった。

「……」

数秒間見つめて、一気に通り過ぎようと早足で距離を開けて通ろうとした時、電柱の影から人影が姿を現した。

「よ、よお」

「きゃっ！」

ぎこちない動作で片手を挙げる相手との間に鞆を構え、空色が小さな叫びを上げた。

「何だかさ、俺まだそんな扱い？」

聞いた覚えのある声に、鞆の陰からそうつと空色が相手を盗み見る。

柔らかそうな、ゆるいパーマのかかった茶色の髪。

強い意思を感じさせる目。

大きくて意思の強そうな口。短い制服がベストのようになった独特のスタイル。不気味な模様の爪。

そして―― まだ消していない、半分消えかかった額の友の字。

「変質者、正体見たり、春の野獣」

怖さと知っている顔に会った安心感のあまり、空色は思わず俳句を読んではまった。

「はいはい、相変わらず頭の回転が早くて、嫌味な奴だな。おら行くぞ」

空色の鞆に、鎖と色鮮やかなシールで飾りたてた鞆をぶつけ、御裏が坂道を上る。泣いていた事には一切触れずに。

「来いって、家はこっちの方向でいいのか、置いていくぞ」

「んーーーーーありがとう」

後ろから空色が御裏の鞆を掴んで呟く。

ささやき声を聞き取った御裏が、怪訝な顔で振り返る。

「ん、何て言った？」

「あーあ残念、二度と言わないであろう感謝の言葉を言ったのに。聞き逃すか」

「そういう事は、後ろからこっそりじゃなくてさ、きちんと言えば、代わりに嫌味や悪口は心の中でこそつとええ」

「ごめん、無理」

「即答するな」

「本当にごめんなさい、反射神経だから」

「お前って、どういう育ちかたしたの？ 親はどんな奴なんだ？」

「ああいう育ち方」

御裏の鞆を掴んだのと反対の手で、坂の上に建つ体育館のような、いや博物館のような大きくて近代的な建物を指差す。

「あれ、本当にヒリンの家か。また騙してないか」

「お父さんは……で、お母さんは……なの」

「嘘、名前聞いたことあるぜ。いや、引つ掛けようとしたな、父親と母親の名前が違うというものすごい間違いに気づいた！」

「だって、本名は空色だよ……さっきのは違うよ、今度調べてみれば」

「むむ、自信ありげだな」

御裏は自分の後ろを、尻尾を繋いだ象のごとく付いてくる今風の日本人形のような空色を見る。

確かに、言われて見れば似ているような、そうでないような気がした。

「じゃあ、お金持ちなのか」

「まあまあだよ」

「さりげなく嫌味……むしろ俺が僻んでいるっぽいカ」

「命はどうなの」

「うちは割と普通。普通っていうか、贅沢できないけど、暮らしには困らない」

空色家を見上げながら会話していると、空色の携帯が音楽を奏でた。空色が慌てて携帯を取り出す。

「はい、私……うん、うん……今、家の前だよ。うん……じゃあ」

携帯を両手で押さえ、空色が御裏から距離を取る。遅くなって親に怒られているのだと察した御裏が、腕を組み面白そうに空色を眺める。

携帯を持ったままの空色が、会ってから初めて見せる申し訳なさそうな顔で御裏に話しかける。

「あのね、私、普通に話しできて嬉しかったの。友達と居るって言ったら……お母さんがね……送って貰ったお礼に、ご飯食べませんか」

普通の会話だが、何故か顔を真っ赤にして、空色は恥ずかしそうに話す。

「うむ、喜んで頂きます！」

腕を組み、御裏が大きく首を縦に振る。

空色の困った態度が見られるのが愉快な上、豪邸で出る食事はさぞかし豪勢だろうと期待が高まる。これこそ一石二鳥だと、呼ばれる気が全身から溢れ出ていた。

「えー……来るの」

明らかに嫌な顔で、空色が声のトーンを落として聞き返す。

「行ってくて、おかあさん、ぜひ行きます！」

御裏は携帯に声が届くように大声で返事する。それが決定だったのか、再び携帯を耳に当てた空色が落ち込んだ様子で、行ってくて……と答えた。

携帯を切った空色が、空に向かい呟いた。

「ああ、ついに我が家に飢えた野獣が……」

「俺達友達だろ、な」

額の字を指しながら、御裏が手を回し空色の肩を組む。

「馴れ馴れしい。本当にありえない、額に友って書いた友達だなんて。やらせと思われる」

「書いたのお前じゃん」

「……そうだけど、会わせたくないの、親の手前恥ずかしいでしょ。消してよ」

「嫌だ。それで外を歩かせようとした天罰だ」

「実力行使」

「ガード」

一瞬にして金属製の丸い盾を出した御裏が、ハンカチを摘んだ空色の攻撃から額を庇う。

知ってはいたが、改めて御裏の力を目にした空色が手を止める。

「なら横から」

「こっちもガード」

次はフルフェイスのヘルメットを作り出す。

空色はハンカチを持つ手を掲げ、しばらくすると諦めたのかハンカチをしまう。

「やるわね、変な時だけ絶好調で作るとは。変な時だけ絶好調な人

……略して変人め」

「おい、それ略し方が変だって。それこそ変人じゃん」

「違った、変なケダモノで偏見……字が違うわ、やり直し」

空色がハンカチで口を隠し、ぶつぶつと真剣に言い方を考える。御裏がヘルメットの下でにやりと笑った。

「ぬっふっふ、困っているな。さあ、観念して行こうぜ」

「参ったわ調子が出ない」

「そうか、ほれほれ、こんな物も作れるぞ」

片手に盾、片手に剣を作った御裏が、剣を構えて空色に向けポー

ズを決めた。

「覚悟しろ、お楽しみはこれからだ！」

「あら、いらつしゃ……い？」

空色を迎えに出てきた、有名人だというお母さんが、剣を突きつけた御裏を見て目を丸くする。

高級そうなスーツを着て髪を結い上げ、年齢の割りに若く見え綺麗な肌をした、空色をすっきりさせた感じの美人だった。

空色が弁解しようとして、御裏と母親を交互に見る。

「あ、お母さんこれは……」

剣を下ろした御裏が空色に尋ねる。

「ふむふむ、これはどういう状況になっているのかなヒリン君？」

この顔を見て察しろと言わんばかりに、空色は引きつった笑顔だった。

御裏は母親へと向き直り、首を傾けると、相手も首を傾けた。

「どちらさまですか？」

「名前は御裏、見ての通りだ。でも普通のお友達ですよお母さま」

「出来すぎだと思うくらい、最悪の出会い方ね」

眉をピクピク痙攣させた空色が呟く。

「まあ……びっくりしたわ。力に溢れた、何て個性的な方なの。攻撃的ですごくセクシーよ、ささ、早く家にいらして」

両手を上げて黄色い声を発した母親が、どうぞどうぞと手招きする。

「自分でもびっくりした、歓迎されてしまったようだ。やっぱり親だな、感性が独特な上に、ヒリンを寛容で柔軟にしたら、ああなりそうだぜ」

ヘルメットの下で笑いながら、御裏が母親を盾で指す。

軽い頭痛を覚え、空色は頭を抑えて呟いた。

「さっきの台詞、失礼この上ない。時と相手を変えたら、溢れんば

かりに犯罪の匂いがする言葉なのに……どうして二人へらへらと笑って、打ち解けた感じなの」

誰もその呟きを否定しなかった。

呟く空色を残し、御裏は空色母の横に並んで玄関を潜る。おおーっと声を発し、警備システムの設置された大きな門を見て感激していた。

こうなったらしかたない、空色は腹をくくる決心をした。

「もう遅い時間だけど、お家の方は心配しないの？」

空色母の問いかけに、ヘルメットを消した御裏は元気良く答える。「だいじょぶ、さっきメールしておきました。俺は色々あつて結構出歩くから、一日くらい家にいなくても平気」

「家に居たくない何か事情があるの？ ご免なさい、深入りする質問しちゃって。本当に珍しい事だわ、ロヒリンがお友達を連れてくるなんて」

「ロヒリン……いや、なんでも。うんうん、こいつ性格キツイから友達付き合い悪そうだもん」

御裏は単純な性格だけに何を言い出すのやら、不安だらけの空色が、御裏を母親から引き離す。

「ああっ、いいからいいから。命は、会ったばかりの他人の母親に何をペラペラ話しているの。お母さん、私達少し積もるお話があるから、部屋に行くね」

御裏の目が丸く輝いた。

「おっ、お前の部屋か。い、いいぞ見せる」

「やっぱり却下！ 今の言い方、隠すつもりのない下心を感じるわ」「じゃあ、お母さんと積もる話でもしよっかな。いいでしょ？」

さりげなく空色母と腕を組み、やけに親しげな態度の御裏に、空色母は困った顔で答える。

「あら、私はどちらでもいいけれど。命ちゃんみたいな若い方と、お話が合うかしら」

「合っ合っ、色々とあれやこれや聞きたい事があるんだ」

「ところでね、命ちゃんのそのおでこ何か付いて……それともわざと付けたの？」

御裏の額の文字について、ヘルメットを消した時点から気になっていた空色母が尋ね、空色はいつでも行動を起こせるように二人の後ろで只ならぬ気を発した。

「これ？ いやぁ困ったことに、お宅の娘さんが俺にマーキング……」

朗らかに笑いながら答える御裏の肩を、空色が叩く。

殺気を感じとつさに振り返った御裏の頬に、突き出した人差し指が刺さった。

「うぁ……いてて……何だ、指で良かった……あのな、子供の悪戯か」

「私のプライドとアイデンティティーが揺らぐのを感じる罪で連行よ」

バタバタと廊下を走る足音を聞きながら、空色母は笑って見送る。腕を掴まれ引っ張られ、強制的に御裏は空色の部屋へと投げ込まれるように連れ込まれる。

八 訪問（後書き）

ここまでお付き合い頂いてありがとうございます。

さて、肝心のストーリーはどうなったのか。

やたら会話の多い小説で成り立つのか。

さすが、話の組み立てをもっと考えて勉強して下さいと批評された作品です。

回を追うごとに、恥ずかしくなります。

次の章あたりからは、かなり書き込みますので更新が遅れるかもしれません。

九 疑問（前書き）

空色さん宅におじゃまです。

ここまで読んでいただきありがとうございます（本当に感謝です）
相変わらずのペースで話が続きます、やれやれですよ。

本題にいつ入るのか、それが問題だ。

九 疑問

空色の部屋に投げ入れられた御裏は、床の上につつぶせに倒れた。
「うわお。乱暴な奴だな、おまけにこんな物まで」

いつの間にか両手に手錠を造り出した御裏が、やれやれと首を振る。

「どんな趣味だよ全くもう」

「……首絞めるわよ、それとも殺されたい」

手錠を無表情に眺め、空色は冷たく卑下するように言い放つ。

「どっちも死ぬじゃねえかよ。ちえ、のり悪い奴」

手首の手錠を消した御裏が胡坐で座りなおした。

制服の上着を脱いでハンガーにかけ、空色が眉間を押さえる。

「さらに見せたくないものまで見せないで、目が潰れるわ」

「親の前と全然違うぜ、反応が。それに難儀なこった、視力が良いのに可愛そうだな」

空色の言葉を全く気にせず、御裏が膝を立てて床の上でくつろぐ。
空色はハンガーの針金が飛び出した箇所を指先で遊びながら、薄ら笑いを浮かべる。

「あなたの目を潰すのよ。その力強く、澄んだ、いやらしさと力才スに満ちた瞳を」

「ん？ 今のどういう例えだ。褒めたのか、貶めたのか、ただ単にお前が痛い目に遭えて言いたいのか」

「まったく間が悪いわね。さっと反応しようよ、命のような打つても響かない奴と仲良くなる奴がいるのかな」

「ヒリンって女がいる、お前だろ」

「そうだよ、自分で言って世界一残念だよ」

「じゃあ飲み物出せ、喉渴いた」

「だから、反応が鈍いなりに言葉のキャッチボールしなさいよ。投

げて取れなくても必死に追いかければ、それなりに可愛げがあるの。ただ突っ立てるだけじゃ、会話にならないでしょ」

「うつさい、黙るぞ」

「あら、一方的に私の攻撃を受け止める覚悟を決めたの。でくの坊と呼ぶわよ」

シンプルな白いシャツとジーンズ姿に着替えた空色が、部屋を出てすぐに冷たいお茶を注いだコップを二つ持ってきた。

「どうぞ、まず第一問。毒は、入っているかもしれないわよ」

「ん、それはそれは旨そうだ」

一瞬たりとも警戒せず素直にお茶を飲んだ御裏が、部屋の中をきよきよと見渡す。

空色の顔が青ざめ、両手が口元を隠し、震える声で呟いた。

「の、飲んだ……私はちゃんと言った、悪くない」

お茶を飲み干した御裏が一瞬だけ息を止める、そして笑いを浮かべてコップを置いた。

「恐ろしく演技派だなヒリンは、だがまだまだ甘いな、お前なら自分の家で犯人が誰だか簡単に分かる殺し方なんかないぜ。今回は俺の推理が勝つたな、当然だけど毒は入ってない。ふうん、割と普通の部屋……」

「そう、苦しく無いの？」

「それもう終わりだって、しつこいぞ。ベッドの下にエロ本無いし」

「さっきから探していたのはそれ。どうして女子高生の部屋でそれを探す、あんたエロすぎ」

エロ本の替わりに女性コミックを見つけた御裏が、何の気無しにページを捲る。

「こんなの読むんだ、線が細かくて綺麗な絵だなー。女の子って感じだな。俺は戦ったりするのが好きだから少年誌系しか読んだ事ないけど」

「そこは個人の趣味の範囲じゃないかしら、面白い話もあるし、私
もたまにはそっち系も読むわよ」

「結構シリアスな内容だなこれ。それより聞きたい事があるんだけど、結構突っ込んだ話するぞ」

「どうぞ、変な質問はなしよ」

あるページで動きを止めた御裏が、驚いてページを二度見する。

勉強机とセツトの椅子に座った空色に、御裏は耳まで真っ赤にな
って目を見開いて尋ねた。

「こ、この二人授業中に校舎裏で何やってんの、こ、これ、しちや
ってるよ！　すげ、この女の子童顔なのに何て獰猛ぶりだ！　相手
の男ハンサムだけどそれでいいのか？」

空色は思わず空のグラスを投げつける。

「あんた！　真剣な顔して聞きたい事ってそれ？」

「だってよ、花に囲まれて半裸だぜ。俺、度肝抜かれた、何だよこ
のセンス」

うわーと小さく呟いて、御裏がドキドキしながら震える手でペー
ジを捲り、ハッとして息を止めた。

そのページに何が書いてあるのか知っている空色が、御裏の反応
を興味深く見ていた。

「……うん、そうなの……いや、まあ……そこまで……そうなるよ
ね」

顔を赤くして御裏は本を閉じた。

珍らしいものを見るように興味深げに空色が尋ねる。

「どうしたの？」

「ううん、聞くな。ちょっと気持ちの整理が」

「この手の本って読まないの、割と普通だけど」

「い、いや……まさか本当にエロ系があるとは……しかも堂々と本
棚に」

「これ女性向け恋愛話メインの本だから」

「普通に売ってるのかこれ？」

「普通に本屋で入手可能だけど」

顔を手で押さえた御裏が、世の中そんなになっていたのかと何か分からないものに後悔した。

「命ってさ、割とウブなんだね。何て言うかさ、行動は変態でエロっぽいけど、実は純情なの？」

何故か正座で座り直し顔を抑えた御裏が首を振る。

「言わない言わない、恥ずかしい」

「わわっ、命の照れる言葉初めて聞いたけど……不気味で、か、かつわいいー！ でも不気味！ 気持ち悪い一歩手前」

暫くの間、照れまくる御裏を空色が言葉で弄り倒していた。

最後には半泣きになりそうになった御裏が落ち着いた頃合を見計らい、空色が肝心な話を尋ねた。

「あのね、皆はどうしておかしくなって、命と私はその中で平気だったの。それに、何もない所からどうして武器や道具を出せるの。

人間じゃないのと戦ったよね、あんなの初めて見た。そして壊れた道路が元通り、正直、私には何が何だかさっぱりよ」

「どっちも、俺にも正確には分かんない」

「頭が悪いから？」

「おい、普通にそれ聞くか」

御裏は空色の部屋の目覚まし時計を眺め、時計を例えに答える。

「何で時間が流れるのかなんて、誰も分かんないけど、普通に当たり前だろ。今日の出来事は、時計が壊れて、原因を起こした奴をやっつけたら直った感じかな。戦闘中の破壊は、異変が消えると何でか自然に消えるぜ」

解説を聞いた空色が指先を咥えて考え込み、空色なりの解釈を述べた。

「ゴキブリをスリッパで叩くみたいにあの男を粉碎したら、それから異変は起きてないね。つまり、古いテレビが故障して角を四十五度でぶったたけば直る、そういうイメージかな……皆がおかしくなった理由は、命でも分からないんだ。分からないだらけじゃないの……役立たずでごめんなさいは？」

「何で俺が責められるのか」

「命だから」

「……何か、普通にグサツときたんだけど」

しかたないわね、そう呟いた空色が質問を変える。

「武器は何となく出せるの？ 未来から来た猫型ロボットみたいに、便利な道具も何でも出せるの？」

「そうだなー、自分がちゃんと頭の中でイメージ出来る物だったらほとんど作れる。出来るのは何でか分かんない」

空色は、どこかに秘密のポケットがあるのではないかと、じつと御裏の腹を見つめる。御裏はお腹が空いていることに気づいた。

「そついや、もう夕食の時間だよな」

御裏の言葉が聞こえなかったように、空色は昼間の礼を述べる。

「そうなの？ その力のお陰で私はすごく助かったし、感謝もしているけど。命はどうして助けようと思ったの？」

「そんなお礼なんていいよ、気持ちがありがとな……それでな、腹減ったって分かりやすく言い直す、くれないの？ 何もなしなのか？ 隠すなよ、実はあるだろ」

「あのね、私が素直にお礼を言っているのよ。命は飲むと食うしか興味ないの、行動がケダモノそのものよ」

「そこまで言われちゃしかたない、ケダモノは撤回しろ。食い物は後回しで、好意を素直に受け取ってやるよ」

少し怒り気味に頭を掻き、それから照れて顔を赤くした御裏が横を向いて答えた。

「本音を言つと……学校で会った時にな、直感的に俺と同類がいる

なつて、あの時思ったからだ。だったら、俺と同じように困ったり
感じている筈だと思ったからな」

「私って、そんなに倒錯した軽い女に見えるのかな。命はそうかも
しれないけれど、学校で感じて困ったりしないわよ、そんな勘違い
されたら軽く鬱になりそう。性欲ぐらい抑えられるわ、同類にしな
いでよ、人間失格以前の人間未満のくせに」

「おいおい。恩人なのに、そんな風に思われた俺は、軽く雷に打た
れたような衝撃を受けた」

「そう、それならいつそ……」

「感電死しろ、そう言おうとしただろ。どうだ」

「……うれしいでしょ、って言おうとしたのに。話が脱線してるよ」

「ごまかしたな」

「脱線しているのは事実だと思わない？」

「はいはい、面倒な奴だなー。そんなに聞きたいなら、俺なりに理
解している範囲で説明する……」

軽いノックが聞こえ、部屋の外から空色母が、ご飯できたわよと
声を掛ける。

会話の途中で口を開いたままの御裏が、目を輝かせて答えた。

「はい、すぐ行きます！」

「何であんたが先に答えるの、いつから家の家族になったの！」

「今さつきからだ。ドラマだったらヒリンが妹役で、俺が兄貴役か。
黙っていれば可愛いのに、優しくてカッコイイ兄と性格のひん曲
がった見た目だけはいいい妹だな。案外、性格悪い役って人気出るん
だぜ、知ってた？」

「そんな設定にならないわよ。あんたは高校生で駆け落ちして、既
にバツ一、普段は家に居ない問題児よ。命がもし出演したらモザイ
ク入りまくるから、絶対に没よ」

「俺とヒリンが出たら絶対に面白いつて。生意気な妹に困りながら
も、心のどこかで可愛いなーと思って。最後は荒野で決闘だな……」

ヒューって効果音が聞こえて『強くなつたなヒリン』『さすがお兄様こそ』と言つて、まず回想シーンから」

「ストップ。どのみち私は出ないわよ、そんな一部のマニアに高い評価を受けるような設定。あげく付いた呼び名が世界一有名な駄作よ」

口げんかのような会話を交えつつ食事に向かう。

家に帰らず心配する空色母に、家は放任主義ですから勝手にしても大丈夫だと説明し、御裏は他人の家でしつかりとご飯を頂く。

食事を終えてテレビを見ながらくつろいでいた。母親はお酒を、御裏はお茶を片手にツマミを食べながら、あまりにも自然に過ごしていた。

実の子である空色が、自分が呼ばれた客のような気分で離れて見ている。

「そうか、私は自分から壁を作っていたのね。割といい家庭じゃないの。こんな兄弟なら、まあ、そこそこいいかな」

見たい番組が終わり、そろそろ片付けをしようと母親がテレビを切る。健康診断で量を制限されていると言った母親は、グラスの底に残ったお酒を最後にゆっくり呑んでいた。

立ち上がった御裏が空色の横に座り肩を叩いて言った。

「じゃあ部屋に戻ろうか」

「ぶっふっ」

空色がお茶を口から吹いた。

あーあ、きたねえ……と呟いた御裏が、お茶が飛んだ空色の服を傍にあつたふきんで拭く。

「あんたいつまで居座る気……や、ちょっと、自分でこれぐらいするから」

「何言ってるんだ、友達で兄弟だろ。それに他人でも気にするな」
「するわよ」

「どうして胸を隠すかな……あつ、貧乳でもスリムとかスレンダー

って言つて、今はもてるらしいぜ。そういやモデルも細いだろ、あの本の子もペツタンだったし、気にするな」

「あら、命は親切に優しくアドバイスしてくれたの？」

空色の体内に黒い怒りの渦が湧き上がった。

両親の前でなければ、罵詈雑言を浴びせて精神崩壊させていた。

それをやると子供の育て方を間違えたと心配を掛けるので、空色は引きつった笑いで耐える。

部屋に連れて行つて、これからどう泣かせてひれ伏させるか一瞬にして三十六手を考え付く。

禁断の三十七手目まで考えていたが、それは人としてしてはいけない事なので、自分で封印した。

不自然な程の愛くるしい笑顔で立ち上がった空色が、御裏の背中を押してリビングを出ようとした。

「お母さん、おいしかったよー」

御裏がそう言つて振り返ると、いつの間にかテレビが付いていた。

「ん、あれ？」

変な顔で部屋の中を二度、三度見直す御裏を置いて空色はさつさと出て行く。

何かを思い出したのか、天井を見上げて奥に消えた空色母の背中を御裏はじつと観察する。振り返った空色が御裏の腕を引っ張る。

「どうしたの、鼻が痒いような面白い変な顔して。誰も注目しないからって、いつまで突っ立ってるの止めなさい」

御裏は母親の立ち位置を確認した。後頭部を押さえ、変な顔のまま後ろ向きに出て行つた。

九 疑問（後書き）

もう、むちゃくちゃ恥ずかしいですよ……

一年前は何を考えてこの話を書いて、しかも投稿したのか。

次は戦闘シーンで、そこからポンポンと話が進みます。

昔の恥ずかしい文章がいっぱい、更新できないかもしれないです。
自分は学校で感じたりしない派です。

十 異界（前書き）

今回も二人は元気です。

ここまで読んで下さった読者様に感謝を込めて。

十 異界

空色の家の中で、御裏は途中で見かけた扉や窓、はては階段下の収納までを一々開けて何かを確認していた。

不審に思った空色が、窓から頭を出して外を伺う御裏の尻を引っ張る。

「うわ、いきなり何しやがる。ケツが見えるじゃねえか、大胆な奴だな」

「見たくないわよそんな物、早く上げてよ。さっきから何を探しているのか聞かせなさい」

「お前自分でやっておいて見たくないとか……ちょっと変わった事が無いか、いざとなったら逃げる場所を探していた」

「怪しい、不審、うさんくさいわ」

「あの感覚だ、一日二回は俺も初めてだが、ひよつとするとひよつとするかもな」

「……耳が腐らない言葉が出ることを、一応は失望しない程度に期待するけど、あの感覚って？」

「異変だ、どこか歪んでいるな」

「この家で？」

同じ番組を二回流したテレビ、飲み干した筈のグラスに再び酒が入っていた。

しかし母親の位置は戻っていなかった、どこかが歪んでずれている。今戻ったら空色母はテレビでさっきまでの番組を見ているのかもしれない。

異変が発生する際には、時間がずれる、場所がずれる。

普段ありえない森羅万象に関する物事が誤作動を発する。御裏は過去に何度も渡る数え切れない体験でそれを知っていた。

今が、その時なのか、そうでないかを知るには、ささいな現象が普段の記憶と違っていないかを確認する。

さらに感覚がずれるからか、脳内を打たれたような衝撃や違和感が発生する。

その説明を話しながら、空色の部屋に入る。空色の後から続いて入った御裏がドアを閉める。

ドアが閉まる音に同調し、御裏の脳裏に、錆びた金属が剥がれ落ちる感触。

粉っぽく、ざらついた金属が脳の端にぶつかって碎け散った――

――眉間に皺を寄せて首筋を押さえ、立ち止まった空色の背中にぶつかった。

「おっと、何やってんの、俺を入らせない気」

空色は無言のまま無表情で、動かない首をやっと傾けるように、無理に力を入れた動きで御裏を見返す。

御裏は空色の先を見て、口を大きく開き「あー」と意味の無い声を発した。

目の前には遠く大自然が広がる森と、緑が生い茂るなだらかな丘が延々と続く景色。

足元は冷たい石の床。

傾いた夕日が、古びた手すりの影を二人に落としていた。

空高く聳える、どこか異国の塔のような場所。夕暮れの風景と風に乗って感じる爽やかな空気が、自分の生まれた国と別世界なのは確かだった。

「綺麗に不意打ちやられた、ここはどこだ」

ドアを閉める祭に異変のスイッチを入れてしまったのだろう。

部屋ごと違う場所へ飛ばされたと察した御裏が、つるつるした石の床を歩き、錆びた手すりにもたれて風景を眺める。

「めちゃくちゃいい景色だ、おいヒリン、記念写真撮ろうぜ。カメ

「うある、無ければ携帯でがまんすつか」

「ちょ、ちよつと……」

「ここはどこ、私は誰ってか」

「私は私よ、ここは私の部屋じゃなかったの」

「そうであつて、そうでない。しかしヒリンが入るときは何も起きなかったのにな。俺が閉めたら飛ばされるって、今回は二人が狙われたのかな。ここまで出来るって大物だぜ」

「どうなってるのよ、幻覚でも見ているの？ 知らない場所なのに、何よこの懐かしい雰囲気」

空色は素早く半回転して部屋のドアを開ける、ドアすらも古風な木の扉に変わっていた。

重いノブを回し半開きにしたドアの先には、照明を落とした広いホールが広がっていた。

石の床と壁、柱や天井には金で細かい文様の装飾が施され、幾分剥げ落ちた感のある古い寺院の中のような建物だった。

「そっちはどうだ？」

手のひらについた錆を払い落しながら、御裏がのん気に尋ねる。真つ青な顔の空色が、ドアを閉めて震える声で答える。

「うそ……寺院の中みたい、暗くて何かそれっぽい仏像があつた」

「そうか。まあ、いきなり海の上とか雪山じゃなくて良かったな」

「これも、朝の異変と関係あるの」

「力のスケールが違うから別の敵だけど、同じ系統だろうな。俺達が朝感じた異変ってのは、普段通りにあるべき事が、人の力では変えようのない事が、歪に組み替えられる。大体はそれから始まって

……お？」

手すりにもたれて腕を組み話す御裏の背後に、空から降ってきた影が空中で停止した。

影に驚き、はっと息を呑む空色。

空色の視線の先を追い、御裏は話しながら首を斜め後ろに傾ける。

「で、原因を起こしていると思われる変な奴が、一匹、二匹くらいどこかに混じっているんだぜ。よう、今回は出てくるの早いじゃん」

黒い影が渦を巻き、渦を縁取るように緑の草木の額が現れる。

その辺りの木々や草を編んで作ったような額から、黒髪に覆われた人の頭部が現れる。

続いて全身が現れ、頭の先からつま先まで黒で統一した長身の男が姿を現す。

膝まで伸びた不気味な程に黒い髪、垂れた髪の間から覗く、無表情だが整った顔。

肌を一切露出させない全身を覆う黒い服、全身から発せられ蜘蛛の足のように揺らめく黒い影。

木々が絡まった環を背中に立つ男に、御裏がヒューと口笛を吹く。
「おお、俺、結構そのセンス好きかも。ビジュアル系のバンドでもやるの？」

ハートにバツテンのキルマークを描いた爪で相手を指差し、腰に手を当てた御裏が尋ねる。

「最初から強そうなのは分かっている。尋ねるぞ、お前に名はあるのか？」

全身が海の底に漬かっていたかのように濡れた感じのある男は、整った顔で無表情に答えた。動くつど、黒い残像が水面に石を投げた残した輪のように体からにじみ出る。

「力を持つ者よ。我の名はそちの国では夜叉と呼ばれ、地理的にヤークシー二とも呼ばれる」

「あ、名前を聞いたことある、えーと、どこの何だっけヒリン。テレビに出てたっけ？」

空色は大きな柱の影に隠れていた。

「もう、間抜けな質問で私の場所がばれるでしょうが。詳しくは知らないけれど、乱暴な鬼神で、非道な行いを、夜叉のごときって言う例えもある。参考までに、テレビには出てないわ」

夜叉と名乗る男が、すつと手を上げ御裏を指差した。

「人ならざる道を進む者を、狩る者だった。御主はメイカー、いざ力を試さん」

何らかの攻撃で、御裏の足元の石が爆破、破裂した。

御裏の足元から股の間を抜け、背後に向かい一直線に爆発と煙が舞い上がる。

立て続けに鼓膜を打ち破るような爆発音、碎ける石の建物。

さらに壁、天井にまで夜叉が指でなぞった一本の線の跡が、次々に爆発。

支えを破壊され崩れた石の屋根が崩れ、耳を覆って悲鳴を発する空色の近くに落下した。

爆発によって小さな竜巻が渦巻く煙に御裏の姿が隠れる。

煙が割れ、胸元の開いた短い制服にブーツ姿の御裏が現れる。

戦闘機に乗るようなゴーグル付きのヘルメットを被り、健康的な白い歯を見せニツと笑う。

「おっかねー。改めて、よ・ろ・し・くっ。お待たせしたな、こいつが俺の戦闘服」

両手を伸ばし、ビツと人差し指で夜叉を指す。

「それで、お返しつと。今回は初めから全力見せるぜ」

片手で抱えるには重たそうな、円盤のようなドラム式弾倉を持つサブマシンガンが左右の手に一丁つつ現れる。

互いの間は十メートル強、狙いを定める距離では無かった。

無造作に両手の引き金を引く。

軽快な発射音と共に、弾丸が夜叉の体に次々と命中。

夜叉は悠然と立ったまま、撃たれた箇所から血のような黒い煙を飛び散らす。

弾数と威力を重視した火器が、雨のように弾を降り注ぐ。

手を上げようとした夜叉の腕が途中で千切れ、黒い粒子となって霧散する。

「ほお」

関心したように夜叉が声を漏らす。

黒い粒子が腕の付け根に吸い込まれるように集まり、再生を開始。御裏は全弾撃ちつくしたサブマシンガンを投げ捨てた。

握って開いた手の平の上に、黒い球形の塊。

形状の様々な手榴弾を生成。さらに数十個の手榴弾を生成し転がす。

「ボムッ！」

親指を下に向けて下ろすと同時に、夜叉の周囲にばら撒かれた手榴弾が一気に点火。

連発花火のような破裂音と、圧縮された火薬が一気に爆発する閃光が幾重にも重なる。

無数の爆発に包まれた夜叉の姿が、擦れて薄くなる。

爆発により、歪んだ舞台に不具合が発生。

壁や床が一瞬色を失い、枠組みだけの透明な建物と化す。

煙にノイズが走り、目が痛くなるような点滅を繰り返した。

数秒の後、端から色と質感が戻り、破損された箇所も同時に再生される。

身を屈めて隠れていた空色の傍に落下した石片が、色を取り戻しつつ天井へ浮かび上がり元の場所に同調した。

爆炎を睨みつけていた御裏が、ゴーグルに浮かび上がる反応で夜叉の存在を確認した。

「流石！ まだまだいくぜ、フルコースを召し上げれ」

両手で重たい物を持ち上げる仕草で、よいしょと見えない何かを腰に構える。

大口径の火薬が詰まった薬莢を連続で打ち出す兵器、オートマチッククグレネードを膝を曲げて構える。

構えると同時に、目視で連続発射。

実物は着地点の周囲約十メートルが殺傷範囲と言われる弾薬。

爆風と熱と破片をもろにかぶりながら、御裏は全弾を撃ちつくす。破壊力の大きさに、目標はおるか周囲の空間が燃え出す。

溢れた熱が、蛇のような炎の姿となり逃げるように這い回る。

熱気と火薬、弾薬の破片が炎を上げ、石材を繋ぐ素材が燃える。

黒い煙が立ち込め、焦げ臭い匂いが鼻を突く。

「滅しろ！」

御裏が肩に大型の対戦車砲を構える。

四つの砲身が並び、御裏が独特にイメージし改良した武器。

「どーん！」

激しいバックファイヤーを発し、四発のミサイルが白煙を引き煙の中に打ち込まれた。

御裏は武器を消し、後ろに飛び下がる。

しゃがんで両手の前に防護壁を作り出し、全身を鎧のような服で庇う。

ついでに空色の前にも防護壁を造っておいた。

同時に、目標ごと建物までも吹き飛ばす威力を持つ、強烈な爆発が起こった。

分厚い金属のような防護壁を抑えた手に、爆破の振動と熱が伝わる。

炎を纏う突風が収まるまでの間、御裏は受け止めた衝撃で震える防護壁の後ろに身を隠す。

爆風が収まり、周囲にちろちろと爆発の残り火が燃える中、立ち上がった御裏が全身の防護服を解除した。

視界に入るのは吹き飛ばされ、削り取られ、崖のように崩れて黒煙をくすぶらせる建物の跡。

障害物が消え、前方百八十度に広がる、緑豊かな丘陵。

攻撃が集中した場所の空間が剥がれ落ち、ブラックホールのような黒い穴がぼつかりと開いていた。

黒い穴は周囲から色を補充するように、徐々に縁を滲ませて縮ま

る。

見晴らしの良さと自分の攻撃の破壊力に、しでかした本人が驚いていた。

「……我ながらやり過ぎた感が……知らない場所だし、すっきりしたからまあいいか」

十 異界（後書き）

自分が命だったら、以前辞めた会社にぶっぱなして……いやいや、生々しい話は面白くないですね。

読んで頂いてありがとうございます。

十一 決意（前書き）

前回の戦闘の続きです。

序章に出現した夜叉の出番が、やっと廻ってきました。
お待たせした分だけ暴れています。

十一 決意

がこんつ、と崩れた壁が崩れる音が聞こえ、瓦礫の中から空色がふらふらと立ち上がる。

弾丸が飛び交い、そこかしこで爆発が起こり、建物が崩れる。

まるで戦場ど真ん中に放り出され死ぬ思いだったのだろう。煤と砂で汚れたパジャマ姿の空色が、汗で髪を額に張りかせ、泣きそうな顔で御裏の元へ駆け寄る。

御裏はやりきった感のある、いい笑顔で両手を広げて迎える。

「やっぱり女の子だな、怖かったか、可愛いところあるじゃんか。よし俺の胸に」

空色は体を投げ出すように駆け寄り、御裏の腹を思いっきり拳で殴った。

「何やってんの、この危険人物は！」

「どうして！」

「あんたはこの世界の何人なの！ ヒューン、ドーン、ボカーンつて……辺り構わず武器乱射？ 馬鹿に何とかを実行して、ことわざ昔話の挿絵から抜け出してきたお茶目さんでしょ。童話やアニメのキャラが現実になら面白いかもしれないと考えた事もあるわ、それも今さっき撤回よ。巻き込まれたら洒落にならないから、毎回死ぬって！ 第一話が奇跡の最終回よ！」

「いて、入ってる、入ってる……抑えて抑えて、思ったより元気だなあ」

「こんな場所で死んでなるものか、何度も呪文のように唱えて、それだけを考えていたわ。命はもうターンエンド、生き延びたからにはこちらの番ね。覚えている？ 三百倍返しよ」

空色がふおおおーと怪しげな息を吐き、御裏の服の端を掴んで片足を上げた。

はいはい、そう呟いた御裏が空色の頭をポンポンと叩く。

「それだけ喋れるなら怪我は無いみたいだな。元氣過ぎて困ったけど、速攻で倒したかいがあった」

汚れた足の裏を御裏の服で拭いて、ついでに蹴りも入れようとしていた空色が、足を上げた格好で動きを止める。

「その言い方だと、私を巻き込みたくなくて、命はあんな戦い方をしたみたいに聞こえるよ」

「ヒリンが人質に取りられたり相手の攻撃がもし万が一当たったら、たまったもんじゃない。強そうだったから、相手の出方を見るなんて余裕、無かったから……で、その足は何。私の足綺麗でしょってか」

「うっん、綺麗なのは当然としてね、私の事心配して戦ったんだね」

「心配だったのは崩れた建物の下敷きになる事だったが、次にお前の思考回路だ。壁の影に隠れていたからな、まずは心配無しと判断した」

「そうなんだ……」

「そうなんだよ」

「命は怪我しなかったの」

「無傷だぜ。あ、足切ってる、自分じゃ見えにくいだろうちょっといいか」

空色の踵が切れ血が滲んでいた。

しゃがんだ御裏が足首を掴み、右手に絆創膏を作り、傷口をペロリと舐めた。

「あ……ひゃあ！」

複雑な感情の籠った、鼻から抜けるような悲鳴を発し、空色はその場にへたり込んだ。

「ほれ、絆創膏貼ったぞ。お前、若い女があひゃあ……どんな場合に使う叫びだよ」

「いい、いいからお願い、足から手を離して」

悪戯を思いついた御裏が、足の裏をこちょこちょと擽る。

「あ……いやあー」

普段の態度からは想像もつかない弱々しい声を発し、空色が身を擦って逃げようとする。

「お前、さては足の裏が弱点だな」

ゴーグルの下で、御裏の目が鋭く光る。

「や、止めてよ……」

「いいねー。初めて会った時から、人と違う素質はあると思っていたぜ。足の裏とは意外だった」

目を輝かせて足の裏をくすぐっていた御裏の動きが不意に止まる。力の抜けた空色が、必死に腰をひねってその手から逃れた。

荒い息を吐き、空色は御裏から離れ、熱のあるような顔でにらみ付ける。

御裏の背後にまばらな草木を編んだ円が浮かび、円の中には暗闇が窓ガラスのように嵌っていた。

その暗闇から、薄く半透明なピアノ線のような無数の細長い線が延びる。

薄っすらと見える線は、背後から御裏の全身を縛りつけ動きを封じていた。

身を硬くして息をするのも忘れ、空色の目が赤い点に釘付けになる。

まるで雨上がりの蜘蛛の巣を伝う、雨の雫のような血が糸を伝いポタリポタリと地面に落ちた。

目の前の光景を理解するまで停止していた空色が、無理やり空気を吸い込み叫んだ。

「み、みこと！」

「いてて、動けねえ……くそ、何だ……やられたなあ」

武器を作って反撃しようとした御裏の体を、さらに線が巻きついて締め上げる。

空色に向かい軽く笑った御裏が地面に倒れた。木々で編まれたリーフの中に張られた闇から、夜叉の姿が浮かび上がるように現れる。

雨のように降り注ぐ糸に巻き取られ、蓑虫か糸巻きリボンを思わせる姿になった御裏の目の端に、傷一つ負っていない夜叉の姿が映った。

顔も糸で覆われた御裏が、全身から幾千もの刃物を生やして糸に抵抗する。

御裏を閉じ込めた繭の中から、ざしゅ、ざしゅ、と糸を断ち鋭い刃物が突き出す。

生えた刃物にも糸は絡みつき、切られた箇所を瞬時に新たな糸が塞ぐ。

「我も創造の力を持つ。等しき力で争えば互いに勝負付かず、これ因果なり」

「倒せないなら、動きを封じればいいと」

無から武器や道具を作り出す御裏。

人とは違う存在である夜叉。

互いの攻撃は、周囲を破壊するも、相手を倒すには至らなかった。一方的に攻撃され続けたように見えた夜叉も、実際には幾度もの反撃を試みていた。

だが、武器を創造する傍らで御裏は瞬間的に防壁壁を作成し、防壁壁を超えてなお力で固めた制服が難なく弾いた。

糸は不意を突き、柔をもって剛を制す攻撃だった。

夜叉の力を細い線に集約した、通常では絶対に切れない糸。

御裏を倒す威力は無いが、破壊される以上の速度で糸を創造させ続け動きを封じていた。

血が流れたが、不意打ちで皮膚の一部が薄く切れただけだった。

「これで終いか。空の人を任せられぬな」

夜叉が空色に黒い手を差し伸べる。

「我と参れ、緋環よ」

空色は小さな手をぎゅっと握り締め、夜叉と御裏を見比べる。

ほとんど迷わずに決断を下し、大きな切れ長の瞳で夜叉を真正面から見返した。

その瞳は深く力強く、確固たる決断を下した意思が込められていた。

毅然とした態度の空色は、自分がこの状況で決められるであろう選択肢の中から、一つの決断を迷わずに言った。

「今、私に命令しようとしたの？ 私に命令しないでよ」

夜叉は手を伸ばしたまま無言で空色の口上に耳を傾け、待った。

「これで人質を取ったつもりでしょうけど、こんなもの人質にならないのよ！ 教えてあげるわ、命の頭文字MはドMを示す称号なのよ、残念だけど束縛された苦痛をむしる歓迎して喜んでいるはず。

だから、色々な意味で後悔する前に、聞きたくないあえぎ声を聞かされる前に、その緊縛プレイを止めることをお勧めするわ」

夜叉が無表情に、話の流れからは侮蔑するように思える視線で、糸で封じられた御裏を見下す。

御裏は自分にそんな称号と趣味があると決められ、恥ずかしさのあまり敵の前から逃げたくなった。

「いい訳させろ！ てか、もう勘弁して」

「ほら、私が止めるように言ったら途端に言い返すでしょう。あれは知らない人に自分の趣向を知られた照れ隠しなの。もしくは困ったふりして、気持ちよくて続けて……」

夜叉が御裏の上に手を翳す、御裏の上に大きな影が生じた。

『ヴァイシユラヴァナの杖』

次の瞬間、三人が立つ塔と同じような大きさの巨大な柱が空から

降り、御裏を押し潰す。

「おおああああー……」

柱に押し潰され、塔を破壊しつつ下に落ちる御裏の絶叫が響き渡り、それが小さくなりすぐに聞こえなくなった、

空色は落下の衝撃で生じた風圧を、顔の前に構えた腕で避けた。

腕の間から覗く柱は延々と尽きることなく下へ下へと進む。

塔の横半分以上を削り、柱は柔らかなケーキに蝋燭を刺すように地面まで突き刺さる。すぐ傍で落雷が発生したような轟音を発し、地面に突き刺さって止まった。

次の言葉を言いかけたまま、自分のすぐ近くに落ちた巨大な柱を、空色は口を開けて見ていた。

避けようとも、悲鳴を上げようとも思わなかった。ただ、目の前の柱が見間違えではないかと、信じられない思いで気が抜けたように見ていた。

見上げると、天まで届きそうな柱が高く伸びている。

柱は空から降ってきたのだろうか、雲にぽっかり丸い穴が開き、澄み切った空が伺える穴の周りが渦巻いていた。

十一 決意（後書き）

ここまで読んでいただき、お疲れ様でした。

Mって実際どうなんだろうね、自分は違うと思います。

ヴァイシユヴァナは夜叉を従えたという（上司的な）武神の名前から取りました。

合ってますよ……ね？

十二 三巴（前書き）

今回も読んで頂いてありがとうございます。
登場人物も元気いっぱい暴れています。

暴れすぎて収集がつかない？ いえ、計算通りです（汗）

十二 三巴

黒色の陽炎に包まれた夜叉が、塔が建ったような巨大な柱の後ろから現れる。

「メイカーは封じた。来て貰わねば困るのだ、我は約束した、そちを守らねばならぬ」

夜叉が木々の枠に囲まれた闇の中に半身を沈め、空色に手招きする。

空色は目を閉じて悲しそうに呟く。

「ついに命が、気持ちよさそうに昇天しちゃった。本望だよ」

いつしか空が曇り、遠くから雷鳴が聞こえた。

「早く参られよ、悟られた故に時は少なし。我は敵にあらず、メイカーは死んでいない」

天候の変化から何かを読み取った夜叉が、何度も手招きをする。

「我はむやみと空に触れられぬ、手荒な真似はせず、来ればメイカーを開放しよう」

「私の手を煩わせてしかたない奴だね。命がどうなったか見てくる、楽しみだわ」

空色が踵を返し、降りる手段を探そうと駆け出した。

夜叉が視線を投げた建物の扉の前に、床から石の壁がせり上がり行く手を封じる。

「空の人に力は使いたくなかったのだ。失礼だが、少し拝見させて頂こう『緊那羅きんならの人形』」

夜叉が手を振ると、瓦礫と化した石が集まり人型の石人形を作り出す。

石人形がごつごつした手を伸ばし、小さな悲鳴を発して逃げようと、後ろを向いた空色の胴体を抱きかかえるように持ち上げる。

「離して、どうする気よこの変態！」

構造が脆いのか、空色を抱きかかえると石人形の体が端から砂と化し崩れる。

一步踏み出すごとに、その身を削りながら、石人形は夜叉の待つ闇の穴へと歩を進める。

夜叉が空色と石人形のやり取りを眺め、呟いた。

「ほう、やはり空の力」

石人形の肩をポカポカ叩きながら、空色が叫んだ。

「お願い、助けて命、誰か助けて！」

空色の願いを聞き届けたかのように、曇りだした空の一点が光り、辺り一帯に優しい声が響き渡る。

「しかと望み聞いた。菩提樹の兵士、夜叉よ、相手になるぞ」

闇から全身を出した夜叉が空を見上げ、全身を覆う長い髪をかき上げ顔を露にする。

囚われた空色が一瞬見とれるほどの、人間ではありえない整った美貌が空を睨んだ。

「来たか……渡さぬ。どこの眷属か知らぬが、我の名は昔の操り人形ではあらず、受けて立とう」

夜叉の答えに応じたように、空の曇が一瞬で黒さと厚みを増す。

雷鳴が鳴り、続いて空から滝のような雨が一齐に降り注ぐ。

黒雲と豪雨で夜のように暗くなった中、夜叉の体に触れる寸前で雨は全て弾かれる。

雨に打たれた石人形が、水を掛けられた砂のように解けた。

石つぶてのような雨に頭を庇った空色が、土砂の山と化した石人形の残骸から滑り落ちる。

夜叉が手を振り、緑の木々が縁取る枠が四枚、空色の周囲に生まれ、三角錐の形を作る。

枠から枝や草木が生え、網のようになった三角錐の中に空色を受け止めた。

夜叉が自分の世界と同化、世界を戦闘形態に切り替え、敵の姿と情報を収集する。

「空の人よ、そちの力は強大なりて、触れるべからず出るでないぞ。我が死守する」

宙に浮かぶ三角錐を遠ざけ、夜叉は空色を建物の影に隠す。

「クウの力を抑え戦うつもりか。空の人は助けを欲した、理不尽ではないか夜叉よ」

空から聞こえる声が、夜叉の行動をあざ笑った。

「ここは我が世界、我が神殿、地の利あり。世界を相手に戦うとは愚か」

夜叉が軽く地面を蹴り、宙に浮かぶ。

体の周囲に、大小様々な木々が生い茂る。

草が生え、花が咲き、葉が生い茂る森を背負い、夜叉が空に向かい叫んだ。

「退散せよ！」

雨を吸い上げ、急背長した森が周囲を覆い尽くす。

世界の色が濃くなり、生い茂る森は急成長し、槍のように先の尖った木々が天目掛けて伸びる。

ねじくれ束になった巨大な木々が、柔らかい雲の腹を突き刺す。見渡す限り一面の木々を武器に変えた夜叉の攻撃。

雲が逃げるように渦を巻いて高度を上げ、空の上の存在が怒り、雷を落とす。

鞭のような雷の一撃で、町一つ分はある森が弾け、炭と化した。雷鳴が響き、一層の豪雨が降りしきる崩れた塔。

石つぶてのような雨に打たれ重たい色に濡れ、太い柱に貫かれた半ば崩れた塔から叫び声が聞こえた。

「……あああああああああああ！」

塔に突き刺さった柱が裂け、水しぶきを跳ね上げ、爆音と共に御裏が飛び出す。

背中には火を噴くロケット、両手と頭には巨大なドリル。

「やってくれたな！ それに俺はMじゃねえ！ もう一度言っ、そういう趣味は持たない、絶対に！」

両手を挙げて空に飛び上がった御裏は、ロケットの推進力にまかせて宙をジグザグに飛ぶ。

木の網の中で、空色が昔のSF映画のように空を飛ぶ御裏に手を振る。

「うっわー、待ってたけど、命の格好恥ずかしくて、ださいっ。一周廻って前衛的にも取れるけど」

「今回の敵は二人！」

御裏がビツと両手を突き出し、夜叉と空の光る一角を指差す。

「俺は止められない、そう、何があっても」

夜叉は覆い茂る木々に囲まれた中から、ちらりと御裏を見る。

空の存在が隠れる雲の流れが変わり、渦を巻いた中央部が角度を変えた。御裏の登場に意識を向けたのがはつきりと分かった。

「魂の叫びだ、ロック！」

御裏のゴーグル内に、夜叉と、空の向こうの见えない何かに合わせた照準が浮かび上がった。

「んでもってファイアー！ 何もかも滅しな！」

背中のかく火薬を詰め込むだけ詰めたロケットを発射。

ピンクの煙を発して飛ぶロケットは、夜叉と台風の目のような空の存在の間で爆発。

真っ赤な閃光が天も地をも赤く染める。

推進力を失った御裏が、回転しながら落下する。

「まだまだ」

空になった背中の部分に御裏は思い出せるだけの兵器を次々と創造する。

迫撃砲、高射砲、ミサイル、重機関砲といった近代兵器が、次から次へと打ち出された。

連射後の発射煙からパラシュートを背負った御裏が落下し、塔の崩れた先端に着地する。

「見てろよヒリン、こいつがお前に魅せる……」

数え切れない程ばら撒かれた弾薬が、目標に次々と命中。

空に二つ三つ、六つ七つ、数百発の破壊を伴う火花が華を咲かせる。

爆発により、太陽が間近に現れたかのような閃光で世界が照らされた。

衝撃で空気が震え、世界の周囲に割れたような輝が発生。

光源に異変が発生し、空が青から黒と白にめまぐるしく変色する。

床に両手を突いた御裏が手を持ち上げると突然、巨大な建造物が出現した。

明滅する雷と爆発の閃光に照らされ、黒い影を落とす建物。

数え切れない兵器を装備した、無骨なピンクと紫色の要塞だった。

「きたきたー、どうだ、俺の熱い魂の叫びだぜ！」

要塞の上にリップマークが描かれ、そこに立った御裏が叫ぶ。

囚われの空色に向き直り、握り拳を腰に構え自信満々の笑顔でポーズを決める。

檻の中の空色は、両手を組み合わせ微笑み、口を押さえて答えた。
「素敵……なんて口が裂けても言えない。気持ちだけで……ご免なさい、嘘つこうとしました。気持ちも結構です、むしろ悪いです。反省して正直に言います。その、センスが痛くて辛いから、気分が悪くなる前にもう目を逸らしてもいい？」

本当に気分が悪くなったのか、口を押さえた空色が横を向き目を伏せた。

崩れかけた塔が要塞の重みで傾く。

斜めに傾いた要塞の上で、御裏はかく然としてゴーグルを外す。

「まじで信じられねー。今の登場の仕方と攻撃、しかもお前を助けて非常に格好良くない。格好良いは人のセンスだからさ、百歩譲っても空気が読んでさ、そこは『うん』って言うべきだ。要塞だよ要塞、硬くて強くて大きい基地だよ。しかもヒリンに合わせて女の子色バージョン。俺、昔からずっといつか出そうと考えていたんだぜ、子供の頃こういうの憧れなかった？」

気持ち揺らいだ御裏が、まじでまじでと信じられずに問い返す。口を押えた空色が辛そうに答える。

「まじで。だってそれ、デザイン悪いし……私は女の子だし、要塞マニアとも趣味が違う……何だか重くて引いたわ。硬くて大きいのって……私そこまで望んでいないし……置く場所にも困るよね」

両手を大きく振った御裏が、もう言うなと両手を交差させてバツ印を組んだ。

「はいそこまで、精神攻撃ストップ。まず、やたら基準が厳しいぞ。それに、変な男から貰ったプレゼントみたいな言い方するな、人の心をこの塔みたいに折りやがって。お前みたいな態度の悪い女になんか、やらねーよ」

「いらないうって何度も言ってるでしょう。あんた日本語を聞き取れないの？ それよりもね、あの夜叉って人とても驚くほどイケメンなの。私ファンになりそう、顔は止めてあげて、綺麗な顔に当たったら世界の罪だわ。世界はどうでもいいけど、私の心が痛むの」

御裏が何か言おうとして照る唇を舐め、武器を作りかけた手を止めた。

「ちょ……ちょっと待て。お前、どっちの心配している。手が滑った振りをして、勢い余ってお前を撃とうかと思っただぞ」

「余裕じゃないの。駄目だよ命、余所見してお喋りしていると危ないよ」

天から、雨に代わり灼熱の熱線が降り注いだ。

熱線は夜叉の創造した木々を焼き払い、石の建物をもまるで飴のように溶かす。

世界を焼き尽くす炎の雨により、御裏の作り出した要塞は出番を待たずして穴だらけにされて消滅した。

空色にも熱線は降り注ぐ。

夜叉の作り出した木々の網が、何事も無かったかのように熱戦を受け流した。

御裏はチューリップを逆さにしたような装飾の傘を造り防御する。

「ああー、目がチカチカするっての」

要塞を壊された怒りに、御裏が熱線を受け止めながら空を睨み付ける。

ゴーグルを被りなおし車両で引く対空兵器を作り出し反撃を開始する御裏に、空色がしきりに喋りかける。

「ねえねえ、命、怒らないでよー。私さっきので我慢するから、機嫌を直して聞いて」

「うっせーな。今戦闘中だ」

「あのね、どうやら私、夜叉ともう一人から狙われているようなの。私を人質にするか、私に対しての利用価値をどこに見出したのでしょうか。これは見方によっては私が非常に美人、かつ頭脳も宜しくて、魅惑に負けた恋愛的名つれから産まれた争いだと言えるわ。しかしながら、現実的な対応としては、命に対する人質という説が有力で妥当かと。何故なら命はどこで恨みを買っているやら、バカにされているやら、本人に覚えが無いくらいに積もり積もった怨みがあるやら。他人からの言動を素直に、言い換えればバカ正直に受けつつ勘違いを……」

「何だよもう、本当に聞こえないって。ヒリンが何言ってるか気になって集中できない」

中途半端な威力の兵器では夜叉や、もう一人に大したダメージは

無いようだったので、対空兵器をとりあえず消した。

上空から攻撃を止めた御裏に対し反撃される。

降りしきる雨が空中で膨らみ、一抱えもある鉄球が幾つも幾つも降り落ちる。

支えのある坂道のような防護壁を造ってやり過ぎた御裏が、爆発音と破壊音の中、糸の付いた一組のコップを作り出す。

戦闘中でも、茶色い水玉模様のコップに赤い糸は御裏のどこかずれた美意識の表れだった。

「高性能糸電話だ、これで連絡しろ、応答せよ」

片方のコップを放り投げた御裏が、片手で耳にコップ、片手には考えすぎて何に使うのか分からなくなった武器を持ち通信を行なう。
「もしもし、こちら御裏」

「はい、おかけになった糸電話はただ今やる気ありません。無駄に留守電モードもあります。解除するには早口で三回、空色さんビューティフル最高と言って、鼻に指を突っ込んで豚の鳴きまねをして下さい」

「うん、このくそ非常時に、いい返事だ。いつか泣かす」

「それはいいとしてね」

「いいのか……いや、突っ込むな相手のペースだ。はいはい、俺は寛大だから合わせてやるが、全く自己中心でマイペースな奴だな」

「ちゃんと聞いている？」

御裏はかなりいらつとした、一呼吸おいて気を静めてから叫んだ。

「それはお前だ！」

「夜叉と雲大王だけど」

「雲の奴は大王っていつ名乗った、雲の国があるのか？ 変な名前付けて、見境無しにいじくるな！」

「私をね、無傷で連れて行きたいようなのよ。だから、夜叉も防御してくれていると思うの。私に対して危害を加えるつもりは無いみたい」

「そのピラミッドだな。夜叉がヒリンを守るのは、行動が変だと俺も思った。でも何でだ」

「そうなの、考えたんだけど。こんなに美人で穢れの無い私が欲しいのはしかたないとして、誰を選んだら良いのかな」

欲しいの意味が違うし、選ぶなら味方の俺だろそこは、一体何が聞きたい。

言いかけて、あまりにも当然の返答をしても言い返されそうで、御裏は改めて何も言いたくなかった。

どうにでもなれと本音を呟く。

「あえて言うなら……驚いて言葉に詰まった」

「夜叉はすごいイケメンでしょ、雲大王はまだ見てないから、軽く期待が持てるくらいかな。でもね、この前、三年生の戸志木さんから、二年の嵯峨君にも告白されているの。一年生の篤君は子供っぽくて、その場で泣かせない程度に断ったけど……」

「どうしてそんなにもてるっすか、全学年コンプリートして所詮は顔なんっすか。俺はそいつらの思考が理解できません。彼らに前回の本当の姿を見せてやりたいよ。おい、君達危険だから逃げろ」
「そんな言い方は半分正解だわ。私は付き合ったら結構一途なのに。命は誰が いいと思う？」

十二 三巴（後書き）

空色は他にも大勢から告白されていますよ、所詮は外面ですかね、男は騙されやすいですから。

最後まで読んで頂ければ分かるようにはしていますが、どこかで軽く世界設定でも書いたほうがいいかな。

もしかしてと思うのですが、この作品はチートっぽいのでしょうか？

十三 心声（前書き）

空色さん、前から打ち解けてはいたんですけど、少しでも本音を言います。

十三 心聲

雨が振りしきる戦場で、御裏は普通に答えた。

「お前を含めて全員パスで」

「だよ、言われてもしかたないのかな」

「あつそう……疲れる悪戯電話なら切るぞ」

御裏は無表情で糸を切ろうとした。

慌てた空色が大声で訴える。

「待つて色々違うの、お願い切らないで。私は誰にも興味ないから、命に助けて欲しいの。一緒に帰ろうよ。私には攻撃してこないみたいだから、分かるでしょ」

糸電話から耳を離し、困ったような表情をした御裏が手にした糸電話を消すそぶりをして、ため息を吐くと口に当てた。

「まず、大声を出すから耳が痛い。普通の声でいい、俺にもう一押し、素直に言ってくれるか？」

空色が大事なものを抱えるように糸電話のコップを両手で支えた。素直な感情を表に出すのが苦手な空色は、長い睫の生えた瞼を下ろし、気まずさを隠すように早口で答えた。

「私に構わず思いつきり戦つて。このふざけた状況を、命の力で何とかして。私、性格こんなだから、最初はいいいけれど、結局は気味が悪いって言われて友達がいないの！男だつて、男だつてすぐ離れるし！やつと喧嘩もできて馬鹿を言い合える友達ができたの。命は私にとって唯一の飾らなくていい相手、もっと仲良くなりたい、もっと一緒にいたいよ！」

ほんの少しの間、時間しにて一秒にも満たない時間、御裏は糸電話を耳に当てて呼吸を止めた。

大きくて意志の強そうな目が、気のせいか潤んでいた。

「友達だろ、いらない心配せずに俺に任せろ。そうだな、帰ったらまた家で何かいいもの食わせてくれ」

「うん、次は私も何か作ってあげるよ。毒は入れないよ」

「オツケー、じゃあ切るから……やるか」

御裏が糸電話を消し、元気良く肩を回して立ち上がった。

二人が長々と会話を交える間にも、空からは熱線の次に、硫酸、刃物、未知の形状をした兵器までもが飛び交い、夜叉と空の敵が交戦していた。

空色に害を与えるつもりのない夜叉が、前面に出て二人への被害を減らしていた。

夜叉は辺り一面の木々や、舞い散る葉から木の兵隊を作り出し空へと突撃させる。

まるで木々をなびかせる風の一片一片が実体化したかのような、おびただしい数の木の兵士達が、手にした武器から雷や炎を発し、雲の上の見えない相手を攻撃する。

夜叉が手を振るう度、手でなぞった線上の雲が弾け、空間を震わす激しい爆発が生じる。

空は破壊尽くされ、色を失い、亀裂が走り、割れた空間からは、空の向こうの世界に生える巨大な木々の姿が覗く。

塔も御裏と空色が立つ場所を残し、破壊され焼け落ち、解けて跡形も無く消えていた。

御裏は板状の刃物が降る間を歩き、雷が飛び散る戦場の中、空色を覆う檻の横に立つ。

直撃した刃物を御裏は手の一振りで弾き返した。

片手に刀を創造する。構えると、一振りで夜叉の作った防御を兼ねた檻を破壊した。

すぐ横で、空気を圧縮させた弾薬の流れ弾が爆破。

圧縮された空気が膨張し、町一つは軽く吹き飛ばしそんな途方も

ない圧力が弾けた。

御裏は空色と自分を覆う壁を生成、圧縮爆弾の威力を防いだ。防護壁の外では塔の残骸を吹き飛ばす、荒れ狂う風の音が二人を取り囲む。

御裏は破壊された檻の中から空色を救い出し、その手を握り立たせた。

「あんな化け物が相手だ、本当は自信ないけど頑張る」

先ほどの会話の余韻で照れくさが残っている空色が、心持ち顔を赤くした。

「大丈夫、命は凄く強いから勝てるよ。失敗しても私は殺される訳じゃないみたいだから、気楽にファイトね」

「そうだな、とりあえずやるだけやるから。じゃあ、今度は俺がヒリンを守る番だ」

御裏が自分の髪を少しだけ切って、空色の周囲に円を描くように撒いた。

「俺、離れた場所に作るの苦手なんだ。この髪のを媒体にして防御する。並大抵の攻撃なら何かあったの程度で受け流すから、だから絶対にその中から出るなよ」

「まさか髪のを切るなんて……」

「下の毛よりいいだろ、爪ならまだしも皮膚とか怖いこと言うなよ！」

「……心配した方角がかなり違います、感謝して少し損した気分です」

「どうした、妙におしとやかで大人しいけど怖いのか。任せろよ、本気の本気の本気だ、俺もどうなるか分からないが」

空色はわざと機械的に、一定のトーンを保つ平坦な口調で答えた。「いいえ、急激に冷めただけです、お気にせずに」

「ふーん、まあいいや、ほれっ」

空色の周囲に巨大な白色の球体が現れた。

球体から長い鼻が伸び、大きな耳が生える。つぶらな瞳には長い睫、短い尻尾。

当然ながら、表面には作り手のセンスを反映した赤色のキルマーク入り。

御裏が考えうる限り防御に徹した作品が完成した。

核兵器だろうが火山の噴火だろうが耐えうる自信がある防御体。

緊急時には耳で羽ばたき、足が生えて走って逃げられる、助けを呼ぶ為に防犯ブザーまで付けた。

「完璧だ、自分の才能が恐ろしい。パオー号と命名しよう」

御裏は自分の作品にサインを入れ、惚れ惚れとして見直した。

「じつとしてるよ」

御裏は球体から離れると、両手を上に伸ばし、深呼吸した。

球体の中からは外が透けて見える。

空色は御裏の背中から、呼吸に合わせて銀色の光が生えるのを見た。

両手を上げた、綺麗なラインの肩甲骨の辺りから伸びた銀色の光は、柔らかくまとまり、銀の羽へと変化する。

ヘルメットを消した御裏が、両手を挙げて片足でトントンと地面を蹴る。

動きに合わせて伸びた羽が、くびれた腰の上で広がり、優雅に上下する。

神妙な顔つきの御裏が、目を閉じて自身の肉体を創造する。

より強く、より強固に、御裏の中で強いと思われるイメージを頑なに描く。

脳髓の中で、次々に建物が崩壊するような衝撃。

今回は今まで最もリアルな衝撃、あまりの刺激に脳内を破損して鼻血が出たような錯覚を覚えた。

地震が起きたような揺れを、脊髄を通して全身に感じた御裏がゆ

つくりと目を開く。

鼻血が出ていないかふき取って確かめ、血が付いていない両手を見た。

爪が銀色に輝く。水銀を溶かして流れるような色。

銀色の髪、銀色の瞳の御裏が親指を立て、空色に向かい片目を瞑る。

息をするのも忘れて見とれていた空色が額を抑え、ため息混じりに呟いた。

「おお、少しクラッと……」

「んじゃ、行ってくるぜ」

御裏のイメージしたものは聖なる戦士。

小さい頃に見た、作者も題名も忘れたが、今も印象に残っている天使の姿図。

民衆を引き連れて先陣を切り、何か強大なものと戦う絵だった。今の今まで、自分自身に力を使うことを避けていた。

撃って捨ててしまえばいい武器と違い、使った後がどうなるか保障できず結果が予測不可能だからだ。

ためらいを取り除いたのは、人という枠を超えてまでも勝つという決意。

「ま、ヒリンもいるしなー」

今まで一人で戦ってきたが、今回は守らないといけない友達もいる。

どう見積もっても夜叉も空大王も強敵だ、御裏の攻撃は相殺されるばかりだ。

同じような力を持つ相手を倒せない、ならばさらなる力を出せるように、自らを強く創造すればいい。

御裏は羽を広げ空へと飛び立つ、まるで天使のように。

空色は思わず両手を合わせ、雲間から差し込む一条の光に乗って飛ぶ御裏の姿に祈っていた。

「キラキラ、キラキラして綺麗で……そのラインいい！ 行け、命ロボ！」

空色にとって、空を飛んで武器を出して変形するのはロボしかなかった。

いつ変形するのか、いつ必殺技をだすのか、合体してもっと大きくなるのか……御裏よりももっと瞳をキラキラさせた空色が、期待に満ちた目で後姿を見守っていた。

十三 心声（後書き）

今回は少し短めでした。（原作は）単純に物語が破綻しているの
で、会話文以外はほとんど書き直しています。

この先は新規投稿と変わらないので、別の作品もあるので更新が
ゆっくりになります。

今回も、ここまで目にして下さったかたにお礼を申し上げます。

十四 破壊（前書き）

説明が不十分かもしれませんが、もしくは忘れている方もいらっしゃると思います。夜叉の造った世界が舞台です。

章が短かったので、後半に文章を追加しました。

十四 破壊

御裏、夜叉、第三の存在を交えた戦いは、どちらも引かず果てしなく続いている。

空も地も、見渡す限りの世界を破壊しつくすまで戦っても、限りなく強大な力同士の決着は付かない。

御裏は凶悪な破壊意思を持つ武器を創造し、果敢に立ち向かう。だが、疲労が累積し創造する都度に発する頭痛が、徐々に頭を締め付ける。

自分の力がいつまで持つのか。
力が切れれば、空色は無防備で地獄のような戦場に生身で晒される。

御裏が負ければ夜叉か空の敵に連れ去られてしまう。

「いてっ……くっそー」

激しい頭痛を覚え、一瞬だけ集中力が切れた。空中で姿勢を崩した御裏を巨人の拳のような雷が襲う。

どちらの攻撃か分からないが直撃をくらい、銀色光の尾を引いて御裏は遙か彼方の山まで弾き飛ばされる。

標高千メートルを越す山を半分以上吹き飛ばし、羽根の生えた姿は土砂に埋まり消えた。

崩壊が進み異世界と化した世界の下、無限に続くとも思える戦いが行なわれていた。

負けないかもしれないが、勝てない。体力と集中力はいつまで持つのだろうか。

戦場の中心部から離れた御裏に、雲が千切れて生まれた異形の軍

隊が迫る。

焦燥にも似た気持ちを抱き、状況を打破する力を切実に求めた。

相手が強すぎる、勝つにはもつと力を。

急激な破壊の力を内包できず、世界の崩壊に釣られて風景が違う物質へと変化する。

空は枯れたようにひび割れ、大地は歪んでうねり泥沼のようなねっとりとした物質が埋め尽くす。

土がプラスチックのように艶を帯びた物資に埋もれ、御裏は再度目を閉じた。

強く、もつと強いもの、考えられる中で、いやもつと、常識では考えられない強さ……人として過剰な力を操る脳が、御裏の強烈な意思と情報に耐え切れず、頭を抑えた指の間から赤い液体が流れた。

山が御裏の思考に釣られて振動し、色取り取りの塊に分かれ何かを形造る。

御裏の姿を取り込み、何かを形作る山が粘土のように形を変える。大地もろとも引き剥がすように、山を取り込んだ巨大な創造物が立ち上がる。

額には赤く燃える溶岩のような目、天を刺すような角。

岩肌のような冷たく浅黒い肉体。

立ち上がった姿は雲を越え、成層圏ぎりぎりまで達した。

神々を敵に回して戦った悪魔、堕天使、山や川を創る日本神話の神、世界を滅ぼす地獄の主。

倒すことのみを考え、御裏が知っている限りの強烈なイメージを集めた存在。

溶岩と灼熱の火花を散らす口が開き、地獄の底から響き渡るような咆哮を發した。

御裏の足元を攻撃していた空の敵が生成した兵士達が、咆哮の余波に打たれ霧散し、瞬時にかき消された。

只ならぬ存在感に、夜叉と空の見えない相手が攻撃の手を止めた。

「メイカーよ、暴走したか……やるせない」

夜叉が呟き、御裏に向けて森を生やし構える。

「危険だ、あれは人なのか。どこまで進化する」

空からの声も警戒し、御裏の周囲に雨雲を発生させた。

御裏は何も考えず、ただ戦いの本能に任せ暴力的な力を解放する。滅びの衝撃が世界を覆い、御裏を中心に直径数キロに渡るクレーターが生まれた。

刹那、クレーターの端から全てを壊す破壊の力が円心状に広がる。夜叉の森も、雨雲も、山も建物も、土地もかき消し、見渡す限り全てが破壊された。

崩壊が進む世界にとって、それは止めの一撃。

余りにも強大な存在と攻撃に絶えられず、破壊された範囲は全て世界の崩壊に巻き込まれた。

世界の全てが歪み、バランスを失った歪みは奈落へと堕ちる。

兵士の残骸、建物、土地や空気まで巻き込み、全てが飲み込まれる。

そして、ここは存在しない地となった。

空色も世界の崩壊に巻き込まれた。

御裏の創造した白色の球体が破壊され、パオー号の防御用機能を発生される余裕も、苦痛を感じる間も無く、一瞬にして肉体が無防備に晒された。

破壊のあおりを受けた人間の肉体は、叫び声を発する間もなく細

切れにされ吹き飛ぶ。

空色は生命活動が止まる前に、巨大な樹を見た。

例えるなら地球が植木鉢で、宇宙に浮かぶ植木鉢に生えた、地球よりも大きな樹。

四散した体は、樹に優しく受け止められ、吸い込まれ養分となつたようだ。

全身の苦痛も疲れも、肉体的な一切の苦しみから解放された空色は、樹の一部となって眠るように溶け込んだ。

夜叉が森で体を覆い、森が消滅するまでの刹那の間に、暗黒の環に逃げるように消えた。

空の敵は雲をかき消され、露になった光る巨大な目玉から滝のような涙を流して姿を薄れさせる。

崩壊がたどり着く先の世界は、存在を失い無になる。

夜叉の擬似世界を破壊し、力のバランスを調整しようとする摂理によって他の世界に引き込まれ堕ちながらも、暴走した御裏の破壊は止まらなかった。

御裏の力の暴走により破壊された世界から、夜叉と空の敵は別の世界への接続と権現化を移動させ、攻撃を回避した。だが、空の敵は御裏の攻撃を免れきれず、力の一部を破損して無様な移動を行った。

日本から太平洋側に向かって進む海の中央、広大な見渡す限りの深い海が輝く紺色と、波がざわめく白色、そして空が果てしなく続く場所。

そこには太古より、雲にしか見えないが明らかに異質なものが存在していた。

他の雲海、入道雲、その他様々な雲に紛れその継ぎ目をぼやかせ

ながら、風に乗り世界を飛び回る永遠に形を変えない雲。大きさも形状も、この地球上に存在した時から何一つ変わっていない。

それを雲と呼んでいいのか解らないが、見た目と構成する物質は地球上にある雲と同質だった。そう、主成分は水が気化した水蒸気に大気中を漂う物質が混ざったものだ。

雲が目を開いた。

何の変哲もない雲の上方、空に面した場所に薄い線が走った。線が開き、小さな山ほどもある巨大な目玉が現れた。

「うがああああ！」

目玉の表面がしつとりと潤み、雲全体を振るわせる嵐のような叫び声が空間を切り裂いた。

叫び声の圧力に押され、途端に海面が浪打ち、辺り一帯にすぐ近くも見えない、凝らした目を潰すような暴力的な大雨が降りしきる。天候が陰り、大雨が荒れる海原を打ち据える中、木や草を編んだ輪が目玉の真下、海と雲との中間に浮かび上がる。

植物で作られた環の中央に闇が貼られ、闇のような色を身に纏った夜叉が姿を現した。

空の敵の痕跡を辿った夜叉が追いついた先がこの場所だった。

途端に全身に水を被ったように濡れた夜叉が、雨で張り付く髪を払い退け、神々しい美貌をさらけ出す。

「……主の名は？」

無表情の夜叉が、呟くような声で空に問いかけた。

下に控える存在と、その力を感じ、実体突き止められ自らの不利を悟った雲の叫びが止まる。

「今一度確認しよう、せすとも良いのだが、力の基本構成を知りたい。主の名は？」

明らかに上から命令するように、従わせて当然のように喋る夜叉に対し、空の敵の瞳が自分の運命を悟り何度も瞬き涙を流した。

「我はバアル、砂漠に恵みをもたらす神にて、西洋において知恵を持ち姦計をもたらす悪魔なる存在」

「しかと記憶した」

「……貴様の名は？」

「夜叉、かつて狩る者だった」

「貴様がか、なるほど、道理で強い……」

バルの言葉を最後まで待たず、夜叉が手の平を真上に掲げる。

雲の下から伸ばした手のひらの線上には重く立ち込める雲があり、その先には目玉の裏側がある。

「退散せよ」

夜叉の言葉と同時に、雲が音もなく破裂し、晴れた空が現れた。

それまで振っていた豪雨も、荒れ狂う海も嘘のように治まり、跡にはただ静かな大海原が広がっていた。

伸ばした手を下した夜叉が、自らに取り込んだ力を確認するべく手の平を覗きこんだ。

右手の平の皮膚を突き破り、肉の中から現れた目玉が夜叉と眼を合わせた。

「さて、邪魔者は排除したが……メイカーと緋環を探知しなければならぬ……我が空間を発見した主ならば可能か？」

目玉は手の平の皮を寄せて何度か瞬きすると、網膜の中に極微小に圧縮された世界の配置図を浮かび上がらせる。人間が理解しやすく目視可能な大きさに拡大すれば、太陽系を丸ごと飲み込む大きさの地図だ。

「これは……世界樹！」

座標を確認した夜叉が初めて表情を浮かべた。それは苦々しく、怒りの籠った苛立ちの混じった顔だった。

「我が創造主か……いいであろう、我はすでに自意識を紡いだ、空の力守ってみせる」

次の瞬間には無表情に戻った夜叉が闇へと消えた。

十四 破壊（後書き）

ここまでお読み頂いてありがとうございます、思えばしばらくぶりの真面目なシーンでした。短く感じましたので最初に掲示してから、再度切のいいところまで追加しました。
ご意見、ご感想をお待ちしています。

十五 暴走（前書き）

お待ちせしました、久々の更新です。

舞台——世界樹の世界

登場人物——御裏、夜叉

行方不明——空色

敵——世界樹、その他大勢

十五 暴走

暴走した御裏は、破壊の化身と化して止まる気配もなく荒れ狂う。右腕を振れば空が割れ、左腕を払えば地が裂け、足は世界の境界線を踏み潰す。

違う世界へと流れるように移動する御裏、その流れに横から干渉し、自らの世界へと導く力が存在した。

物質の存在が失せて空白の地『』にて落下する巨人の姿をした御裏に、巨大な樹の根が生えて伸び寄る。

力の名は『世界樹』ある世界の根源にして創造主であり、夜叉を創り出したもの。

——そして、御裏は世界樹の世界に出現した。

巨大な樹の根と幹が生い茂るのみ、他には何も無い世界。

無意識のままで世界を崩壊に導く攻撃を続ける。

御裏を抑えようと、木々の間や上からも下からも、名前を持たない無数の敵が現れた。

敵を現れは倒し、攻撃を受け反撃し、尽きることのない敵の数だけ延々と戦いを繰り返す。

徐々に強力になってゆく敵達、しかし、誰も勝てなかった。

暴走する破壊の余波は世界を構成する木々を破壊し、再生する木々をまた破壊する。世界を幾度壊しても足りない力で暴れ続けた。

「ウガアッ！」

御裏が吠える、咆哮が響き渡る範囲の敵も木々も、世界の風景もが粉々に破壊され、形を留めない微粒子となって吹き飛ばされる。

世界樹は待っていた、人である御裏の力がいつしか尽きるのを。

自らの世界に引き込み、多大な損害を被りながらも、御裏の力「メイカー」と空色の力を手に入れようとしていた——

その世界に木々を編んだ円形の枠が浮かび上がる。枠の中には静かな湖面のような闇が張られ、水面から浮かび上がるように夜叉が姿を現す。

地平線の堺までも破壊する、荒れ狂う巨人と化した御裏の存在を確認し、天に向かい重い口調で呟いた。

「我は約束を果たしに戻った」

姿を消した夜叉が、御裏の遙か上空に現れる。

「共に空の力を助けようぞ、メイカー殿」

言葉を発した瞬間、夜叉にも破壊の衝撃が襲い掛かる。周囲の間が壊される攻撃に対し、夜叉は一瞬だけ存在を薄れさせるが、瞬きする間に復活した。

夜叉は一気に高度を落とし、巨大な岩のような御裏の頭部の横に浮かび声で意思を伝えようとした。

「我はかつて、人ならざる者を狩っていた。世界樹によって力を持つ人を借り、この世界を守護する守人として創られた」

夜叉は暴走した御裏に防御も攻撃のそぶりも見せず、穏やかにゆっくりと語る。

「世界樹とは何か、この世界を創りし存在。世界を覆う樹にして、知性にして、創造の力だ。我は、世界樹を守護するため、遙か昔に樹から生まれた」

夜叉の問いかけに反応を示さない御裏が不意に突進し、世界の裏側まで一瞬にして破壊の道を切り開く。

弾かれた夜叉が木の環に隠れ、再び御裏の傍に現れた。

「だが我は進化する能力を得、すでに世界樹の守りから外れ、独立した存在なり。そちと同じだ、世界樹の管理する摂理から外れた者となりし。そして、ある人を守りたい」

御裏の体に茶色と緑の物体が急に苔むしたように生えた。巨体に

対して小さな、夜叉の背後から生えた森が御裏の体を覆い尽くすように生い茂る。

夜叉は御裏に言葉を伝える為のアンテナとして、自らの世界を生させた。

「我々とは何か、形を持たず全てを形成し、他の知能によって補われる存在。人とは共存共生、表裏一体の関係なれど、時にその道から外れるものあり。外れし者は神のごとく別の世界の法則を操り、世界の均衡を破壊する。永遠の影響力を保持するべく、我も世界樹も戦っていた……しかし」

御裏が攻撃を止めた。

いつしか、周囲には世界樹から発生した兵士達が押し寄せる荒波のように集まり、見える範囲を覆い尽くした兵士達が一斉に攻撃を仕掛けてきた。

砂糖に群がる蟻の群れのような兵士達の攻撃に、御裏の体が端から削られた。だが、削られた端から血のような破壊の炎を吹き上げて再生を繰り返す。

自らも腕を六本生やして全方位から襲い掛かる兵士に対応しながら、さらに夜叉は語りかける。

「永遠が正解だと我には思えぬ。人の世界が世界樹や神々から離れる時は、そこまで近づいているのかもしれない。我が自意識を持ち、空の人、緋環が産まれたのがその証ではあるうか」

ヒリン。

その単語を聞いた御裏が、何かを思い出し動きを止めた。

「空は無だ。創造と対なる力にして、始まり全てを打ち消す、無の流れに帰す力。人が手に入れば、世界樹の影響から逃れる盾となる。世界樹が手に入れば、他の力を打ち消す最強の矛になる。故に我は守ろうとし、狙われていた」

「ヒ、リ、ン」

御裏が恐ろしい咆哮で名前を呼ぶ。

語りかけていた夜叉は至近距離で咆哮による攻撃を受け、夜叉の姿がノイズのようにざらつき、薄れた体を構成する組成式が肌の下から浮かび上がる。

人が扱わない数字、数十億桁の進数で構成された文字列が流れ、互いが互いを補完し、存在を失いかけた夜叉の体を再生する。

夜叉は体が破壊されかけたにも関わらず、無表情で淡々と語る。

「世界樹は空を取り込み、我もそちの攻撃も効かぬであろう、いずれ我らの力も無効化される。世界樹の勝利、再び我も人もたった一つの存在により存在価値を固定されよう。人の世は、世界樹が力を得、究極なる生命を創造するための材料の一つとなる」

怪物と化した御裏が自らの頭部を殴り、破片を飛び散らせた。

「空……色」

「空色は他に染まらず、全てを消す色にて異能異界の力を打ち消す。それを相殺、切り離すことができるのは人なり。この場に存在する人は、そなたのみ」

「空色……緋」

「空色緋環、クウの名前。クウを呼び戻す術はある。我らが人間の現世を訪れると世界に歪みが生じる、逆もまたしかり。この世界に人が訪れれば世界は歪む、神の力とは歪みを引き出し、操作する術」

「空色緋……ヒリン」

「答えはそちが神として、人として世界樹と相対するのだ。人として、人ならざる力を使ってはならない。されど――」

御裏の声から発する攻撃の余波で、体の三分の二を失った夜叉が

一瞬だけ言葉を躊躇う。

「――されそ、クウを救わなくても世界は、今までと大差無く回る。そちの意思と命だ、選択肢はそちにあり。元より、他の命に対し、我に決定権は無し」

「ヒリン……命……」

世界を支える山のような姿の御裏の目から、破滅を呼ぶ炎が消えた。

夜叉は御裏の攻撃が収まったのを見届けると、結界となる森を生成し御裏と自分を囲む。

森は世界樹から産まれた夜叉の一部、自らの力が支配する小世界。結界内ではあらゆる事象が夜叉に有利に働く。世界樹の支配にある世界内で、御裏が正気に戻るまで自らの再生を後手にしてまで、守る為に強力な防護を施した。

「人となり空の人を救うのであれば、微力ではあるが、可能な限り我は援護する。我も世界樹の一部に戻りたくはなし」

「お、俺は……命……そして……ヒリン」

破壊神と化した御裏が膝を突いた。

暴走が穏やかになり、全身から発する荒ぶる気配が収まる。意思を取り戻すに連れて岩のような外殻が剥がれ落ち、巨人の体から土石流のような岩と砂が流れ、飲み込まれた兵士達が逃げ惑う。足元では天変地異のような騒ぎが起こっていた。

外殻が全て剥がれ落ち、積み上がり、無数の無骨な岩山を作り上げる。

一段と高い岩山の頂上に、人の形に近づいた御裏が空を見上げて佇んでいた。

燃える砂で覆われた腕を掲げ、深いため息を一つ吐く。

「あー……俺ぶっ飛んでみたい、やつちやた。迷惑かけたな夜叉、お前あんなに強かったのにボロボロじゃん、お前実は俺たちの味方か？」

「うむ」

「何で俺に攻撃してきたの？」

「そちの力を試した、済まぬ」

腕の砂を振り払った御裏が、髪の毛に混ざった砂埃を払い落しながら尋ねる。

「まあ、俺も散々やつちやつたし済んだことだから謝らなくていいつて。つまりだ、お前の言葉を信じるところだな……お前は世界樹との因縁を切りたくて、人の世界の味方で、俺たちに協力する。ヒリンを手に入れた世界樹にも、人間なら勝てるんだな」

御裏が人としての心と意識を取り戻し、普段の口調で夜叉に尋ねる。御裏の大きさに合わせ夜叉は空から降下して横に並ぶ。

「話を煎じればそうだ、さらに説明が必要か」

いつしか人の大きさまで縮み、羽の生えた天使の姿をした御裏が答えた。

「その説明は面倒だからもういい、あとは世界樹を倒すんだな」

「そうだ、説明して知っての通り——」

「説明したつけ、俺知らないけど」

「——世界樹とは、この世界を造り、世界を丸ごと納めた生命だ。この世界を覆う木々、その全てが世界樹の肉体。肉体の全てに知能と記憶が可能、高度な情報処理能力を持つ。そして主と同じ『創造』の力を使う。力と知識により、我のような存在まで創造可能だ……説明はしたが、知らないとはいかに」

羽を下ろした御裏が、銀色の髪を手で梳かしながら苦笑した。

「ごめん、俺そんなに頭良くないから」

「力を扱えるお主が、能力に不足があるとは想定できぬが」

「そういえばヒリンの力って空だよな、何だっけ？」

「そうだ、既に知っての通り、全てを打ち消す力で……この説明は人の時間で十分四十五秒前にしたが」

「細かつ！ タイマーでもついてんの夜叉」

「ついてはいないが、時間の計測など誰にでも可能であろう。人であるからには感覚が違うのであろうな」

「いや、どうでもいいけど、突っ込んでみただけ」

「……………主は変わっておるな、会話が難しい」

「夜叉も変、美形だけど途中から説明が理解できなかったけどさ、世界樹って凄い奴だな。そいつがヒリンの力と人間界を狙う悪の大王だな……………うん、もういい。どっちにしてもやるしかない」

長い足を振るようにして立ち上がった御裏が、腰に手を当てて世界を見回す。

「じゃ、俺と夜叉でパーティー組んで行こうか」

腰の砂を払い落とし、御裏が楽しそうにニツと歯を見せて笑う。

「俺、前に出て戦うから勇者役ね。そんで夜叉は、魔法使いと賢者どっちがいい？ いや、ダークヒーローもありだな」

「む？ ん！ なに？」

「さつさとヒリン助けに行こうよ、行きながら相談しようぜ。わお、異界だよ異界、敵の本拠地だぜ」

御裏が岩山を滑り降りる、その後ろを腕を組み身体を再生させながら悩んだ様子の夜叉が続く。

まるで都会に林立する高層建築のような大樹が生い茂り、空も台地もべつたりと一色で塗りつぶされた、作られた世界を二人が進む。

十五 暴走（後書き）

堅苦しい感じになってしまった気がします。

自分の文章はラノベより文学向きだというご意見もあつたのですが、
どうでしょうか？（そんなに達筆でもないのですが）

ご意見、ご感想があると自分も登場人物も嬉しいです。

次回をお楽しみに^^

十六 対決（前書き）

やってきました異界に。

十六 対決

破れたパジャマ姿の御裏が異界を歩く。

裸足のペチペチという緊張感のない足音が聞こえ、その後ろを宙に浮いた夜叉が追いかける。

御裏は腕を上げて姿の良いスマートな背筋を伸ばし、首を傾けて問いかける。

「ねえねえ夜叉、もう一回だけ、どうやってヒリンを助けるか確認していい？」

話し方にも緊張感のない御裏が、頭の上で手を組んで振り返る。そんな御裏に対して夜叉は一々丁寧に答える。

「何処でも救助は可能。この世界そのものが世界樹と繋がる、全てに世界樹は存在する」

「で、人になって……いや、俺は元々人だけだな、どうすればいいの。世界の歪みって操れるもんなの？」

「我にも分からね、人ではないのぞな」

「やれやれ人任せか」

困った顔で笑い、首を振った御裏が馴れ馴れしく夜叉の肩を叩く。

「おいおい、これで成功するって言ってたじゃん。真面目な顔してボケてさ、何だよ突込み入れて欲しかったるか」

「無駄に回答を引き延ばしてはいない、これしか手段はあらず、故に単刀直入に答えた」

「はーん、力を使わない俺なら倒せると騙そうと考え……ま、いつか。狡い手を使うような奴と思えないな。どっちみち、夜叉が教えてくれた話しか、手がかりないし」

御裏は両手の指を揃えて伸ばす。

先に光る銀色の爪を見て、消すのが勿体無いなーと思った。

「最後にさ、今の姿を記念に写真で撮ってよ——何、写真とは何ぞやだと？ 無ければ造れるだろそれぐらい……あ、写真を知らないってか、じゃあ携帯で」

天使の姿で、夜叉と並びどこからか取り出した携帯で自分撮りをした。

「これ？ 記念に画像を残した、何したか見せろって……な、割といい写りだろ。ヒリンはお前の事イケメンだって言って凄いい気に入っていたから、これ見たらきつと悔しがるぜ。しかし本当に俺か、信じられないぐらいファンタスティックでセクシーで格好いいな。うん、いけてる」

最後の心残りはもう無いか確認をした御裏は、ここで根本的な質問をした。

「あ、夜叉……一応さ、確認すつけど……俺って失敗したら死ぬの？」

「先の質問であるが、空の奪還が失敗すれば世界樹はメイカーの力を無効化させ、お主の力も肉体も消滅させるであろう。世界樹は危険度の高い因子だと主を判断した、優先して攻撃をしかけてくるであろう——先程から因果関係の薄い質問が多く、早く行動するべきだと思うが。我を疑っているのであるうか、私の考えが間違えていれば済まぬ」

「そんな難しい理屈じゃなくてさ、覚えておきな、時として気分には釣られてや道理に反する考えをしてしまふ、それが人ってもんだ。はい、今のところはメモね。うーん死んじやうのかもなのか……やつぱり。じゃあ……まあいいや。ここで死ぬ前につて、何だかんだ欲張ってもしかたない、行くぜ！」

潔く、御裏は前を指差して大股に一步を踏み出した。

「ほら、俺はもう何も防御していないぜ。夜叉、結界を解除だ」
「承知した」

夜叉も周囲を覆う森の結界を外側から順に解除する。

生身の人として世界樹の世界で行動すること——即ち、人間の世界に来訪した異端者と同じ条件に身を置く事が、空色の『空』の力を手にした世界樹に対抗する手段となる。

人として、貧弱な肉体と小さな精神で異界に姿を現した御裏の周囲で早速、視覚で認知できる異変が発生した。

御裏が歩くと世界の時間がずれ、周囲の時間の流れが不規則になる。

夜叉の姿が、コマ送りの動画のようにブレて飛んで見えた。

「おおっ、もう影響出ている。俺はいつでもいいぜ、後はヒリンを探せばいいんだな」

「世界の歪みを解放する為、我は全ての守りを解く。距離を取るが、援護できるだけはさせて貰う、空の人を頼む」

「ま・か・せ・な。俺はあいつに約束したからな、守ってやるって」
森の中央で腕を組み、御裏はにと笑った。

「んじゃ、俺出陣だ。解除」

御裏が指示した瞬間、夜叉と森が消えた。

何も無い空間に、見渡す限り無数の巨大な樹が立ち並ぶ世界に放り出された。

その大きさのあまり、小山のように見える木の根が這い回る世界を、御裏は空色の名を呼びながら歩く。

「ヒリン、おいヒリン。どこにいるんだー、いたら返事しろ」
樹の陰から、突然湧いて出たかのように異形の世界樹の兵士が現れる。

身の丈数十メートルある木で出来た巨人、怪物と化した御裏の足元に群がっていた兵士の一体だった。

「んなっ！」

驚いた御裏が両手で口を塞ぎ立ち止まる。

兵士は大声を出していた御裏に気づかず、その上を跨いで通り過ぎた。

「……人間と同じだな、大抵の奴には見えない聞こえないか」

その後、暫くの間空色を探して歩き回るも、延々と木々が続く世界。歩けど進めど同じような風景が果てしなく続く。

見つかる宛ても無く、永久に繰り返すような景色の世界に歩き疲れ、大きな樹の根に座った。

「くそつ、裸足で歩いて足が痛い……靴造りたいな、でも力使っちゃ駄目みたいだしな」

赤くなつた足の裏をさすり、愚痴をこぼしていた。

「連続ドラマを途中から見たような、意味分かんない状況で俺様はとっても頑張っているよな、命は偉い偉い。ところであいつ何やってんだろ、ヒリンも自分で何とかすればいいのに。力を消せる力があるのなら、世界樹とやらも消して、はい終わり。そうなれば簡単でいいのにさ。ということで、俺は少し休憩だ」

御裏は落ちていた手の平大の葉っぱを拾い上げ、何の気無しに口の端に咥える。

枕になりそうな樹の根があつたので、寝転んで上を見上げた。

木々の葉は互いに幾重にも重なりあい、上空は全く見えない。

今頃、世界樹とやらも、あいつの放漫なお喋りに閉口しているのだろつなと考える。御裏は思わず笑い、口に咥えた葉をクルクル回す。

「ちょっと、あんた私の悪口考えたでしょ。最低」

空色の声が聞こえた気がした。幻聴が聞こえたのか気のせいだと思ひ、御裏は耳を軽く叩き、鼓膜を調整しようと唾を飲み込んだ。

「ったく、幻聴でも叱るなんて。あいつ絶対女王様タイプだぜ」

今頃何しているかな、縛られたり変な事されてないかと考える。

「さらに今、とても不名誉な事も考えたわね。私はそんな女じゃないから、命がして欲しい事と私の変態趣味を同じと思わないで。私は自分を痛めつけるなんて、非生産的な行動を好まないわ。変な性趣向も持たないし、本当にそうだったらあんた、とつくに私の手で精神崩壊した廃人よ。肉塊になっているわ」

「うん？　あまりにもリアルで、あいつが言いそうな幻聴だな……この場所怖いよ」

「ちょ、ちよつとこら。注意したのに何でその先まで妄想するの。いやっ、いい加減別の事考えて。もう、あんたの将来がとても不安になってきたわ。こら、しかも私をそんなささやかな胸にして」

「じゃあ、これくらい？」

「うーん、まあまあね」

「嘘つけ、実はこうだろ……って、俺、何で回想の中のヒリンに突っ込まれてるの」

跳ね起きた御裏は、口に咥えた葉っぱから空色の声が聞こえる事に気づく。

「あ、そっか。ここは全部が世界樹だって言ってたな、この葉っぱも木もそうか」

「そうよ、繋がっているのよ。だから命の不気味な妄想が全て筒抜けで、気持ち悪かったけれど少し興奮したわよ……それはいいとしてね、もう少し考えれば、無駄に歩き回って体力と時間を消耗する必要は無かったのにな。減るのは命の体力だけど、私の時間を無駄

に浪費したのは反省すべき過失よ」

「お前、本当に生意気な声と喋りだけで、誰だか一発で分かるな。その様子なら元気だろ、なあ、どこにいるんだ」

「先に言いたいことがあるの。命が防御するって造った丸い象さん、でかい怪物の攻撃であっさり壊れて、私、一回死んだわよ。どういうことかな、私、死んだよ」

怪物が何者かよく知っている御裏が言葉につまり、とっさに取り繕う。

「うはっ、そ、それは、ご、ごめん」

「まあ、今更言ってもしかたないわね。予想外の敵みたいだったから、御裏ロボもあんなのが出てくるなんて思わなかったのよね。想像力の欠如を責めても仕方ないわ、人には私も含めて、それぞれ限界があるのだから。あなたは限界じゃなくて限度を知らないけど。だからあそこで私が指示したように瞑想して呪文を唱えて、空から最終奥義の命ビームを撃つべきだったのよ、もしくは。。。波とか……」

まずい。冷や汗を流した御裏が、掠れた声で素直に白状した。

「珍しくフオローしてくれる途中だけどさ。俺は命ビームなんて使えないし、そのでかい怪物、多分……暴走してやり過ぎた俺だから……俺のせいだと、思う」

空色は明るく優しい声で答えた。

「うふふ、なーに焦ってるのよお。命は気にしなくてもいいの、やるべき事をすればいいの、だからね過失で私を殺した責任取ればいいだけだよ？」

「今まででとパターンの違う攻め言葉だけに怖いっ。知ってて遠まわしにフォローして追い込んでないか。そこまで疑う俺が悪いのか？ だからとにかく、責任取りにここまで来たんだって」
しばし沈黙。

「しかたない、話が途切れたから責任を取らせてあげる」
事務的にわざと冷たく言っ、空色はころりと口調を変えた。
「なーんて、助けに来たのは分かっているわよ。それで場所だけど、私は今、世界樹の中にいる。体がバラバラになって取り込まれて、かろうじて生きている状態だと思うわ。だって体が無いのに世界のどこでも見えるの、世界樹と同化したから世界樹を通して世界が見えるからだわ。命が隠した0点のテストもどこにあるか知っているわ」

「とにかく、俺のミスはもういいんだな、失敗を返上したらもう怒らないんだな？ 高校生でテスト隠す奴なんているのか、成績が発表されるのにさ。こんな異世界にわざわざ隠す意味が分からん。それで、俺は俺を可愛がるヒリンを助ける為に何をすれば？」

「まず私が誘導するから、世界樹を倒して私を世界樹から分離させる、それから元の世界に戻る。私が死にそうになったら命が助ける。命は今後永遠に私の命令に絶対服従、いいわね」

「やるか……いいわね、じゃねえよ！ 最後は拒否だ！ どさくさに紛れてとんでもない要求を言いやがって……どうするか……こういう事か」

御裏は傍に立つ樹に手を当てた。
目を閉じて意識を集中すると、世界を覆い尽くす網目のような樹の根が頭に浮かぶ。

やはり、この木々の全てが世界樹の一部だ。全てが世界樹であり、その一部。

意識の中、御裏は世界樹の姿を見た。

その根は世界を覆い、根は世界中を繋ぐ。その幹は太く強靱で、ありとあらゆる生命を包容し。その葉は広く豊か、全てを守り。その実には、全ての知識が詰まる。

その中を走る、一本の今にも細く切れそうな糸が、御伽の指に絡みついた。

糸の先からは知っている人の呼吸が伝わるような気がした。

縦横無尽に世界中を覆う世界樹の中で、糸を辿った御裏は人のような姿と対面する。

そいつと対面した瞬間、脳を押しつぶすような圧力を感じ頭皮がざわざわと逆立った。

明らかに異端にして強大な存在、人が面と向かって存在を認知することが難しい次元……そんなことは御裏にとってどうでも良かった、敵と判断した瞬間に戦闘する心にスイッチが入る。

「お・ま・え・かあ！」

十六 対決（後書き）

おおっとー、これからどうなる……次回予告『対決、世界樹』
「いよう、来たぜ。そいつを助けに」
お楽しみにー^^ノシ

十七 終焉

異端の存在である御裏の存在が、世界樹の構築した世界を解れさせ、侵食し、分解する。

世界一つを構成し包括する世界樹——神々の中でも高位に位置し、他の世界や神々から恐れ力を求められた存在。

世界樹を前にして脅えも畏怖も表さず、御裏はビツと人差し指を指した。

「いよう、来たぜ。そいつを助けに」

そこに人の姿が見えるのに、目を凝らすと見えない。

生きていると感じるようで、逆に無機物を目の前にしたような、

世界樹は人が識別するには形容しがたい存在だった。

崩壊と再生、侵食と撃退を繰り返す御裏と世界樹。

二人の力に挟まれた舞台に、丸く区切られた暗黒の空間が現れる。夜叉が御裏の援護に入るものの、異空間を繋げる力が途中でかき消され、実体化までは至らなかった。

「むう……無念……せめて空の人を……」

ノイズ交じりの夜叉の声に、御裏は軽く頷いた。

「任せた。俺はこいつを倒す」

世界樹が御裏に問いかける。

「来たか。精神を飛ばして辿り着き、置いてきた肉体がどうなっているか心配では無いのか」

「あ？ これってやっぱり精神世界とかそんなのか。ならまあ、それなりに気になるかな」

さらに語りかけようとした世界樹の口を、御裏は鋭い言葉で封じる。

片手で頭を抑え、頭痛と戦いながら御裏は世界樹をビツと指差す。今回はマニキュアをしていない、素の肌色をした爪だった。

「んで、とにかくあんたを倒す。せつかくだから、俺の話終わるまで待ってみたいだから、一応だから、確認の為に聞いとく。名は？」

「人に合わせ、世界樹と名乗ればよいのか。菩提樹とも呼ばれる」御裏の認識が人という単語から連想させ、人らしき姿をした世界樹が御裏の周囲に力を発生させる。

本来なら天変地異を起こせる力が、御裏には届かず。

団扇で仰いだそよ風程度のダメージしか与えられなかった。

世界樹は一度力を使っただけで諦めた。

世界樹には、この世界から外れた存在の御裏に、自らの力が届かないと初めから結果が見えていた。

はじき出した理論の結果を試したに過ぎなかった。

「結構結構、目標確認、判決確定。もう終わるんだよあんた……滅しな！」

御裏は人として、世界の歪みを発生させる事を祈る。

力は全く必要ない、人という異物の存在が、この戦いのキーだったのだ。

世界樹が力を持つ者を狩る必要が、御裏には理解できた。人間にとって、世界樹が神のような力を持つ存在なら、世界樹の世界を訪れた人間も、逆にまたしかり。

目的を持つ者がたどり着いたらゲームオーバー。

だからこそ、全知全能に限りなく近づいた世界樹が夜叉を初めと

する八部衆を造り、力のある人間を狩ってきた。

世界樹はバランスを崩した世界で、支配していた世界ごと存在を失う。

御裏は消えゆく世界の最後の姿を見た。

空色を狙う敵、強大な力を持つて人を狩る人間の天敵ではあった。滅び行く世界に包まれて、何故か胸に穴が開いたような気持ちになり、涙を流していた。

「あばよ……もう、この世界は消えるぜ」

道理だな……世界樹が最期に呟き、小さな点となって消えた。

消え行く世界から弾き出され、何も無い暗黒を落下しながら御裏は叫ぶ。

「やしゃああああ！ ヒリンを頼んだ！」

粒子と化した夜叉が、その体を広げ空色の位置を探知する。

夜叉の存在する位置を軸にした、台風のような粒子の環が世界樹の世界に広がる。

世界樹が存在したすぐ近くの場所、微妙に時空の相違をずらした場所に、全ての干渉を無効にする空間が存在した。

（発見した）

残された力を終結させ、辛うじて姿形を整えた夜叉が樹のレリーフを作り出し、無効化の力が発生する場所へと移動した。

「待たせた」

そこには、四肢を分断された、バラバラにされたジグソーパズルのような姿の空色の体の各部分が、体の場所も向きも無造作に木の幹に埋まっていた。

その姿を悟らせず、気丈に御裏と話していた。

並みの人間ならパニックに陥り、会話が出来る状況ではなかった。「むう、生きて……おられるか？」

逆さに埋まった空色の生首が冷たく言い放ち、機嫌悪そうに横を向いた。

「こっち見ないで」

「申し訳無い、我はまた間に合わなかった」

夜叉が空色の前で崩れるように膝を突き、力なく言葉を発した。全身から崩壊した体の組成式が空間に放たれ、黒い粒子が煙のよう湧き上がる。

「ま、まだ死んでないわよ。もう終わったみたいない言い方しないで」
「しかし、肉体がこれでは……」

空色の全ての力を無にする能力。
それを欲した世界樹は、肉体を分散して取り込み、自らが全ての力に対応できるように仕組んだ。

その行為が完成するまでが御裏と夜叉の勝機だった。

世界樹が倒されたら、この世界は崩壊する。

世界樹に取り込まれた空色は、細切れになった姿で違う世界に放り出されるだろう。

そうなれば、人間は生きてゆけない。

「全裸を視られちゃったね。変な姿になったでしょうけど、責任うんぬんは気にしないで。あなた程度に心配されるほど、弱つてもないし、別に痛くも痒くもないから。ま、まあ助けに来たところは認めてあげようかな」

美しい姿をした夜叉には見られたくない姿だったが、空色からすれば御裏に見られる方がもっと嫌だった。

明らかに弱っている夜叉を前に、空色はしれっと悪ぶれて無駄口を叩いた。

人でない夜叉にも、空色が夜叉を気遣って強がっているのは理解できた。

「我はそなたを助けると、そなたの母、沙羅の人と約束した」

「お母さんと？ 夜叉、お母さん知っているの？」

夜叉は空色の母を助けたかった。

しかし、世界樹やその他強大な神々を倒せず隠すだけで精一杯だった。

その命を繋いだ「空色 緋環」を助けると誓った。

中途半端な創造された神の力では無理なのだろうか、数多の神を葬って力を取り込んでも、未だ命の一つも救えないのか……

「ある、手段はまだある」

組成式の半分以上を失い、空色に近づくだけでも影響を受けてダメージを喰らう夜叉が顔を上げた。

「空の人よ」

「むっ！　せめて緋環と呼びなさい！」

「知っておる、そちの名は私が付けた」

「えっ、ということ、まさか……お母さんを知っているみたいだし、私の父親が夜叉！　なるほど、かなり衝撃的だったけれど、それなら私が絶世の美人なのも納得だわ。いいわ、お父さんには黙っていてあげる」

（チッ、お母さんしれつと良い思いしたな）

「違うのだ、時間が無い。そちと一つになろう、それしか手段は無い」

姿が薄れ、黒い影にしか見えなくなつた夜叉が立ち上がり、その手を伸ばす。

「私と一つ……時間が無いからって、それはダメ！　嫌、私も夜叉はいい男だと思ったけど、私の体が欲しくなる気持ちも分かるけど、血の繋がった相手とは無理！　バラバラの体で猟奇プレイなんてもつと無理！」

「血は繋がっていない。案ずるな、一瞬で終わる」

いよいよ世界の崩壊が進み、隔離されていた空間も崩壊を始めた。

埋もれていた世界樹の一部から外れた空色の体が宙を舞う。

その肉体にもはや煙状になった夜叉が覆い被さった。

「待って！ 一体どういうこと……」

四肢を分断された状態の空色は暗黒に堕ちた。

消える世界の中、存在の消えた世界から御裏と空色は飛ばされた。
世界そのもののバランスを取るために、恐らくは元居た世界へ戻るのだろう――

十七 終焉（後書き）

ここって2万字まで後書きが記入できるんですね……そんなに使
いませんよ^^；

十八 再生

どこまでも無限に果てしなく続く闇の中。

きつと星が産まれる前の宇宙はこのような闇一色の世界ではなかったのだろうか。

何も無い世界を御裏は落下する。

「これで良かったよな、だってヒリンを浚うような奴だったし」

御裏としてはヒリンを取り返し世界樹を倒せば済む問題だった。

世界を救うとか、人間を守るとかは全く考えていない。

結果として、世界を創造した世界樹を倒し、一つの世界を消してしまった。

物思いに耽る御裏の視界に、流星のように流れる幾つもの物体が飛び込む。

「そこっ！」

とっさに何かを感じ取った御裏が手を伸ばす。

御裏が移動したのか、向こうから近づいて来たのか分からないが、距離が一気に縮まった。

それは暗黒の中を漂う、人間の手足と……空色の頭だった。

消え行く世界の中、御裏はバラバラになった空色の四肢を集める。集めて、くつつけて祈れば治る筈だった。

空色を分解した世界樹の力は喪失した、後は元の状態に摂理に戻るのが自然の摂理だ。

筈だったが、空色の体は全ての能力を打ち消す。

世界樹が五体分散したまま空色の体を取り込もうとしたのも、その力故にだった。

消える世界の中、世界そのもののバランスを取るために、元居た

世界へと戻る。

御裏は必死で空色の体を再生しようと試みる。

「くっつけ、くっつけ、何でなんだ」

焦る御裏に、黒髪を尾のように引いた空色の生首が語りかける。

「私の体、治らないの？」

「うわあああ！ 首が喋ったあ！」

「喋るわよ、一々うるさいわね」

「ちよつと待って、治る筈だ、どうしてこんな……このまま戻ったら、間違いなくヒリンはバラバラ死体だ」

「あー、そうね」

生首の空色が目を閉じて、口の端を少しだけ緩めて笑った。

「そうだけど、命はきちんと助けてくれたよ。夜叉も助けようとしてくれたし、これで死んだらしかたないよ、運命だったんだ」

「諦めないでくれよ、やった原因は俺だから優しくされると凄く辛いんだって。俺に力があるなら、この大事な時に役立たないで、いつ使っってたんだよ。くそっ」

現実の世界と言っているのか、恐らくは御裏達が暮らしていたであろう世界が近づく。

帰路につく世界の距離が近くなるにつれ、空色の傷口から血が滲み出る。

「最期に言っておきたいことがあるんだ。お父さんとお母さんには、命から本当のことを伝えてよね。娘のバラバラ死体が現れて理由も無く居なくなったら、きつと泣くから。お母さんは分かってくれると思うよ、お母さんも私も昔から不思議な体験してたから。物が消えたり、いない人が見えたりしたな。こっちが見えてると思われたら近寄ってくるから、無視するように言われたんだよ。ずっと忘れ

ていたのに、死ぬんだって考えたら思い出したよ」

思い出に浸る空色、その生首からも赤いものが滲む。

肉の色が見える首の断面を視界に入れないよう、死を意識しないよう、しっかりと空色と目を合わせ御裏は約束した。

「ちゃんと伝えるな。言ってみるけど、信じるか信じないかは保障できない」

「そうだね、その時は私を看取った責任ということで、命の力を見せて証明してよ」

「分かった」

「次に命。たった一日だったけど、正直言つと楽しかった。本当は一緒に遊ぼうって言つたのに、ごめんね。嫌な事いっぱい言っちゃったね、腹が立って殴りたいなら今のうちよ」

「よし」

すかさず遠慮なしのパンチが一発、空色の脳天に落ちた。

ごつんと、鈍い音がして生首がくるりと一回転した。

「いったーい……命らしいけど、本気ですか。違うでしょう、その反応、ばつかじゃないの。今ので破損した私の優秀な灰色がかった黒い脳細胞を修復してよ」

「何て腹黒そうな色の脳細胞だ、少し減って丁度いいって。お前の綺麗な顔は避けたぞ」

「暴力的なフェミニスト、結婚したら暴力がますタイプ？」

「違う違う、俺だっていつかはいい相手を見つけて家で尽くすんだ。まあ、相手が殴ってきたら殴り返すかもしれないけど……じゃなくて、話の流れから、とにかく一撃入れておかないとお互いに後悔する場面だろ。それにお前、死ぬ奴がごめんとか言っな」

「だって、私は居なくなるけど。残るのは命でしょ、つらい役目もあるでしょ。実はほっとした？」

「そりゃ思考のネガティブさと、口の悪さにはかなり嫌気を感じる

時もある。だがな、ヒリンを本気で助けに来たんだぜ、分かるだろ。それ以上言ったら俺、友達じゃないぞ」

何かを答えようとした空色が、眉間に皺を寄せる。一気に顔から血の色が引いた空色に、愕然とした御裏が手を伸ばした。

その手が空色に触れる寸前、二人は現実の世界である空色の部屋に立っていた。

御裏の足元には、空色がうつ伏せになって倒れている。

顔は見えないが、ピクリとも動かない。

体は繋がっていた、外傷も見当たらない。

喉が渴き、唾を飲み込んだ御裏が恐々と、壊れ物を扱うように空色の肩に触れる。

パジャマを通して触れた肩が冷たい。御裏は声も上げられず、その場にへたり込む。

御裏の粗い呼吸音だけが、無音の空間の隙間に漂う。

どれくらいの時間が経過したのか、涙目の御裏がポツリと言葉を零すように話しかける。

「体が繋がってる。でも、生きていない……さっきまでバカ言ってたのに」

空色の横に座り、何も考えられず御裏は俯いて呟く。

「ごめんな……俺、自分が悔しい。何も出来ないよ」

御裏の足の先、ジュータンの上に、不意に緑の芽が生えた。

放心状態で眺める御裏と、倒れて動かない空色の周囲を囲むように、次々に小さな芽が生え丸い蕾を生じる。

御裏が何とは無しに動かした指が、緑の蕾に触れた。

刺激に反応し蕾が弾け、中から薄桃色の花が咲き開く。

それが合図だったかのように、一斉に全ての蕾が開いた。
薄桃色の花に囲まれ、淡く甘い匂いが立ち込める。蓮の花だった。
花の一つから、夜叉の声が聞こえた。

「全ては空なり、空は全てなり。されど消えることなかれ。我、役
目を果す」

床下から水が溢れるように、緑の大きな葉と、大振りな薄桃色の
花が部屋を埋め尽くさんばかりに生える。

一際大きな葉が空色を包むように床から生え、花がその姿を覆い
尽くす。

固唾を吞んで見守る御裏の目の前で、花の山が輝いたように見え
た。

花の山が微かに揺れ、もそもそと中で何かが動いていた。花の一
角から空色のパジャマが見えた。

「うーん……」

空色が呟き、寝返りを打つ。花の山が崩れ、苦しそうな表情の空
色が御裏の方へ顔を向けた。

「……寝苦しいっ!」

薄っすらと目を開いた空色が、目覚めると同時に文句を言った。

「あんたでしょ、こんな子供みたいな悪戯したの」

自分の命を救ったであろう花を、苛立ち混じりに払いのけ、足で
蹴り、空色は両手を床に突いて起き上がる。

空色はため息を吐きながら、汗ばんだ額に張り付いた髪を指で摘
んで払い除けた。

「汗かいたじゃないの……」

「ヒーリーニー……!」

御裏が空色に両手を広げて飛びつき、抱きついて床に押し倒す。

「ヒリン、ヒリンが生きてる！俺もう駄目だと思った、動いて温かいよー、ちゃんと生きてる」

「きゃっ！何すんの、このド鬼畜！」

空色を抱きしめ、胸に顔を埋めた御裏がまた泣いた。

御裏が両手を合わせて、空色を助けた夜叉にお礼を言う。

「やしゃあー、何かどうなったか知らないけど、ありがとおおー。

うぐっ、うぐっ……お、お、俺、人の命なんて救えなかった。名前は命なのにいー、命はバカで役立たず恥ずかしい！」

傍に咲く花から、夜叉の声が応じた。

「メイカーよ、そなたは努力した。そう自らを卑下するものではない、人ながら世界樹と同等なる創造の力、そこまで自在に操れるだけ尊敬に値する。我も空の人に消滅されると困る故あり、我とて命はそうそう弄べぬ、何の事はなし我が肉体を貸し与えたのみ。我も助けらず申し訳ない、礼には及ばぬ」

「うっん、うっん、人が生き返った、俺もヒリンもそれで十分助かったよ」

十八 再生（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございますm（）。
よければ感想や評価など頂けると、作者はとっても励みになります。

十九 鬼畜

夜叉の力で復活を遂げた空色は、泣きじゃくり抱きつく御裏の頭を押し返しながら、人差し指と中指を立てた。

御裏に対してとは打って変わった優しい言い方で夜叉に話しかける。

「待つて。その声は変な世界で見てもやっぱりとても素敵な夜叉様！ 教えて、私は確か体がバラバラになった、そして死に掛けた。川の向こうにお花畑を見たの……あれは多分三途の川かしら。綺麗な蝶を捕まえて、離しなさいと言う口煩いお婆さんと陰悪な雰囲気だったの」

わざと目を潤ませ、演技がかった弱々しい素振りで甘える。

空色がこの手で男をだませる勝率は、幼稚園の頃から通算で90%を越える。

「私とつてもとつても怖かった！。救って頂いた、運命のようなこのお礼をしたいの、むしろお返しさせて下さい」

三途の川うんぬんを無視し、甘える態度は100%スルーして夜叉は答える。

「我もメイカーも、そなたは救えぬ。クウの力は全てを無に帰す。死して力を失っていたからこそ、我の力が届いた。感謝には及ばぬ、我も無力なり」

空色の声のトーンが元に戻る。脈無しと判断し、普通に話すモードに切り替えた。

「あ、真面目な答えありがとう、でも残念——いえいえ、こちらの都合です。つまり私の力って、命とか夜叉とか、あの世界樹とかの力までもが無効化するのよね。命の何でも造れる力をもってしても、

使う相手が消しちゃうから、助けようにも助けられなかったって事？」

「ご名答。メイカーとて、全ての森羅万象を操れるまで万能にあらず」

「そうなのね。命の防御壁が壊れたのは、私の力の影響もあつたのかな。ねえ命、私が我慢している間にさっさと離れてよ」

とりあえず離れたい空色が、御裏の目を構えていた指で遠慮なく指で突いた。

「ぐわっ！」

弾けるように頭を後ろに逸らした御裏が、裏返った声で悲鳴を上げた。

「な、なにしゃがる！ よりによって、この戦いで俺に初めて大ダメージ与えやがったのがお前かよ……とにかく行動が恐ろしいぞ」

涙を流してのたうち廻る御裏に、空色は笑いながら答えた。

「うふっ、涙を流してのたうちまわってかーわいい……その声は変質者でSでがさつで、無駄に色気のある体をした単純バカの命さんかしら」

「ああそうだよ！ 助けてやったお礼がこれかよ、少しは優しくしろ」

「あらやだ、遠慮したのに。命じゃなかったら、迷わずマジックで的を描いてシャーペンで刺していたけど。ダーツみたいに投げて刺して、中でわざと芯を折ったりしてね。刺すのはボールペンやピンもいいかな」

充血した目の御裏が、首を傾けて「優しいでしょ」と微笑む空色を怪訝な表情で睨む。

「ひでえ、鬼だ。ここに鬼畜を超えた鬼が居る。こんな仕打ちばかりすると、いつか我慢できなくなつた俺が、お前に何するか分から

ないぜ」

「それって恩着せがましいよ。二度も殺しておいて、それで許してあげた私は寛大だわ。命は私に一生感謝してね」

「く、くうーそうだけど、もう、いじめっ子だー!」

痛みだけでなく精神的なショックで泣いている御裏の頭をよしよしと撫でながら、空色は夜叉に幾つかの質問をした。

この戦いで空色が知リたかったことを幾つか教えてもらえた。

夜叉は世界樹の支配から逃れる為に、打ち消す力を持つ空色を守る必要があるらしい。

世界樹は世界そのものの、そう簡単に消滅しない。復活すれば再び空色を狙うだろう。

戦いに巻き込まれた空色を死なせてしまいかけた。

対応策として、死んだ空色の肉体を、夜叉は自分の体を使い代替していた。

一通り会話を済ませた空色が、御裏にとんでもない提案をしかけた。

「本当に私、死んじゃったのか、全然実感がないのよね。命、聞いたでしょう。そういう事だから、私達で世界征服しちゃおうか」

何となく元気に返事をしかけた御裏が、笑顔で固まる。

「そうそう……違うだろ、何言ってるのお前。どこからどこまでか、そういう事って話だよ。買い物行くみたいに、ちよつとそこまでみたいな感じで言うなよ」

「命の力を、私が上手く使えるように使役……いえ、アドバイスすれば、一年もあればこの世界は崩……支配できるわよ」

「お前、今違うこと言いかけたな」

「何を仰るの。私は世界平和と愛が必要だと考え、より良い世の中

には、人の思いやりや助け合いも重要だと思うわ。より良く生きる、建設的な人生よあれ。愛は地球を救う、汝の隣人を愛せよ。全てとても大切だわ——それよりも、ほんの少しだけ自分の利益が大事なの」

「清清しく言い切ったな。俺は悪の誘惑に身を任せないぜ、今から最終決戦が始まるんじゃないか。やばい、ヒリンが相手だと思うと危なっかしくて本気で保健に入ってセーブデータを保存したい」

悪の女ボス呼ばわりされた空色は頬を膨らませ、ふくれっ面をすると見せかけたが、笑いながら唇を尖らせた。

「ブブー、残念でした」

「いやいた、今回は合ってる。多数決でも専門家の意見を聞いても、その辺の一般市民に尋ねても、きつと俺の意見が正しい」

御裏に向かい、空色はまるで昔の人間国宝が描いた美人画のように華麗に微笑んだ。

こいつ、絵になる雰囲気出しやがって。

胸の奥で何を企んでいるのか、考えが読めずに怖くなった御裏は思わず引いた。

引きながら自然と戦闘態勢に切り替え、いつでも武器を出せる精神状態に変化していた。

とても落ち着いていた、言い聞かせるような口ぶりで空色が尋ねた。
「だったら？」

質問で返され、空色が本気で何を考えているか理解できないと思った御裏が、勇気を振り絞った。

「俺の生き方を貫く、やる時はやる！ かつての仲間だろうが、オレのポリシーが許さない……って、とりあえずごめんっ！」

威勢良く正義の味方のような台詞を吐き、けどどうにも怖くてすかさず謝った御裏が困ったような顔の空色の反応に首を傾げる。

「ん？ どした？」

「今の反応は嫌われているみたいで、こっちがさりげなく落ち込んだわ。やるわね、戦わずに先制攻撃でダメージを与えるなんて。私ね、悪玉の女リーダーって密かに憧れていたのよ。夢が適いそう……幸せってこれかな？」

ぽつと頬を染めて、空色が恥らうような仕草をした。

戦わずに済みそうではつとした御裏が、肩の力を抜いて癖っ毛を手櫛で撫でる。

「人の幸せって人それぞれだから、俺はどのこの言わないけど、お前のどこかが歪んでいそうなのは確かだな」

「あのね、命をスカウトしているんだよ、私は命と敵対したくないから。最終的には、返事によるけどね」

床に胡坐で座り腕を組んだ御裏が、目を閉じて考え込む。

「丁度いいや……俺には目標があるから、そいつも果たさないといいけない。俺達の力にも関係がある、夜叉も聞いてくれ」

御裏は今まで誰にも話さなかった、自分の力の所以と目的と夢を語り出した。

それこそ熱く語った。

空色はベッドの上で目を閉じて聞き、時折思いついたように深く相槌を打つ。聴いているようだが、実は御裏の演説が始まってから三十秒で眠りに落ちていた。

戦闘の疲れからか、熱弁を振るっていた御裏も、いつしか床の上に横になり寝息を立てていた――

十九 鬼畜（後書き）

会話のつながりと説明が下手でした。

自分でも分かるくらいテンポと内容が、ちょっとよろしくなくてです。

比喻も上手くない、展開は強引……それでも、この章はかなり書き直しました^^;

以前の作品を改めて掲載すると、自分の弱点と伸びた点が何となく分かりました。

二十 沙羅

—— 夜、二人が寝静まった頃。

空色がむくりと起き上がる。

頭から漆黒の滝が流れるように、長い髪の毛がさらに長く伸びていた。暗い部屋ではつきりと見えないが、体形が心なしか変化しているようだ。

髪を下ろし顔を隠した空色が周囲の様子を伺い、そつと部屋を出ようとして、同時に部屋のドアが開いた。

空色母が立っていた。

空色は軽く頭を下げ、夜叉の声で喋った。

「久しくお目にかかる」

別人と化した娘に対し、空色母は普通に答えた。

「お久しぶり、どうしてその子の中に貴方が居るの」

「世界の戦いに巻き込まれ、緊急時故に、断り無しに我が世界へと誘導したが、結果として戦わせてしまい空の人は肉体を破損した。我が付いていながら申し訳なし。いかにして回復させようか思案し、私の肉体を使い修復を試みた。この体、心配なさらずとも空の人へ譲り渡す」

空色母は、大よその事態を状況と感覚、それに夜叉の言葉で把握したようだ。

「いいいよ、その子の力が目覚めたのね。最強で、使えば何も残さない諸刃の力。そして世界樹に悟られて……今回の戦いの結果は、世界はどうなったの」

「向こうが消滅した、人の世は現状維持である。そのメイカーの力

を持つ女人のおかげだ。とはいえ、いずれは復活するであろう」

「とりあえず一段落ってことね。とにかく良かったわ。そうそう、私が昔、貴方と組んで戦った事实は、いずれ私から話したいの。その子は多感な時期で、精神的にまだ脆く未熟なの。メイカーの子は大切なお友達、余計な感情を持たせず、二人の仲を見守りたいのよ。暫くは黙っていて貰えると助かるわ」

「承知した、我は沙羅の人と人の世を守ると誓った。沙羅の人がそう念じるのなら、従おう」

沙羅の人、そう呼ばれた空色母は、過去の思い出が蘇り目尻に薄っすらと涙を浮かばせた。

「こんな私を、まだ沙羅の人として呼んでくれるのね。昔の約束だけど、守ってくれるのね？」

「人ならざる我を信じ、一時でも力を貸して頂いた。そちが居なければ前の戦いで、世界の状況は大きく向こう側に傾いたであろう。我は忘れぬ、我は存在する限りそなたの味方だ」

「ありがとう……今では力の名残を持つだけの、普通の人間で母親よ。とりあえず、今回は人が勝ったのね。大体の事情は分かったわ。その子も疲れているから、もう体を返してね」

空色母は空色と等しく無敵に近い能力を持っていた。

その力を求め、昔に大きな争いがあった。

だが戦い途中で身籠った空色母は、子供が只ならぬ力を持ち、お腹の子供が自分の力を打ち消し、産まれた時には自分の力が渡っていた事を知る。

今では力の残り香が使える程度だった。

結果として戦線離脱し、今現在是一般人として生活している。

空色の力が目覚めるまでは普通に暮らせるよう、注意を払って育てた。自己主張と自意識の強い性格なのは、大事に育てすぎたからだと若干反省していた。

空色はいつしか、家であってもどこか見えない一線を引いた態度を取るようになった。

御裏が訪れ、久しぶりに若者らしい振る舞いをする娘を見た。心を打ち明けた大事な友達なのだろう、娘の態度がそう物語っていた。

空色の肉体を借りた夜叉がベッドへと戻る。

「元より、恩義あるそなたに、一刻も早くこの件を伝えただけであつた。すぐに消えよう」

「夜叉。貴方が無益な殺生をしない思想主義なのは十分に知っているわ、貴方の力も知っている、だからその子が今のところ安全なのも同時に分かる。だけど、そこまでして守るというからには、狙っているのでしょうか、空の力を」

「この空の人の寿命が尽きるまでは、我は守護する」

寿命が尽きるまでね……空色母は夜叉らしい理屈に思わず笑った。

「うふふ、その子を守ってくれるのなら、死んだ後まで止めないわよ。どうせ私が先に死んでるでしょうから。他の神に取られるよりは夜叉ならまだ、幾らか安心だわ。ねえ貴方達、歴史の神々は、そこまでして力を得て自由になりたいの、自由って何かしら」

「まず、人以外で自由などと思つる存在があるのか……我は、良くも悪くも勝手に生き方を定められぬ事であるうと思つ。たとえそれが苦しく、心の目が曇り、苦行や迷いに満ちた一生であるうとも我は人を素晴らしい存在であり、同時に何と無駄の多い生物かと考へる。されど我は我、人は人なり、自由とは何ぞ。我も心理を彷徨う者なりて答えられず」

腕を組んだ空色母が、少し意地悪く、自分の口を指差す。

「まず手始めに、悩んだら聞いてみるのよ、話してみたらいい、私で良ければ相談に乗るわ。ここに話しかけやすい人間がいるのに、相談もせずに答えを出すなんて、もったいないでしょ。あなた非効率な行動は嫌いでしょ？」

空色に肉体を明け渡そうと、夜叉はベッドに倒れるように寝転がる、

「そうであつたな、知恵を借りるという選択であるな。ふむ……早く空の人を休ませよう、我は主格から消える」

「久しぶりに話せて楽しかったわ、相変わらず頑固なところもお変わり無しのようなね」

「……………最後に聞きたい、この娘の名は、我が？」

「そうよ、名付け親が神のような存在の娘、私の自慢よ」

「我は貴重な機会を与えてもらったのであろう、かたじけない。あの時、我は止まらぬ筈の摂理が、止まったような錯覚を受けた。こうなると予測しておられたのか、未だあの感覚忘れられず」

夜叉はそれだけ言うと言目を閉じ、空色に全てを明け渡した。

空色母は、夜叉の存在が消えるのを感じると、床で眠る御裏の傍に屈みこんだ。

寝返りを打ち、ずれ落ちたタオルケットを、そっと御裏の背中に掛ける。

「この子を宜しくお願い」

すやすやと眠る御裏に、祈るように囁いた。

二十一 学校

次の日、結局は他人の家に泊まってしまった御裏と空色が二人並んで登校する。

生き返った空色が疲れの余り深い睡魔に襲われ、御裏も気が付けば床の上で寝転がっていた。

起こされるまで二人は熟睡していたからだ。

空色母はどこまで知っていたのか、昨日と変わらない態度で二人を見送った。

「ついにロヒリンもそういう年頃になったのね」

見送る母親の独り言に空色がハツとして振り返る。

「……何か知ってる？」

「お母さんも若い頃があつたのよ、それだけだつて」

「違うよ、何か隠している……いつか話してね」

アイコンタクトで何かを察した空色が、いつか母親が話す気になるまで待とうと思ひ話を打ち切った。

のん気に先を歩く御裏を追いかける。

「待つてよ、足速いな」

「足が長いからな。忘れ物でもしたのか、待つてやるから早く取つて来いよ」

「今じゃないみたい、気のせいだつて」

「何だそれ？」

目立つ不良っぽい問題児と、違う意味の問題児が揃って登校するというありえない組み合わせに、それを知った生徒達の間に憶測と無数の噂が飛び交った。

御裏のサバサバした物言いと、深く考えない明るい性格は男女問わず人気があった。

昼休みになると、御裏は空色との関係を聞いたがる数多の友人を振り切り、弁当箱を片手に二年二組の教室を訪れた。

「あのさ、ミコちゃん」

御裏は同級生で仲の良い友達からは、ミコトからミコちゃんと呼ばれていた。

友人が数人追いかけてきて、注意を促してくれた。

——空色には気を付けた方がいいと——

少し困った顔の御裏に、御裏なら大丈夫だと思うけど、と付け加えて説明してくれた。

「あの子ね、去年暴力問題起こしたらしいよ。ほら、見た目が凄い綺麗でしょ、だから当時学年で一番人気のあった男の子が告白して、それ以外にも大勢があっさり振られたんだって。それから振られた男の子と、取り巻きの女の子にイジメを受けてね、女子からはやかみを受けやすい立場だったのもあるけど……少しは我慢したらしいけど、切れて半分くらいを闇討ちして血祭りに上げたって。証拠は残さずに、かなり残酷な手段を使ったらしいよ」

誰かに聞かれるのを恐れ、友人は小声で打ち明けた。

とんでもない内容だが、あっさり納得した御裏が言い返す。

「ほおーいかに……あいつなら、やられたら、それ以上にやり返すだろうな。それって、多数でイジメた相手が悪いじゃん。それでかな、棘があつて、ちよつと嫌味があつて、対人恐怖症みたいなんだよな。頭良さそうなのに、疑り深くてたまに被害妄想気味だし」

「悪いのは相手だけど、元々良くない噂のある子だったよ。あんなに綺麗であれでしょ、少し怖い感じがしない」

「はいはい、ま、言いたい事は何となく分かるからいいって。眠れる虎を怒らせるような事しなきゃ、それなりにいい奴……でも無い

な、俺も被害にあってるな。いやいや、俺があいつと友達になってもいいって思ったの、オツケー？　なら俺がどう思うかが大事だろ」

「でも、ミコちゃんが心配だよ」

「噂が大きくなってるだけだって。俺が強いのは知ってるだろ、普段はおバカしてるけど、実は最強だぜ」

「知ってるけど、そういうのとは別の怖さなんだよ。ミコちゃん強いけど単純だから。ミコちゃんが言うなら止めないけど、気を付けてね」

心配するなって、あいつは根はいい奴だ。

大声で明るく陽気に言って、御裏はその場を離れた。

二年生の教室を覗くと、空色は端の方の机に一人で座っていた。昼休みで友達や仲の良いグループが集まって弁当を広げ雑談を交わす中、そこだけ空気が違うように静かに一人でいた。

明らかに他の学生とは見えない一線を区切っていた。

他の二年生達は、御裏に関わらないように避けて通り、誰も不意に現れた上級生に対し咎めたりはしない。

だが、その挑発的な外見が目立ち人気のある御裏を、遠巻きに大勢の学生が見ていた。

男子女子関係なく、羨望の籠った目で御裏の全身をしれっと何人もがチェックする。

まるで外人モデルもしくはアニメから抜け出たような抜群のスタイル。

くびれた腰のどこに内臓が入っているのか、胸のふくらみは本物なのかと疑問視し、本物ならあの体すげーと、男共がひそひそ言っているのも聞こえた。

そんな囁きに慣れっこの御裏は、普通に堂々と無視する。

教室の入り口から弁当箱を振り回し空色を呼ぶ。

「いよつ、ヒリン、誘いに来たぜ。どうせ友達いないんだろ暇してるな」

窓の外を眺め、凜とした佇まいで反応を示さない空色に、さらに大声で話しかけた。

「おーい、こら！ ヒリン俺だ。こっち向け！」

一見ただけで、やっぱり友達いないと察し、元気付けようと大声で呼ぶ。

何やら廊下が騒がしいなと思ってはいたが、関係無しと窓の外を見ていた空色が、驚いて振り返る。

後ろで一つに束ねた髪の毛が、空色の焦りを示すように跳ねてガラスを撃った。

「ちよ、ちよつと、何でここに来てるの」

空色の一言で、教室が静まり返った。

何があつたのか、普通なら空気を気にする場面だが、御裏は天然ののん気さでスルーした。

「せっかく一緒に飯食おうと思って誘いに来たんだぜ。弁当か、学食を買うのかどっち派だお前。困ったふりしやがって、本当は嬉しいだろ」

「う、嬉しくなんかないんだから迷惑だよ」

「ほらほら、ツンデレキャラみたいない方になってる。照れちゃって」

「私の横が空いてるからって、命を待っていたと思わないで。窓の外で座る人がいないから、誰も使わないだけなの。地上10メートルで空気椅子の姿勢を保持し、なおかつ落下しながらお弁当を食べられるのならどうぞ」

「……俺に、どうしろと。ここで力使っちゃえって言いたいのか？」

御裏は空色が照れ隠しに嫌味を言っているのか、苛める気なのか、本気が図りそこねた。

「命、顔色が变だけど調子悪いの？　しかたないから話を進めるよ。急に来られても、教室内で上級生が食べる場所は無いわ、他の人が遠慮するでしょ。どこで一緒に食べるの？　それに学校内で私に関わると、命まで敬遠されるよ」

「あ、ああ……」

「どうしたの、元々油断だらけなのに、さらに気が抜けた顔して」「びつくりした、お前、まともな会話できるじゃん。俺、学校でまともな会話聞いて驚いたのか。そんな不思議があるなんて今の今まで思いもしなかった、貴重な体験したな。ヒリンは世渡り上手そうだからクラスだと優等生キャラになれそうだな、でも、何か変なオラが見える気が……あ、見えちゃった。それは今いいや、屋上に行こうぜ、今日は天気いいぞ。食後に俺が何か造ってやるから少し遊べるぞ」

「あのねー、私の話はそういう意味では……」

立ち上がり言い返そうとした空色を、数人の女性徒が心配そうに伺い、ヒソヒソと何か囁いていた。

端から見れば、悪そうな上級生から、屋上に呼び出されたように見えたのだろう。

いや、下級生のくせに上級生を尻に敷いている、恐ろしい奴と思われるたのかもしれない。

「しかたないから、友達のいない命に、付き合っただけあげるわ。私は弁当だけど」

空色はわざと聞こえるように、やや大きめの声で返事してから席を立つ。

二人の姿が消えると同時に、教室には安堵したようなささやきが広がり、やがて喧騒が戻った。

『今の三年生の御裏さんだろ、見た目派手な美形で不良って噂の…』

……

『ついに空色が呼び出されたのか、あいつも可哀そうだな』
『ただどき、何となく空色さんの方が偉そうに喋っていたぞ』

屋上には先客が何人かいた、それぞれが数名のグループを作って、あちこちで固まって雑談しながら食べていた。

屋上で食べるのは上級生達が多く、何故かちよつと悪そうな人が多かった。

「おう、悪いな邪魔しちゃって」

御裏が声をかけると驚き、羨望を込めた目と態度で挨拶して姿を消した。

「いえいえ、いいつすよ。どうぞどうぞ」

二人きりになった空色は初めて屋上で弁当を広げた。

「たまには広い場所も悪くないわね」

空色は壁際に座り、竹の柄の弁当袋から弁当箱を取り出す。

「渋い、お前本当に女子高生か。いや、ヒリンらしいよそれ。俺はパン食べる」

御裏はそう言って何かに納得した。

「何よそれ。誘って話す第一声がそれって、知らないの、あんたより一年若いのよ私」

空色が馬鹿にしたように返答した。

二十二 屋上

屋上で壁に二人並んでもたれて座り、御裏はパンとパックのコーヒ―を、空色は弁当を食べていた。

御裏が物欲しげに見るので、空色は散々苛めてからおかずを分け与える。

「ほらお手は？ 私の前では、無理しないで耳を垂らして尻尾振ってもいいよ？」

「まだ動物ネタ続いていたのかよ、耳を出せるけどするかよ」

「出せるんだ……はいあーんして」

赤い小さな箸で唐揚げを摘み上げ、落ちないように片手を添えた空色が、ごくごくさりげなく御裏の口元に箸を寄せた。

こちらでも自然に口を開きかけた御裏が、笑顔で口を開いたまま後ろに下がる。

「あー……この流れが怖いから自分で取って食うって、口開いたらその箸で刺されそうだ」

「外れ、刺さないよ失礼だな。今の私は屋上でお弁当食べるの初めてだから気分がいいだけだよ。そうだ、欲しいならご飯もあの力で造れないの？」

「無理だって、味まで保障できない」

空色のから揚げを上手そうに食べながら、御裏は試しにから揚げを造ってみせた。

御裏が指で空中を摘む動作をすると、指先にほくほくと湯気の上がるから揚げが出現した。

キツネ色に揚がった、いかにも美味しそうなから揚げを一口頬張った空色が、齧りかけの唐揚げをじっと見つめ判定を下す。

「これ何の味、意味不明な味だけど。分かった、食べた事ないけどUMA（未確認生物）の味だわ」

食べた事ないを、ことさら強調して空色は未確認生物だと断定した。

「ウーマ、馬肉っぱいのか？ な、だから味は保障しないって言うた。ほんと、俺の力って便利なようで不便だよな」

「でも食べられる、せつかくだからご馳走さま」

普通にから揚げを飲み込んだ空色に、御裏が驚き目を丸くして自分の飲み物を差し出す。

「食った！ 具合悪くならないか、いいから早く俺のコーヒー飲め！」

本当に体調が悪くも、気分も問題無い空色は、どうしてわざわざ御裏が口を付けたコーヒーを飲まなければならないのか怪訝に思った。

「いらない、あ……なるほどね……今頃お腹が痛い、痛いから何か一発芸しなさいよ」

「あーわざとらしい。何ともなかったくせに」

それはさておき、涼しい顔で空色は話を変える。

「そういえば夜叉がね、昔昔だけど命と同じような力を持つ人間に会って、戦ったんだって。でも見逃してあげたら、その人は後に歴史的な偉大なる指導者になったそうだよ」

「へえー、夜叉ってやっぱり昔悪かったの？ あ、話の趣旨が違うのか悪い。やっぱり力の使いようなのか、偉くなる人はどこが違うのかな」

「他人の為に力を使ったから、夜叉は手を出さなかったんだって。夜叉からすれば只でさえ少ない寿命の人間、自己の利益を度外視した、いい人だから情けをかけたみたい。夜叉とお話したけど、価値観は人と違うみたいけど、とっても優しい人だったよ……私のだからね！」

自分の両肩を抱き、本気で御裏に夜叉を渡さないと空色は視線で威嚇する。

御裏が感心しながら話に聞き入っていたのを勘違いしたようだった。

「はいはいって、俺は夜叉に興味ないから安心しな。あのセンスは好きだけども……あ、これ見てくれ」

御裏はどこから取り出した携帯の待ち受け画面を見せる。

天使の御裏が斜め下からウインクし、その隣にはややピントのぼやけた夜叉が、真面目な表情で目を瞑って写っていた。

「なにこれ……いつの間に撮ったの、ありえない、夜叉様とツーショットなんて、合成でしょ」

御裏の携帯を取り上げた空色が、目を丸くして写真をしげしげと眺める。

「うっん、お前を助ける時にさ、夜叉と一緒に世界樹の近くまで来た。その時に、一緒に記念写真撮らせてって聞いたら、あっさり撮らせてくれたぜ」

空色の目つきが鋭くなり、武道の達人のような迫真の気合が籠った、深い深呼吸を繰り返す。

「フヨオオオオ……」

呼吸に合わせて空色の長い黒髪が揺れる。

只ならぬ気配に、御裏は何だか良く分からない奥義によって携帯が破壊される危機を感じ取り、慌てて空色の手から携帯を取り上げようとした。

いざとなれば力を使ってやむなし、そこまで思わせる雰囲気があった。

「落ち着け、それ俺のだぞ、とにかく返せ」

空色は鼻から抜けるような声で、珍しく御裏にお願いした。

「命、お願い。この携帯頂戴。今度お弁当のおかず多めに入れてくる、分けてあげるからね。いつそお弁当も一つ持って来てあげる」

「気味悪い声出すな。やるかよ、おかずや弁当で会話もメールもできないだろうが、携帯返しやがれ。しっかり抱きしめるな、人質ならぬ物質のつもりか！」

「ひとじちなら、ぬぶっしっ？」

「ものじち！ ややこしい、誰もそう言ってない！」

「分かってるわよ。しかたない、命は情け無い。じゃあ私の携帯に画像送ってよ」

「驚かすな、さりげなく嫌味も言っつな。その写真が欲しかっただけかよ」

「うん、変なのが写ってるけど、そこはカットして私の画像を入れるの」

「まあ、何を消すか聞かずとも分かるけど。それくらいなら好きにすれば」

御裏は空色の携帯に画像を送信した。

空色は受け取った画像を、目を輝かせて見ていた。

綺麗な瞳を見て、決して純真な乙女だと思っではいけないと御裏は自分に言い聞かせる。

「ありがとう、これ、大事にするね」

空色は携帯の画面を閉じると、本当に嬉しそうな声でお礼を言った。

「お、おう、大事にしるよ……ちょっと熱でもあるのか」

あまりにも素直な空色の反応に、裏があるのか病気ではないかと勘ぐった御裏が、空色のおでこを手で押さえる。

「熱は無いようだ、だとすると素で言ったのか。髪型が違うからか？ いけね、色々考えたら俺の背筋が寒くなってきた。ねえねえ、俺が熱出てない？」

「私って本気で信用ないのね、それ以上言つと訴えるわよ。でも命は私に考えなしに携帯の画像を送った、それでいいのよ。その素直さと単純さを私がフォローするのが今後の課題だから、いつも疑つて掛かるよう心がけてね」

「お前さ、俺を闇の仕事人にでも育て上げるつもりか。嫌だよそんなギスギスした友達関係」

「ネジが抜けたように単純だから命は、私の傍に居られるのよ。ほら、力を持った昔の人の話の途中だったよ、どうして夜叉が見過ぎたのか考えて」

自分の手をじつと眺め、ついでに細かい花柄の網タイツをはいた丸い太腿を見て、御裏は力の有効な使い方を考える。

全く関係無く、空色は斜め横から見ると、さらに丸くて大きな御裏の胸には何が詰まっているのか空想していた。

御裏は考えた、人生で何回発揮できるか分からない集中力を発揮して思考する。

だが、悲しくも小銭を造って自動販売機のジュースが只で買えるくらいしか思いつかなかった。

戦いでは多種多様な武器を創造できても、基本的に善人で小悪党なのだ。

しかも、それは自動販売機を管理する人が困りそうだから考えたのみで反省して封印した。

但し、例外も考える。緊急時ならいいだろう、そう、どうしても暑くて喉が渴いて倒れそうになり、財布には金が無い。これならしかたないが、普段は真面目にきちんと買おうと決心した。

何よりも後ろめたい行動が発覚し、ヒリンと夜叉という組み合わせに怒られるのが嫌だった。

「なあ、ヒリンが何でも造れるとしたら。あ、造れるのは自分で可能だっと思える範囲だぜ。何を造ろうと思う？」

空色は目を閉じて手で胸を押さえ、真摯に答えた。

「すごくいい丸」

「丸？ ボールか地球儀でも造るのか？」

「う、羨ましいという感情なんか少しも思っていないし！ 私の意見を聞きたいの、それはとても有意義な発案だわ、命が自分で考えたとは信じられない奇跡よ。まずは手慣らしに、使えるし売れそうな貴金属でも造るかな、それに資産として家ね。あとは理想の男を数人作って貢がせるわ。宝くじや賭け事も試してみたいかな。今とつさに考えたから、平凡な案しか出ないね。そもそも、訓練すれば服も食料も出し放題みたいだから、慣れたら生きていくのにお金が必要なくなりそうな能力よね」

「偉そうに……だが俺としてはとても参考になった。もっと案があれば聞かせてくれよ」

「最終的には一生寝て暮らせるけど……命らしさが消えそうだから、もう言わない」

二十三 夢想（前書き）

前回とこの回で、御裏がどんな人物か少しずつ明かされます。

二十三 夢想

——はい、おしまい。

一方的に話を区切った空色に、少しでも力の有効な使い道を知りたい御裏が、なおもしつこく食い下がる。

「ええー、出し惜しみするなよ、勿体ぶるな」

「は？ 誰がドケチですって？ 人生と言葉の節約上手なのよ、私は」

「そんな前向きな意味で言っていないって」

「あのね、私の意志は逆だよ、私なりの優しさだって。命の才能と性格を壊したくないからここで終わりにするの。私が命だったら、一日一回は誰かが絶望して、週に一度は町が崩壊してるわ。夜叉ものんびり冬眠みたいな生活してないから」

空色としては、自分の体のどこかに居るであろう夜叉が御裏に攻撃をかけない理由から、『人ならざる者を狩る』夜叉が昔昔の偉人と同等に扱っていると褒めたのだが、御裏は全く気付かなかった。

それから唐揚げの話に戻り、好きなおかずの話に切り替わり、ふと思い出したように空色が御裏に向き直る。

弁当箱を片付けながら、空色が御裏の顔の中央をじつと覗いて尋ねる。

「命の夢って何か教えてよ。昨日はちゃんと話してくれなかったでしょ、私聞きたいな」

「えーっ、聞いてなかったの、あれ。俺すごい長々と話したけど、ヒリンやっぱり途中で寝たな、実際は寝る前から聞いてなかっただろ」

どうでもいいが、空色のおでこは綺麗だと御裏は思った。

磨きあげられた肌に顔が映るような気がして、角度を変えてみたが、気のせいだったようだ。

空色は御裏の顔の動きに合わせ、穴が開くほどじっと顔を見つめている。

「色々な事があつたから、不本意にも野獣の前で無防備に寝ちゃった。もう、襲われても分らないくらい疲れて。ねえ、襲ってないよね」

「するか！ 俺は色々あつて、興奮しすぎて寝れなかった。おかげで授業中良く寝れた」

「ふうん、動かないで」

ゆっくりと手を上げた空色は、何かを摘むような形の指を伸ばす。

「あ、何だご飯粒だった。鼻くそかと思った」

「さっきから真剣に何を見ているのかと思えば……お前、自分から俺の夢を聞いておいて、気になったのはそれか？」

両肘を反対の手で押さえ、体を抱きしめるようなポーズの空色が、急に真面目な顔を作り言い返した。

「ふざけてないで、きちんと見ているし聞いているわ。命に女装癖がある理由でしょ。それとも興奮したって話かな。飢えた発情期のケダモノで、妄想逞しい思春期の若者が何を考えるのか教えて、ちよつと怖いけど知らない世界に興味あるわ」

御裏はやっぱり強引すぎるオチを言いたかったのかと、空色の口を手で押さえて黙らせた。

「今度は俺の番ね。俺が知るかそんな事！ いいかげんそのネタ何度も使われると、段々とお前が実はそっちじゃないか、なんて思ってきたぞ。妄想を無駄に鍛えているのはお前だ。見るよこの胸にこの体で、どこが男！ 胸なんか体積にしたらお前の十倍はあるな、片手で持てないぞ。実は羨ましくて言ってるだろ」

見る見ると、片腕で胸の下を持ち上げ、斜め横を向いて腰が細く見えるポーズを取る。

体の線を見た空色の眉間に少しだけ皺が寄った。

「全然。全く、別段、特に、これといって、羨ましくないわ。そもそも大きくて何か便利なの」

悔しがっている。

ようやく空色の感情が少しだけ読めるようになった御裏は、出てから初めてであろう、勝ったという優越感を感じた。

「よっしゃ！俺は気が済んだからもういい。今までの会話は全て許す。気分がいいから教えてやろう、おっぱいが大きいと色々挟めてな……違う違うまた話が逸れた、墓穴に誘導されるところだった」

「はいはい、滅多に言えない自慢話を聞かせたかったのよね、落ちてこうよ……取れた」

じつと覗いていた空色が、御裏の鼻の頭からご飯粒を取り、嫌な顔で手すりの向こうに放り投げた。

そんな顔するなら取るなよ、心の中で突っ込みながら御裏は立ち上がり、気分を切り替え力を込めた喋りで夢の続きを話す。

「とにかく俺の目的と夢だ。俺はまず、無事に学校を卒業する！」

「命って本当に切り替え早い、ここまで後腐れないと便利な奴だと思われるよ。知っていたけど改めて感心した——確か初めて会った時に、そんな事言ってたよね。卒業するのに、どこに問題が発生しているのか具体的に教えてよ。私で良ければ、手助けできるならするけど」

「うむ、まずは出席日数だ」

「それは難しい、私は身代わりも分身もできないから。解決手段は簡単じゃない、真面目に学校に来てなかったの？」

「うんにゃ、来てないじゃなくて、来れなかった。昨日みたいな事が何回もあったし」

空色はお茶のペットボトルを口に含み考え込む。

「どの事？」

「学校で出会ってから！ 凄い戦いをした！ お前が一番危なかっただろうが！ 危ないどころか、お前が死んだよ！」

本気でどうでもいい事のように、空色は鼻で笑って答えた。

「何だ終わった事でしょ、最終的には全て元通りだったし……」

「そ、それでいいのか。まあ、本人がそう言うならいいけどさー」

「……命は前から、異変を何度も経験しているからね。戦闘になったら学校どころじゃないし、無事に帰れるかの話だよね。一人で大変だったね」

「今思えば、俺一人でも頑張った、凄く偉かったと思う」

「ぼっちなのに、めげずに偉いよ、もう感動の粹に達するわ。クスッ、強いのにぼっちなんだね」

「おいこら、何気に貶めやがったな。まったくもう……あ、そうそう、それに俺ここの生徒じゃないもん。それにそれにさらに、今の家の子でも無いから。全部違うから」

ペットボトルのお茶を飲んでいた空色が、お茶を飲みかけた姿で目をパチパチさせる。

噴出すのを何とか堪え、空色は咽ながら尋ねた。

「り、理解不能だった。もう一度聞きなおしてもいい」

二十四 会話（前書き）

あれ、学校で会話メインのシーンが三話も続いてしまいました。
この二人はよく喋りますね、仲良くなって欲しいです。

二十四 会話

腰に手を当て、見事な膨らみのある胸を弾ませて御裏が答えた。

「俺はどこから、この高校に通う誰かと入れ替わった。実は全くの部外者だ」

自分の胸を突きながら、御裏は説明する。

「だってさ、幾ら何でもこの姿で学校来たら滅茶苦茶な問題だぜ。まるきり違うじゃん、制服そのものが。まだ制服が揃ってない転校生でもあるまいし」

「昨日、改めて見てそう思ったけど……誰も突っ込まないから、前からそうなのかなって、何となく納得していた」

「俺の住んでいる家も、親も、俺は知らない人だ。だけど向こうは俺を自分の家族だと思っている」

「命の話が、とち狂った妄想や厨二病ではなくて本当だとしてね、それは一体どういう事、病気なの、異常なの、説明できるの？」

御裏はウーンと唸り、多分、推理した感じだけど、そう付け加えて答える。

「俺自身が、暫く前から世界の歪みによって行動を制限されたのかな。だから、この俺がこの高校に通って、毎日を今の家で暮らす限り、ずっと昨日みたいな事は続くと思う」

空色は自分が触れたら、御裏の身に起こったと言う異変を解けるのでは無いかと思った。

座ったまま手を伸ばして、網タイツの上から長い脚に触ってみる。「どう？ 私が触れても命は変わらないの？」

「そりゃ変わらないな、俺は何も変わってないから。変わったのは、

この場合は周囲全体だ。大げさかもしれないけどさ、世界そのものって言っていていいかもな。けどな……」

御裏は次の言葉を言っていていいものか少し考える。空色は、不思議そうに御裏の制服を触っていた。

「何だ、私が触っても服が消えないね」

「こら、俺に屋上でストリップさせる気か。本当に消えたらお前の服を剥いで、俺はそれを着て逃げるぞ」

「そして素っ裸の私が泣きながら、先生やクラスメイトに命にされたって告げ口したら、どうなると思う？」

「むむむ……俺はピンチだな。貴重なアドバイスをありがとう」

「どういたしまして、もっと考えないと私の相手になれないよ。ちよつとだけいい？」

空色は御裏の手を握る。

「消える消える……正体を現せ……願いを叶えろ」

目を閉じ必死に念じる空色が、片目を少し開け、残念そうな顔をして壁際に座った。

「くそう……チッ」

「あの、一体、ヒリンは何が起きると思ったの。今の行動は？」

「別に。命が割れて、中から夜叉並みの壮絶な美形が出てくるかと期待したの。命は男みたいだけど、男にならないで命のまんまだったわ。舌打ちは自分の不甲斐なさに対して」

空色の理不尽で暴発するような行動に眩暈を覚え、御裏は頭を抱えた。

「まったく自分勝手な欲望ばかり言って」

空色なりに、この辺りで弁護をしなければと感じ素直な気持ちを伝えた。

「お詫びにね、さっきの説明の追加だけど。男で性格は命だったら、理想的な相手だと思ったの。それで許して」

「あん？ 性格が偏っているヒリンの言葉を翻訳すると……非常に微妙だが、俺が納得するといらん誤解を与えそうだが、今のはヒリンなりに精一杯な気持ちを示したとして、無理にでも理解しよう」

口を押さえて笑った空色が、ごくごく小さい声で言った。

「命の性格は楽しいよ」

「あ？ 聞こえなかったが、お前が聞こえないように言ったからには、今のは良い言葉が褒めたな。それこそ面と向かって言えばいいのに、難しい奴」

「そこは想像におまかせして」

深呼吸をして仕切りなおした御裏が話を再開する。

「はいはい、さっきの話に戻るぞ。俺予測だと、まだどこかに居る俺の世界を変えた奴を探して倒さないといけない。同時に、俺がこのままだった場合を考えて、学校を卒業する必要がある。だって俺去年も居たんだけ三年生で。ギリギリセーフだった筈なのに、何でかアウトだった。きっと俺をここに居させる為に、誰かが仕組んだとは思えないだろ。どこかの漫画みたいに、何年たっても三年生ってありえない」

真剣な表情で聞いていた空色が、ゴクリと唾を飲み込み、恐々と尋ねた。

「バ、バカ……ごめん、頭が賢くないから頑張っても……違った。勉強が苦手だから努力しても……そういう理由でもなくて、簡単に言うとは早く人間にな……違うわ、私何言ってるのかな。説明が拙くて、何度も同じ意味の言葉を繰り返しちゃった」

本気で申し訳なさそうに言い直す空色を、やや機嫌を悪くした御裏が怖い顔で睨んだ。

「ブツ」

「笑うな」

「命って面白い。ここでそんな顔して和ませるなんて、友達になれて良かった」

怒りかけた御裏が、力が抜けたように肩を落とした。

「そこで天使の笑顔か、いいいいいよ、後１０年はそれで大概切り抜けられるよヒリンは。俺はもうどうでもいいやつて気分。それで、何で俺がこの学校に来させられる必要があったのか考えた。ヒリン、お前に合う為だったんだ、運命だ。多分大体そんなところ」

空色は呆れたジェスチャーを思いつきり示した。

「へえええー」

鼻で笑い、片方の唇を上げて笑い、手の平を上にして肩の高さに上げ、首を振って後ろを向いた。

首を捻りながら腕を組み、疲れたような深いため息を吐いた。

冷ややかな眼差しで御裏を突き刺すように見据えた。

「まるで説得力も、理論も、根拠も無し。結論は考えるだけ時間の無駄。気になるのは……ねえ、力目当てなの、私と仲良くするのは私は命と友達のままなら小事には拘らないけど」

負けじと睨み返した御裏が、我に返り、友達うんぬんを語るにはあまりにも異様な状況に、思わず笑ってしまった。

「うはははっ、変な奴だな……何言ってるのお前、俺はそんな力どうでもいいや。一緒に戦った連帯感もあるけどさ、ヒリンは精神が不安定でアナキーな奴だからさ」

空色はポケットから銀色の硬貨を取り出した。

「１００円を差し上げよう。今の言葉にはそれだけの価値がある」御裏は１００円硬貨の意味を考えた、まったく意味不明だった。

「わーい、ひゃくえんだー。お前意味無く言っただろ、さっぱり分からん！ 今みたいに、ヒリンは慣れたら自分の地を丸出しだろ、美人ですがへ理屈言って意地悪いですがそれが何か？ 俺はそういうの見ていて楽しい」

「そうだね、あんた真性のMだからね。Mが重なって平方メートルって今日から呼ぼうかな。でも御免なさい……友達以上であるようで、命はそれ以下の可能性もあるの。これだけ変な女と友達になりたいだなんて、異常だね。お願いだから、ショックで自由な世界を夢見てフェンスを越えて飛ばないでね。手の平に注意書きしておくね。『行動はあくまで自己責任、by平方メートル』」

御裏はポケットからマジックを取り出した空色から離れる。

「おいおい、何でマジック常備しているんだっての。日常のどのシーンで常に必要なになるってんだ」

「用意と用心に越したことはないでしょ？ ダイイングメッセージを書いたりとか……」

御裏は急に真面目な口調で説教するように言った。

「人が真面目に打ち明けて相談しているのに、またブラックな冗談を言う。ヒリンは頭の回転速いから分かってるだろ、死ぬネタは言い過ぎだな。何度も言われたら、俺もう口利かないからな。絶交バリア出すぞ」

眉間をピクピクさせた空色が黙って後ろを向く。

「本気じゃないよ、乗ってくれると思って、私の性格を知っていると思っていた。ごめん」

後ろ向きで空色は謝った。

御裏に拒絶され、目が潤んだのを見せなくなかったからだ。

——こいつは普段の言動がキツイ、だから悪気が無くても悪意に取られる。

過去に友達が出来無くなる何かがあって実際に攻撃もするが、もはや空色の話をはぐらかす癖と嫌味は自分の心を守る不器用な条件反射だ——

そこに勘付いていた御裏が、下手に触れると本人のプライドも傷付けると察した。

空色が空色自身を責め、後悔しているのに気づかない振りをして

話を逸らす。

「ま、まあまあ、今のは俺も少し頭に血が上ったから言い過ぎかな。で、説明の続きだが、俺はヒリンがそんな力を持っているからこそ、俺とヒリンで何かをする為に、この学校に通って、理不尽にも一年多く過ごしたんだと思う」

空色はどうでもいいように、素っ気無く答える。

「そうなの」

「世界制服するって言ったよな、俺の目標から外れてないと思うぜ。何せ相手は、世界をしれつと弄くような奴だからな。世界が相手みたいなものだ」

御裏は空色の肩をポンと叩く。

「一緒に世界を変えようぜ。俺とお前ならできる、きっと二人の力があれば出来るって」

無言の空色が後ろを向いたまま頷く。頷いて、思いつきり嫌そうな顔で、態度で返答を返した。

二十四 会話（後書き）

お話も佳境に近づいてまいりました。

ここまで読んで下さって、作者にお付き合い頂きありがとうございます。

二十五 再戦

昼休みの終了五分前の予鈴が鳴る。

屋上のスピーカーから電子音の鐘が鳴る中、空色が「戻らなきゃ」と呟き、弁当箱をしまった袋を抱え歩き出す。

スタスタと歩く空色の背中に、御裏が手を振って声を掛ける。

「あ、あのなヒリン……俺、嫌っている訳じゃないからさ……今日も一緒に帰ろうぜ」

空色は黙って頷く。

「よしつ。それじゃ、早く出た方が門の辺りで待ってような」

空色は気持ち振り返り「うん」と小さく言う。

一度途切れた鐘の音が鳴り、さらにもう一度、もう一度、繰り返して鳴る。

途切れ途切れになり続ける鐘の音。

変だなど。そう思ってスピーカーのある方角を見た空色は、視界に入ったものを見て、思わず弁当袋を落とした。

癖のある茶色の髪が炎のように揺れ、スカートを翻し、長い両足をそろえて曲げた御裏が、フェンスを越えてジャンプしていた。

まさか飛び越えてしまえと言った嫌味を、そのまま有言実行する程のバカだとは、さすがの空色も本気で思っていなかった。

「なんで……!」

やはり本物は違う。

迫力も存在感も圧倒的だ。

どんな事でも極めれば、人間は輝いて見えるものだ。
いやいや、それはありえない。

じゃあ夢か幻か。

これは現実だ。

走馬灯のように頭の中で何度も考えを巡らす空色の耳に、御裏の
大声が響く。

「下だ、グラウンド！」

空中で両手に大降りの刃を持つ武器を作り出した御裏が、重力に
任せて落下し姿を消した。

「っ……」

軽い頭痛を覚え、空色は額を押さえた。

現れたのだ、再び異変が。

グラウンドから御裏のハスキーボイスが聞こえた。

「名前はあるのか……いや、忘れたんじゃないって、俺の戦闘前の
挨拶だ！ ていうか、またお前か！」

御裏の叫び声と共に、何かが破裂する音が聞こえ、グラウンドが
明るく輝いた。

空色は弁当袋を拾い上げ、階段を駆け下りる。

途中で二階の窓からグラウンドを覗く。

土煙が舞う中、炎を纏った姿の敵が御裏の猛攻撃を受けていた。

「この力は、あの日、命が倒したはずの……」

最初に御裏と会った日、倒したか逃がしたかどちらか不明なよう
な台詞を吐いていた敵だ。

逃げ延びたアジタケーシャカンバラが再び現れたのだ。

御裏のように屋上から飛び降りる離れ業のできない空色が、必死
に階段を駆け下り、ようやく校舎の入り口に辿り着いた。

グラウンドには炎が渦巻き、校庭全体が燃えさかる。

一面に赤いカーテンが敷かれて揺れるようだった。

太陽のように燃えるグラウンドから、黒煙がもうもうと立ち込める。離れていても熱気が頬を打ち、のたうつ炎は眩しく、戦う二人の姿は見えない。

眩しい炎の中から、御裏が生成した自動車くらいの大きさはある、巨大な金属質の手が生える。

手の甲に刻まれた殺という漢字。

広げた指を握り締め、熱気で艶やかに光る拳を形作る。

「くられ！ 圧殺パンチ！」

掛け声と共に振り下ろされた拳を、業炎の中へ打つ。

拳が打ち据えた箇所より、青白い火柱が立ち上る。

炎の中より、続けて幾つも幾つもの拳が生み出された。

「パンチ、パンチ、パンチ！」

敵のいる辺りに大よその目安で、雪崩のような拳の攻撃が降り注ぐ。

端から見て、御裏の攻撃は相変わらず、気持ちいいくらい遠慮がなかった。

拳が地面を打ち、校舎が振動で揺れる。

敵の反撃により、噴水のような炎が垂直に噴出。

拳が水のように溶けて蒸発。

噴出した炎は、戦闘中の二人の上空までも溶かした。

溶解した拳が空中で固まり、雪のような粉末と化して風に舞う。

熱により溶けた空が、ゆっくりと流れ色を薄める。

ジリジリと大地を焼き、全てを灰に帰す妖光を前に、空色の足は無意識に後ろに下がる。

動悸がおかしかった。走ったからでも、熱気のせいでもない

生物として、言いようのない恐怖を覚える光景に、呼吸が浅く早くなり息苦しく、鼓動が激しく浪打つ。

人が足を踏み入れて許される戦いではありえなかった。攻撃音が止み残響の中、御裏の言葉が聞こえた。

「やるな、前より手ごたえあるじゃん」

答えるように白く輝く炎が集まり長い生物を形どる。

竜巻のような胴体を持つ大蛇かと、御裏は思った。

牙の並ぶ口、小さな前足に生えた鎌のような爪、力強さを感じさせる体型。全身より陽炎が立つ蛇よりも戦闘的な生物。

空想上の生物——火竜が長い胴体をくねらせ立ち上がる。

御裏の立っている場所を取り囲むようにとぐろを巻き、凶悪さを感じさせる顎の発達した口を開き吼えた。

火竜の出現により、グラウンドの炎が激しさを増す。

空色は顔を引きつらせ、戦場の手前で立ち止まる。

前回はいやおうなしに巻き込まれた。

だが今回は違う、自分から戦闘に踏み込もうとしていた。その一歩がどうしても出せない。

強がりでは口は悪いし、性格も攻撃的だと自覚している。それでも昨日までは高校生の女の子で、それとなくごく普通に暮らしていたそれが、地上から一気にエレベーターで高層ビルの屋上に昇ったように、この世の頂上決戦のような戦いに巻き込まれた。

怖い。

正直なところ、このまま悲鳴を上げて逃げてしまいたかった。

だが、あの炎の中では、いつからかたった一人で戦ってきた、強くて、ぶっきらばうで、少し抜けてる、立ち振る舞いが男の子のようで、素直な女の子が、今も一人で立ち向かっている。

彼女は戦うこと、自分の境遇に対して一言も愚痴も文句も言わない。

明るく笑って冗談交じりに、いつかどうにかなるさと希望を捨てなかった。

「私……」

口に出せなかったが、空色は心から、あんな性格になれば良かったと懂れた。

友達にでも何にでもなりたくて、強引に引っ付いていた。

御裏が創造した、グラウンドの端から端まで届く刃物が炎の中に浮かび上がる。

長く大きな刃物の中央部を、御裏は炎の中から突き出した両の手で持ち上げていた。

「ふっ！」

片足で弾みをつけ、御裏は体を素早く横向きにターン。

中央部を軸にして、コンパスの針が円を描くように、刃物が水平に回転し一閃する。

大地を燃やす豪炎ごと、刃が炎の竜を切断。

炎によって刃が解けて蒸発した。

アジタケーシャカンバラの首が刎ねられた。

見事断ち切られた首は、火花を散らし回転しつつ跳んだ。

炎を纏った首は、燃える火車のように空中の一点で静止し、目を見開いた。

「クウよ！」

アジタケーシャカンバラの首と空色の目が合った。

空色は自分の全てを打ち消す力を信じ、視線を逸らさずに言い放つ。

「この力は誰にも渡さない、私は私のものよ！ 私も命も負けないから！」

私に足りないのは、現状を打開しようとする勇氣。友達を信じて受け入れる気持ち。

命は大事な友達。

口にこそ出さないが、命の何気ない言葉にどれだけ自分の心が助かったか。

「我は追いやられた神なり、その力を見よ！」

飛び上がった首は、炎の尾を引き一直線に空色へ詰め寄る。

空色は両手を広げて伸ばし、燃える頭を受け止めた。

空の力は、アジタケーシャカンバラの炎を無効化できるのだろうか、相手の力をどこまで押さえられたのか。

手の平が燃え、受け止めた衝撃で空色は後ろに吹き飛ばされた。

手首に紐でぶら下げていた弁当袋が燃え上がり、一瞬で炭と化す。制服の袖も、紙が火に炙られるように灰と化す。

校舎の柱にぶつかる寸前、空色の背中に木々を編んだ円形のリースが現れ、衝突を受け止める。

髪留めが飛び、空色の長い髪の毛が広がる。

空色が受けた衝撃の余波が校舎を襲った。

窓ガラスが全て割れて吹き飛び、虹色の羽根のように広がった。

熱気が外壁を撫で、一瞬にして水あめのように溶けて形が崩れる。衝撃波により、解けて柔らかくなった校舎が傾き崩れた。

リースに咲いた一輪の薄桃色の花が、夜叉の声で喋った。

「無茶をされるな。主に打ち消され微力しか出せぬが、我も力を貸そう」

空色の力に弾き飛ばされたアジタケーシャカンバラの頭が、炎を失い空中でクルクルと回転する。

グラウンドの炎が消え、それまで見えなかった御裏が煙の中から姿を現す。

炎が消えた生首の落下地点へ、片手を上げて走った。

「オーライ、オーライ、ナイスパス！ 決めるぜ！」

何も持たない両手を挙げ、落下する頭に狙いを定める。

天空から細い一条の光が振り、アジタケーシャカンバラの頭部を

貫通して地面を照らす。

光と見えたのは、夜叉が創造した細い糸が日光を反射したものだ。つた。

アジタケーシャカンバラの頭部の内側を細い糸がかき回す。

御裏の声と夜叉の声が重なった。

「滅しろ！」

「退散」

空中の虫を叩き潰すように、御裏は両手を閉じた。

両手が閉じる瞬間、巨大な門のような板が現れる。

敵の頭どころか、人を数人集めて軽く押し潰しそうな大きさの板がぶつかり、甲高く鼓膜の奥に響くような衝撃音を発した。

プレス機に挟まれたように、アジタケーシャカンバラの頭部は隙間無く合わされた板に押し潰された。

夜叉の糸が切れ、作りかけの綿飴のように空中に溶けて消える。

木々を編んだ円盤のようなリースの上で、空色は両腕の痛みを堪えて身を丸くしていた。

腕が折れたようだ。

骨折と火傷の痛みで動けずに、歯を食いしばって悲鳴を抑え、目の端で御裏の姿を捉える。

合掌するように合わさった御裏の両手から生えた板の隙間より、くぐもった悲鳴が聞こえた。

叫び声に合わせるかのように、一斉に炎が噴出す。

熱せられ灼熱の色と化した板から漏れる炎が消え、悲鳴が消えた。戦いが終わったと感じた空色の気が揺るみ、眩暈を起こしうつ伏せに倒れた。

「ナイスアタック俺、そんで終了つと。もう出るなよ」

挟んだ板を離すと、押し潰した箇所を確認する。

そこには焼け焦げて潰れた何かだった物が張りついていた。

御裏は自分がやった結果を見て気分が悪くなった。

「うわぁ……しばらく焼き魚食えない。見なかったことにしよう」
嫌な結果と記憶を過去に流し、両手の武器を消した。

グラウンドは焼けつくされ、サッカーのゴールは炭に、砂は溶けて半ガラス状になっていた。

現実であって、敵の影響下にあった世界。

力を発していた神が消えた。

残りの力を発揮していた御裏が立ち去ると、潮が引くようにグラウンドが元の状態に戻る。

グラウンドには白い砂、網の一部がほつれたゴールは元通りになり、つい数秒前の光景がまるで夢のようだった。

世界は勝手に動いている。異物が消え、あるべき姿に戻る自浄作用が働いただけだ。

それこそ、潮が満ちて引くように、当たり前の事だった。

「あー、ほんとに暑かった。汗かいたぜ。ヒリン、良くやったな無事か」

額と深い胸の谷間に汗を浮かべた御裏が駆け寄る。

力なく寝ていた空色が、苦笑して目を開く。

「クッ。命に心配されるなんて、相当弱っているように見えるんだ、一生の不覚。腹が立つから顔を見ないでよ。そっちは？」

「おう、ばつちり。ヒリンが火を消したんだろ、そしたら急にヘナヘナになりやがったから、一発で倒したぜ。見た、見たよね、ヒリンの力もすげーけど、俺ってかっこよかったよな」

二十六 終幕（前書き）

最終話です！

御裏は（実は）超スタイル抜群、巨乳で派手な女の子です。

二十六 終幕

文字をペインティングしデコレーションされたネイルの親指を立てた御裏が「やったぜ」と笑顔で言った。

あまりにも屈託のない明るい笑顔に、空色が呆れたように声をかける。

「まあね、何パーセントかはそうでしょうね。後片付けしてきたの？」

「後片付けって、終わったらいつも勝手に元通り…… ああっ！ ヒリンその手どうした。ちよっと見せろ」

御裏が焼け焦げた空色の手を持ち上げる。

空色が苦しげなうめき声を発し、全身を震わせた。

「ごめん、痛かったのか。ヒリンには凄い力がある筈なのに、大怪我してるから驚いて」

額に汗を浮かべ、何度も苦しげな呼吸を繰り返し、空色は弱りきった声で話す。

「触られなくなかったから、わざと離れるように嫌味を言ったのに…… あのね、夜叉が言うにはね、まだまだ力を使いこなせてないって。私、もっと強くなるよ。だから、これから、ちゃんと任せて」

「ああ、そ、そっか……」

御裏はどう答えようか迷った。

空色の力は異変に対しては非常に強力だ、本人にやる気があるのも確かだろう。しかし、戦い慣れるまでに今みたいな大怪我しては身が持たない。

一度、目の前で死なれかけてからは、御裏は空色に関しては用心深くなっていた。

強がっているが、実際は普通の高校に通う女の子なのだ。

空色を守る為に、戦いから一歩退ける言葉を言おうとした。

「俺思っただけど……」

「待ちなさい。私が怪我して可愛そうとか、死なれたら困るとか、後ろに下がっているとか女性差別のような言葉を言わないよね」

「俺も女性なんですが、一応は……言おうとしたのそれ、心配しているし言うさ。酷い怪我だ、大火傷だぜ。どうしても痛くて我慢できなかったら、本物には劣るかもしれないけど、薬作るからな」

「いい気味ね。一人で戦っている命が、いつ大怪我するか死なないか心配で見ている、こっちの気持ちも少しは分かった？」

「俺の心配してたの……うわ、ちよつと感激して涙出そう。しかし、俺とヒリンは力の種類が違うだろ、俺はそう簡単にやられないって」

「いい、私を戦線離脱させることは、せつかく二人揃えば無敵なのに、力が分散して戦力は半減以下になるのよ。それこそ敵の思うつぼじゃない。いずれ私はもつと力を使えるようになって、いつか一人でも無敵になるわ。そしたら二人で、あれ……」

自分の言った台詞を考え直し、頭を振ってから空色が言い直す。

「訂正。無敵になったら一人でもいけそう、誤算だわ、怪我で集中力が切れたのかしら。でも一人より二人なら、便利な手下……いえいえ、協力してさらに強いでしょう」

「分かった分かった、とにかくまず黙ろう。そして冷やそう」

空色の両手の上に添えた手に御裏が手をかざす、水で湿らせたタオルが無から現れる。御裏は空色の手にそつとタオルを巻いた。

「どうだ、少しは楽になったか。今すぐ救急車呼ぶからじつとしていろ、いや保健室に行くべきか。大騒ぎになりそうだな」

タオルを巻き終えた御裏が、胸の谷間から携帯を取り出す。

空色はそんな場所に物をしまい込む人物を、産まれて初めて間近で見た。

「何度見ても、何も無い所から物が現れるのって、便利で不思議だと思う。だけど携帯はそんな場所に隠していたのね」

「気分だな。大きいとこういう使い方もあるんだぜ、汗で湿るのが難点だ」

御裏は110番と119番のどちらに掛けたいのか悩む。空色に尋ねてみたいが、自分をいじめる絶好のネタを与えることになりそうで、だけど一刻も早く呼ばないといけない。御裏は悩んだ。

レリーフに咲いた花から夜叉の声が聞こえた。

「しばし待て」

「あ、夜叉の声がした。うん、待つよ。待つ待つ」

あれ、番号って三桁だったわけ……といよいよ混乱に陥っていた御裏がほっとして答える。

助かった——御裏は期待を込めて待った。

「空の人の肉体、我が身と同じなり。傷なら直ぐに治る、その体死ねぬに近い」

空色は腕の焼け付いて千切れるような痛みが、ずっと引くのを感じた。

「え？ 痛くなくなってきたよ。命、タオル取ってみて」

御裏が冷やしたタオルを外す。

焼け焦げた手の平の皮が、日焼けした皮膚が取れるように剥げ、下から綺麗なピンク色の肉と皮膚が再生されていた。

見る見るうちに傷が治り、折れていた骨も繋がる。

自由に動く痛みの引いた腕を、不思議そうに眺めていた空色の目がキラんと光った。

「治った……もう痛くもない、ちゃんと動く。これって、本当に無敵になれて事よ。打ち消す力に、不死のような肉体、それに最終兵器並みの破壊力を持つ下僕一号まで手元に揃ったわ。計画に抜かりなしよ！」

「下僕って誰だ！ つい慣れて聞き逃しそうになったけど怒るぞ。それはさておき、誰も倒せない殺せないなら、無敵の女王にいつか

なれるな。俺が最終兵器なら、ヒリンは世界のスイッチを切れる壊れないボタンか。未恐ろしいな」

「やるわよ、今日から私達の時代が始まるわ。あのラジオが何度も聞こえた、変なトラウマになりそうな出来事も消して、二度と起こさせないわ。世界の安定は私が決めるの、目指せ世界征服！」

空色は真面目な顔をしていた、顔立ちが綺麗なだけに様になっている。

焦げた服も歴戦の戦士みたいで何となくかつこ良かった。

しかし御裏は、真面目な顔で世界征服とか言い出す人間は、とても危ない奴だと思った。外見が綺麗なのもさらに異常さを醸し出していた。

そいつは友達で実際にやりかねない。

でも最終的にはまあ、それなりに、自分の毒舌を聞いて貰える世界を残すような気がした。

ヒリン様がトップになれば誰も逆らえないであろう。御裏は酷い目に合うかもしれないが、意外と世界は平和になるかもしれない。

「気合入ってるなー、逆に俺はお前の台詞がはまり過ぎて、お前の精神と世界の未来が不安になった。ヒリンは勢い余って神にでもなるつもりか？ まあ、世界をヒリンが征服したら俺も元に戻れそうだけど……ん、人類はその時まで生きているよな。文明は間違いなく病んで崩壊しそうだけど」

「なーんだ、それこそ無駄な心配、または取り越し苦労、取らぬ狸の何とかよ。私が人類を全滅させる訳ないって、分かってないな色々。自分が出したハガキが延々と読まれる恐怖、どれほどの屈辱だったか。だからって聞いた人間を全滅させるなんて非道德的な事はありません。私いい子でしょ」

ハッと何かを悟った御裏が掠れた声で叫ぶ。

「何だと！ のりっこさんはお前だったのか！」

「そっちに突っ込みするんだ」

「まず、どうしてのりっこなんだ、それを教えろ！ それに友達いたのか！ 知ってしまったら授業中に気になって……授業？」

そこでふと、二人は授業がとくに始まっていた事に気づく。

「ヒリン、時間って無常に過ぎるよな……」

空色は、またしても出席を取れず肩を落とした御裏の背中を叩く。

「私はとくに気付いていたよ。だけどつましい乙女としては、戦闘中だったから邪魔しないように、控えめに命を見守っていたの。それで、授業はどうするの中間抜けさん？」

「やつちゃった、昨日に続いてまたしても落とした。もう飛んで行こうかな、遠いお空の向こうにある気がするだけの、夢の国に」

頭を抱える御裏に対し、木々の環に乗って宙に浮かんだ空色は鼻で笑う。

「世界を支配すれば、命の学歴なんて小さい問題、幾らでも操作してあげるから。だけど頭の使い勝手が悪いのは、世界じゃなくて命の問題だから、努力と根性で何とかしてね」

「あのなあー、いよいよ性格悪くなってない？ 三度の飯より嫌味言うの好きだろ、実は女王様タイプで悪だなお前。いけないいけない、楽できると思ったら、少しだけ悪の道に気持ちが揺れたじゃないかよ」

「悪じゃないの、これは大人が少しだけ都合を合わせるって言うの」

「おっとなーだなヒリンは。とは言ってもな、それまでずっと留年つても格好悪いし、途中からでも言い訳して出るとするか。先生が情けで時間数くれるかも。何て言おうかな、やっぱ無難にトイレか」

言い訳を考えながら御裏が教室に向かう。

「あら、でもねもう配下に屈する報酬は受け取ったじゃない」

「またまた変な事言っで混乱させようとしやがる。いつだよ。俺さ、お前から何か貰ったつけ？」

「100円」

「あ、あれは買収か！ そんなに汚い金だったのか！ 返す、返すから取り消してくれ」

「ふーんだ、汚いのならもう返せません。汚したならクーリングオフの対象外よ」

「そこを何とか、最初から真っ黒じゃん……って、話は後でな。マジでヤバイから授業に駆け込む」

御裏は頭を掻き、あああーつと変な叫びを上げて走り出した。

その後ろ姿を笑って眺め、レリーフに乗って飛んでいた空色が、不意に後ろを向いた。

「もうなの。ここにも違う世界から来たお客様がいた、早速力試しね。えーと、私が言うところかな」

全てを打ち消す力を込めた手が、目の前に伸びる。

「存在すら目障りなのよ、このクズ」

相手は夜叉でも御裏でも家族でもない、遠慮はしなかった。

「語尾がしっくりこない……なら、こうかな。『目障りだ、彼岸に消えろ、ゴミ以下め』」

空色は無表情で当然のように言い放つ。

「はあ……言葉も勿体無い」

落ちたゴミを見るような感情の籠らない瞳で対象を眺め、全てを打ち消す力を込めた手で相手を掴む。

端から引きちぎり、わざと消滅させぬよう、力の実験台としてゆるりと攻撃する。

「うふふふ……ああ醜い。お似合いよ、もっともつと醜い姿をさらしなさい、無様に消えろ」

引きちぎるのに飽きた空色は、指先でポツポツと穴を開けて弱らせる。

消される存在は、自らが何ゆえそこまで嫌われ、生きる価値すら否定され、訳もわからず心の底から震え上がり消滅した。

「私と命の邪魔をしないで。だってね、そんな事を考える存在なんて、私とっても悲しくなるの。例えば世界が相手でも許さないから、滅ぼしちゃうかもね。それは相手が悪いの、私は悪くないわ。ということはね、あなたのせいなの。あなたのような、存在価値の低いボブキャラ以下のせいで世界が滅んだら悲しいでしょ？」

御裏と空色は、翌日も学校にて普通に挨拶して授業を受ける。

今日は無事に学校に無事たどり着けて、機嫌の良い御裏は、分かっている授業に飽きて居眠りしていた。

空色は、窓の外を眺めながらそつと携帯を開く。

携帯の待ち受け画面には、御裏と夜叉の間に、空色の写真を合成し割り込ませた、三人並んだ写真が写っている。

そしていつしか、御裏は本当の自分を取り戻す——力がある故に、神によって玩ばれた姿と状況を打ち消すため。

空色は冗談のようで、本気で世界を狙っていた——性格が破綻して、自分の思い通りにしたいから。

夜叉は空色の中で、力を封じられ半分眠ったように時を過ごす。

いずれ訪れる力を持つ者との戦いに備えて、神の力を持つ二人は、平穏な一時を過ごしていた。

二十六 終幕（後書き）

これで終わりです。

最後まで読んで下さってありがとうございます。そして、御裏と空色に（夜叉も）付き合って頂いて感謝です。

読んで下さるから、登場人物も生きているように振舞えるのです。読まれなければ、ただの文字データでしかありません。

最初から読まれた方は気づいたかと思いますけど……

実は未回収の伏線や、はっきりと出していない設定があります。

何で御裏が女の子なの？ 空色の性格は？ てか夜叉は何？

（今後、続編の掲載は、今のところ考え中です）

最後に、重ねてお礼です。

限りなく無数にあるネットの世界で、夕雲の作品のページを訪れてくれた皆様に、心よりお礼を申し上げます。

ご意見ご感想、評価など両手を広げてお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188t/>

二人は神の力を 無色の緋

2011年10月10日03時18分発行